お嬢様のフーガ～後輩で同級生でストーカーで～

しゃーむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お嬢様のフーガ～後輩で同級生でストーカーで～

【Ｎコード】
Ｎ４６６２Ｕ

【作者名】
しゃーむ

【あらすじ】
県立西高校の二学年に進級した来栖真。ごくごく普通に一年間を過ごしてきた真の前にお金持ちのお嬢様、神宮寺梓が入学してきた。
二年前、不良から助けてくれた真に好意を寄せる梓は少し常識離れしたアプローチで真に迫る。
しかし、そんな梓の気持ちを受け入れられない理由が真にはあった。
それは梓の父親から娘に手を出したり悲しませたりすれば、真の

身に何が起こるかわからないという脅しを受けていること。
　気持ちを受け入れるわけにはいかない、突き離して悲しませるわけにもいかない。そんな板挟みの中でお嬢様に振り回される高校生を描く青春ラブコメ物語。

俺の青春はこいつがいるからいろいろ大変で

春だ。

俺が通う県立西高校の正門前には、立ち並ぶ桜並木が己の存在を主張するように花びらを撒き散らしていた。この近辺では一種の名物でもある桜並木ではあるけど、その桜並木の間を往復する工程も今年で二年目になるのでさほど感動を覚えない。去年は同じ中学出身の友達と『こりゃ見事だ』と互いに肩を取り合い新しい門出を祝ったりしたもんだ。

二年前、中学最後の年は何かと大変だった。去年、晴れて高校生となり、心機一転学生生活を満喫してあろうと意気揚々としていた一年間は可もなく不可もなく、普通で、平凡で、俺の言い方からすると平和な一年間だった。

でも、その平和な日常が崩れ去る時がとうとうやって来てしまったのだ。

平和と言えば、友達彼氏彼女なんかとのほほんな日常を送ったり、今の季節ならつまらない授業が春眠を誘って、窓から見える雲や小鳥なんかをぼんやり眺めたりと、ごくごく普遍的な日常だったりするわけだ。中には年中通して躍動感のある学生生活を送ることが青春だと言う友達もいたりするが俺はそうは思わない。それは中学最後の年で思う存分味わったからな。

俺の名前は来栖真（くるすまこと）。これまでの流れからわかってくれると思うけど、この春、無事県立西高校の二年に進級を果たした青春真っ盛りのいち高校生。去年の成績は並み。部活にも所属せず、特に目立ったこともなく同級生に紛れて一年間を過ごしてきた。家族構成は両親、妹の核家族である。

簡単に自己紹介が済んだところで俺の平和が崩れ去る原因を説明しようか。それは、今年この高校にある人物が入学してきてしまったこと。本来ならこんな公立高校に来たりする奴じゃないのに、高

校に来てまで俺の平和を脅かすつもりなのだ。
「せーんぱいっ。今日もカッコいいですねっ！」
噂をすれば、だな。いや、俺がただ現実逃避していただけか。今現在は登校中。今思えばこいつは朝、家を出てから俺の腕をがっしり掴んで隣を歩いていた。俺は見えないふりをしていただけなんだ。そう、朝からこいつにはずっとこういうことを言われ続けていたおぼろげな記憶がある。
俺の隣で太陽さえも溶かしてしまいそうな笑顔を輝かせるこいつは神宮寺梓（じんぐうじあずさ）。背丈は小柄で茶髪のツインテールを髪ゴムのあたりから巻くように垂らしている。一般的に言って美少女に分類されるこいつは、スラッとした体形で目も大きく愛らしくて、表情筋を器用に使ってころころと表情を変える怪面百面相だ。これだけならば可愛いのにこいつはとんでもない奴なのだ。中学までは黒髪ロングストレートで可愛いおしとやか系美少女だった梓は、高校に入って大人っぽく見えるようにと髪を染めパーマをかけた。ツインテールが子供っぽく見えるのに。
いくら校則が緩い学校とはいえ、県立校で茶髪が許されるかと言うと、どうしてこうして、こいつは特別だから許されてしまう。
なぜならば梓の家は大金持ちなのだ。権力持ちなのだ。そして怖い父親持ちなのだ。政界にもその力は及んでいるらしい。こいつの親が許すように言えばお偉いさん方もへこへこ頭を垂れるしかないのが格差社会の現状だ。ああ憎たらしい。
きっかけは些細なことだった。金持ちのお嬢さんがどうしてか街中で不良に絡まれているのを助けたのが運のツキ。それ以来、こいつは俺のことを大袈裟に命の恩人として俺の命を危険にさらす行為を幾度となく仕掛けてくる、非常に厄介極まりない人物へと昇華してしまった。いまさらだけど、こいつから目を離してしまった警護人の斎藤さんには腐るほど文句を言ってやりたい。
つまり、俺は人助けをして胸キュンみたいに古典的な脈絡で梓に惚れられてしまったのである。

梓はちょっとした有名人らしく、こいつの家のことはすぐにわかった。
可愛いけれど俺のタイプじゃないために、執拗なアプローチを必死に回避してきた。と言えば格好いいけど、タイプがうんぬんよりも回避しないとならない事態が発生してしまった要因が大きい。
命に関わるからな。
俺の命の危険はまぁ、娘を溺愛し過ぎている梓の父親のせい。以前、夜中に梓が俺のベッドに忍び込んでいたのがこいつの父親に知られてしまったのち、俺は強面の方々に神宮寺家へと強制連行され『娘を悲しませることや娘に手を出したりすれば、君のことを新聞にも載らないようにこの世から抹消することも可能なのだよ』とまだ中学生だったそれはそれは鋭い眼光とともに死刑勧告を受けてしまったのである。
梓の性格は明るく、そして超がつくほどポジティブなので今のところ梓を悲しませるという事態には陥っていない。しかしこの先、俺がいつまでも梓のアプローチを拒否し続け、その結果梓が悲しむことになったとすれば、手を出すなと言われている俺にはなす術がなくなってしまい、家族を悲しませる結末を迎えることは目に見えてわかる。
「梓、くっつくなって。ほら、あいつなんてどうだ？　俺なんかよりももっとカッコよくて頭も良さそうでスポーツ万能そうだろ？」
と通りすがりの優等生っぽい奴を指差して言ってみる。梓が俺に興味を失くしてしまうことが最も安全でかつ合理的な解決方法なのだ。
「真先輩の方が百倍カッコよくて百倍頭が良くて百倍運動神経抜群ですよ！」
お前は俺の何をどう見たら目を輝かせて自信満々にそんなことが言えるんだ。彼の何もかもを百倍にしたら東大オリンピック選手の誕生だ。実際いるのか？　知らないけど。
いかんせんこいつが隣にいると目立ち過ぎてしまう。もう一度言

うがこの高校は髪染め禁止。たった一人を除いて。
生徒たちからいかに疑問を投げかけられようと、不満を言われようと、教師たちは黙認するしかないのだ。そんな梓と一緒にいる俺もどんな目で見られているのか、想像すると頭が痛くなってくる。と言っても梓の素性がみんなに知れ渡るのも時間の問題なので一方的に羨ましがられるか可哀想な奴と見られるかどちらかだな。
俺と梓の二人を無駄に祝福するように咲き乱れている桜並木を抜け昇降口を過ぎるとしばし安息の時が訪れる。梓は一つ下の後輩なので当然教室は別だ。これから放課後まで、今までとは若干違うものの、まだ新しいクラスメイトの顔ぶれを新鮮に思いながら過ごすことができる。
「それじゃ先輩、またあとで」
――――と思っていた。

その日の朝のＨＲ、俺のクラス２－Ａ全員が俺を含めて目を丸くしていた。
「えー……本日からこのクラスに昇級することが決定した神宮寺梓さんだ。一応みんなの後輩にあたるがクラスメイトになる。とても成績優秀なので神宮寺さんに負けないように」
担任の古典教師、今泉先生は坦々と話していくがクラスのどよめきが収まらないのは言うまでもなかった。
昇級って何さ、公立でもありえるのか？　しかも何故うちのクラスに来る？　使ったな、使ったんだな理不尽極まりない権力を！
大体昇級ってお前、まだ担当教師の自己紹介くらいしか授業受けてねえだろ。
梓はにこにこと満面の笑みを浮かべて一礼したあと、俺に熱い視線を送っていた。俺は目を逸らす。ああ、今日も小鳥が太陽と戯れているなぁ。
「それで、えーと、神宮寺さんの席は……」
「先生、梓はあそこの席がいいです！」

言うが早いか、梓は窓際最後尾、山下くんの特等席を指差し今泉先生の言葉を待たずツカツカ歩き出していた。山下くんの席の前は、俺だ。梓はそのまま俺には一瞥もくれず山下くんに言った。

「そこの席、梓に譲ってくれませんか？」

背中に目がついているわけではないので山下くんがどんな顔をしていたかわからないが、しばしの沈黙が訪れたことで呆気に取られている様がよくわかる。窓際、最後尾の席を新学期早々の席替えで手にした山下くんはかなり喜んでいたからな、ここは拒むはずだ。

「ど、どうぞ」

っておーいっ！　何故だっ！　どうしてだ山下くんっ！　君はあれほど喜んでいたじゃないか！　そこの席を譲ってしまえば俺にどれだけ迷惑がかかるのかを君はわかっちゃいないっ！

怪訝に思い振り返った俺の目に映ったものは、小切手を大事そうに握り締めている山下くんの朗らかな笑みだった。金額のほどはわからないが、あっさり特等席を明け渡したことを考えれば小遣い以上の金額が書かれていたことは間違いなさそうだった。

あっさりと買収された山下くんはその後、わざわざ空き教室から机と椅子を運んで教卓の真横、みんなの席よりさらに前に陣取った。しかしその顔は満足そうで「そこでいいのか？」と聞いた今泉先生も「はいっ！」という清々しい声に何も言えない様子だった。

そのまま強引にＨＲを突き進め、束の間の空き時間が訪れた。

「せーんぱいっ！」

背中から声がかかる。無視だ無視。俺の安全地帯だったクラスの中にまで現れやがって。学年始まりわずか一週間足らずで校内のどこにも俺の落ちつける場所がなくなっちまった。クラスメイトの奇異の視線もすでに集中している。校内では俺と梓が一緒にいる噂がすでにたっていると言うのに。

「こっち向いてくれないんだったら梓脱いじゃいますよー？　クラス中の男子に視姦されちゃいますよー？」

「おまっ、馬鹿っ！」

勢い良く振り返ると待ってましたと言わんばかりに機嫌良く笑う梓が俺を見下ろしていた。もちろん制服を脱ごうとはしておらず、まんまと振り向いた俺は頭を抱え込んだ。
「……何だ？」
「梓、まだ二年の教科書持ってないんですね。だから先輩見せて下さい」
「隣の人に見せてもらいなさい。それが普通だろ」
「それじゃ意味がないじゃないですか」
意味がないとはどういうことだろう。俺にどうしろと言うんだ。後ろを向いて教科書を見せながら授業を受けろと？　冗談じゃない。後ろを振り向く度に目が合ってしまう梓の隣の坂本さんのジト目に耐えられそうにない。
「梓は一日中先輩を眺められるこの席に決めたんですよ？　それなら先輩も後ろを向いててくれなくちゃ」
梓は憮然として言った。
みんなは己の運を頼りに席を決めるのであって、お前のように自由な席に座れるもんじゃないからな。
「眺めるなら背中を眺めててくれ」
俺はそう言って前を向き授業の準備に取り掛かると、梓は後ろで「うう～……」と唸る。しかし突然「そうだっ！」と声を上げて全速力で教室を飛び出して行った。何をしに行ったかは知らないがもう授業始まるんだけどな。まぁ、あいつなら多少遅れたところで叱れる教師なんていないんだろうけど。
俺は苦笑しつつ、梓が出て行った教室の出入口を眺めていた。
そして――――
俺の机の前には背丈１ｍほどのスタンドミラーが置かれた。
いい具合に角度を調整して、俺が黒板を見れば嫌でも後ろの梓が視界に入り込んでしまうように。
授業の前、一時限目の数学教師が訝しげな目を鏡に向けたが、後ろの梓を見ると納得したように何度か頷いて普通に授業を開始した。

何に納得したってんだ。
授業中は梓が鏡を通して俺に手を振ったり投げキッスをしたり、やたらと動きまくる梓のことを鏡に映る坂本さんも迷惑そうに見ていた。気持ちはわかるけど俺にどうにかしろと目をやるのはやめて欲しい。
鏡を見て梓と目が合う度に口パクで何かを言ってくる。口元に手を当てて『ア・イ・シ・テ・ル』ちゅっ、と大袈裟に口を開けてそんなことを言っている、ように見える。目が合う度に念仏のように呟かれると催眠でもかけられているようだ。あとは背中に『スキ』と指でなぞったり、首筋に息を吹きかけられたりと、授業中にたっぷりと羞恥プレイを味わうことになった。
一時限目が終わり、嘆息混じりに振り返る。
「梓、聞いてくれ。鏡を置いたとこまではまぁよしとしようじゃないか」
お前が前の席でずっと後ろを向いているよりかマシだからな。
「しかしな、俺もいち高校生である身だから勉強しないとならないんだ。まだ学年が始まったばかりでそんなに内容が進んでいないとはいえ、いきなり序盤でみんなと差がついてしまったら追いつくのが大変だろ？　鏡でお前とアイコンタクトしよう。お前の気持ちを感じ取ってみせよう。だけど悪戯はやめてくれ。とてもじゃないがまともに授業を受けられない」
まさかこれほどとは思っていなかった。中学の時は学校に梓がいなかったから授業中にまで被害が及ぶことはなかったし（それでも学校に現れたりはした）、去年は学校にいる間は全く被害がなかったから安心しきっていた。
梓は少しの間「う～ん」と頭を悩ませて、
「わかりました。でもちゃんと梓の目を見て目で会話して下さいね」
「わかったわかった。わかったから手は出すなよ？　息も吹きかけるな」
梓はにっこり笑って肯定の意を示した。

そして次の世界史の授業中、梓は怪面百面相の名の通り、表情をころころと変えて目で何かを訴えていた。その中に驚きと喜びの色が多かった気がするけど俺は何も気に留めることはなかった。当然、梓が何を伝えようとしているのかわかるはずもなく、適当に目で相槌を打ちながら特に興味もない世界の歴史とやらを脳に記録させる行為に勤しむ俺であった。

そして謎は解けた。俺が馬鹿なのか梓がずる賢いのか。

「じゃあ先輩行きましょう」

「は？」

世界史の授業が終わると開口一番、梓がそんなことを言いながら鞄を片手に俺の腕を掴んだ。

「さっき言ったじゃないですかぁ」

「言ったって、何を？」

「この授業が終わったら一緒に抜け出しましょうって。梓驚いちゃった。まさか先輩が快く梓の申し出を受け入れてくれるなんて思ってもみませんでしたから」

「は？　俺がいつそんなことを了解……この授業？」

その時、梓の口がいやらしく吊りあがるのを俺は見逃さなかった。

『ちゃんと梓の目を見て目で会話して下さいね』……にゃろう。やたら驚いたり喜んでいたのはこういうことか。したり顔をやめろ。

「約束守って下さいねっ、先輩」

「そんな一方的な会話で約束は成立しないんです」

「梓の気持ちを感じ取ってくれるって言ったじゃないですか。あれは嘘だったんですか？　先輩は平気で嘘を吐くような極悪非道の詐欺師さんだったんですか？」

あー……うぜぇ。

「そうだよ。俺は詐欺師だからこんな俺はお前とは釣り合わないよな。だから早々に他の良い奴を見つけた方がお父さんも喜ぶぞ？」

「いいえ。梓は先輩一筋です。先輩が嘘つきと言うのならば、未来の婿養子のためにもパパにしつけを頼むしかありませんね」

「じょーだんだーよー。どこに行くんだ？　少し早目の昼食にでもするか？」
婿養子とかなんとか言っていたけどそんなことはどうでもいい。あの父親だけはダメだ。何があろうともあの人の前に立つわけにはいかない。それだけで俺の寿命が一年は縮む。
梓はツインテールの片方を指でくるくるまきまきどこに行こうか頭を悩ませているようだった。そのまま授業が始まってくれることを祈ったが、それを悟ったのか「歩きながら考えます」と俺の腕を強引に掴んで教室を飛び出した。
後日談ではあるが、強引に連れ出したのが梓というみんなの証言から俺へのおとがめはなしだった。俺はまだクラスメイトからは梓に振り回される可哀想な奴という位置で踏みとどまっているらしかった。これが梓の仲間になったところで俺の青春は終わりを迎えることになるだろう。
かくして、梓が教室にやってきた初日から強制早退させられてしまった。先が本当に思いやられる日常がここに幕開けになってしまったのである。

頼れるものは同級生

梓が俺のクラス２－Ａにクラスチェンジした翌日。

今日は珍しく朝から梓が家にはやって来ず、久しぶりに惰眠を貪ることができたのは今日一日を幸せに過ごすことができるという啓示にも思えてしまう。

昨日はあれからまず、やたら高級そうな、いや、高級レストランで昼食を取った。今まで散々連れまわされたおかげで世界中の珍味やら一流シェフが作る絶品料理を口にしていた俺は、ひと品で俺の一月分の小遣いを超える料理を特にありがたみもなく平然と平らげた。慣れって怖いよね。梓に付き合わされる中で唯一至福の時だ。

それからは梓が街デートがしたいと言ったので、制服のおかげで一般市民の方々の視線が痛かったけど街をぶらぶら（梓的にはらぶらぶ）して過ごした。途中至る箇所で街角に見え隠れしていた梓の警護人、斎藤さんが執拗な視線をこちらに送っていた。梓が危険な目に遭わないように見張っていたのか、俺が梓に手を出さないように見張っていたのか、できれば前者であって欲しい。

ずっと街をぶらぶら（らぶらぶ）、ぶらぶら（らぶらぶ）。さすがに歩き疲れたので神宮寺家御用達リムジンを呼んでもらい優雅な帰途についた。うん、結構都合良くお世話になってるな、俺。

それは昨日の話し。今日は今日。静かな朝を迎えられた。部屋から出て顔を洗いリビングへ行くと、母さんが早起きして作ってくれた朝食が芳ばしい香りを放ちながらおいでおいでと手招きする。妹はすでに制服に着替えてエッグトーストを頬張っていた。

「おはよう。お兄ちゃん」

「おはよ」

俺の妹、来栖あゆみ。十五歳。黒髪ショートカットで運良く兄に似ないで生まれてきた、実の兄が言うのもなんだけど可愛い妹だ。決してシスコンなどではなく、周りの意見を含めた一般的評価だ。

友人、高橋裕也（たかはしゆうや）の女子総合評価によると、俺の妹はアイドルクラスの最高評価を頂いている。かなり個人の趣向が偏っていて今一つ信憑性に欠けるものの、地味にアンケートが取ってあり男子諸君のお墨つきだ。ちなみに俺の妹は某歌手の長崎あゆみのことを同じ名前だからという理由でファンになった。どうでもいい話しだけど。

「あれ？　お兄ちゃん、今日学校お休み？」

あゆみはのっぺりとした子供っぽい喋り方をする。今の一言でも十秒は使ってしまったかもしれない。

「まだ制服着てないだけだよ。そう言うお前は随分早いな」

「今日から部活の朝練なんだぁ。あゆみはまだまだ下っ端だからぁ、早く行って期待の新一年生のためにグラウンド整備しとかなきゃなんだー」

二十五秒。

「いや、それ期待の新人とかじゃなくて一年がやるもんじゃないの？」

「そうなのー？　えへへ、でもね、あゆみは整備がとても上手だからっていつも整備とかお掃除とかお茶作ったりやってるんだぁ。みんなね、すごく助かるって言ってくれてるよ。部長さんがね、あゆみにいっぱいお仕事くれるの。この前なんかね、みんなで用事があるってあゆみ一人で部室も道具もグラウンドもぴっかぴかにしたんだよー。すごいでしょ」

ジェスチャー混じりで話し始めて二分後、あゆみは自慢げに誇らしげに胸を張って言い終えた。所属は女子ソフトボール部である。決してマネージャーなどではなく万年補欠なのだ。俺は何も言わないでおこう、あゆみが満足してるならそれでいいじゃないか。しかし、兄としては……。

「あゆみ、ちなみに部長さんたちはその時どこに行ってたんだ？」

「新入生の歓迎会だってぇ。すごいよねー、部長さんは気配りができてー」

「そ、そっか。よかったら部長さんのクラスと名前を教えてくれな

いか？」
「んー、えっとー、三組の花澤さんだよー」
ありがとう、俺はあゆみに礼をして牛乳を一口流し込んだ。ごくん。
花澤さんよ、俺の妹をこき使うなんざいい度胸だ。君には神宮寺家の力というものを身を持って感じて頂こう。妹のためなら梓に頭を下げることだって厭わないさ。
玄関であゆみを見送ったあと、鏡で自分の平凡な顔を眺め部屋に戻り制服に着替えた。
さっきも言ったが、今日は梓の奴が押し掛けて来ていないので気持ちが軽い。静かな朝というのも久しぶりだ。

築十年の我が家の玄関のドアを開け、まだまだ春の匂いが新しい外の世界に足を踏み出した。
うーん、なんとも清々しい。こう、左手に重荷がないのはこれほどまでに開放感に溢れているものだったのか。忘れてしまいそうだった。
「あれ？　真？」
家を出るとすぐに背中から声がかかった。昔からよく聞いていた声で、梓が現れてからめっきりこの声を耳にする機会が減ってしまった。
「おう、おはよ。千佳」
俺の幼馴染、笹野千佳（ささのちか）である。家が近所で保育園から現在の西高校に至るまでの長い付き合いだ。クラスは隣の２－Ｂ。
千佳は言わば才色兼備。成績優秀で運動神経も抜群。そのうえ性格も明るく人を気遣うこともできるスーパー幼馴染。生まれつき栗色の髪のミディアムショート。綺麗と可愛いの中間の整った目鼻立ちで、昔っから知っていなかったら一目惚れをしてしまいそうなほど眩しい女の子である。

「今日は梓ちゃん一緒じゃないの？」
クスッと悪戯っぽく笑い聞いてくる。その仕草になんとなく懐かしさを覚えて癒される。千佳は俺があいつに振り回されていることをよーく知っている。
「まぁ、珍しく」
俺はそれだけ言って歩き出した。そしてその横に足並みを合わせるように寄り添い歩き出す千佳。これが中学三年の一学期までは当たり前の光景だった。本来なら毎日こうして千佳と一緒に登校しているはずなんだけど、いつからかどうしてか俺の生活習慣は変わっちまった。ほんと、懐かしいよ。
「へぇ、真さみしそう」
誰がっ。そんな顔をしたつもりはないしそんなことを思うはずもない。これだけは間違いなく絶対とも言えるね。大体俺がどんなに苦労してるか知ってるだろ。心外だぜ、千佳。
「幼馴染としては、俺の気持ちを汲み取ってもらいたいもんだけどね」
「うっそ！　真がそれを言うの？」
千佳は驚いて、少しだけ怒気を含んで言った。
「え、何で？」
「え、えっと、それは、それは……なんて言うか……」
今度は恥じらうようにもじもじもじもじと、俺とお前はそんなよそよそしい仲か？
千佳も梓ほどじゃないにしろ怪面五十面相くらいにころころと表情を変える。
「じゃ、じゃあ私が何考えてるか当ててみてよ！」
千佳は頬を赤らめてやけくそ混じりに言った。一体何だって言うんだ。正直、わからん。逆に返されてしまったようで困惑。久しぶりに一緒に登校するのにいきなりその質問はないだろ。少なくとも梓よりは心が通じ合っているとは思うけど。
「わかんねぇよ。そんなもん」

「そっ……そうだよね……」
今度はほっとしたような残念がるような、そんな顔をした。
でもな、これだけはわかるぞ。君は梓より常識人。……いかん、何もかも梓を基準に考えてしまうのを止めよう。梓に心を支配されてるみたいじゃないか。
「そ、それで、梓ちゃんどうしたの？」
何かと梓のことを気に掛ける千佳だが二人はそんなに仲が良いというわけではない。と言うより梓が俺以外と親しげに話している姿は見たことがない。梓が通っていた中学時代のことなんか知らないし、高校に入学してからは俺としか話していないようなもんだし。
……あいつ、友達いるのかな？　いや、いるよな。友達くらい。友達がいないなんて寂し過ぎるだろ。かくいう俺も、梓のおかげで友達との触れ合いという奴が激減しているわけで、梓のことを偉そうに言える立場でもない。いやいや、梓のせいだっつーの。閑話休題。
「知らね。いつも向こうからの一方的な連絡だしな。いちいち気にしてらんねーって」
嫌でも付き纏われるからな。
「そっか、そっか、うんうん」
微妙に喜んでいるように見える千佳がいた。こいつ、梓のこと嫌いなのかな。まぁ、梓は明るい奴だけどとんでもない性格だから。人付き合いがうまいとは思えないし。
「じゃあ、久しぶりに一緒に登校だね」
懐かしい笑顔を向けて来る。平和を感じられていい。うん、いいぞ。
学校は俺の家から歩いて二十分程の丘の上にある。近くもなく遠くもなくって距離でいろいろ考えながら歩くのにはちょうどいい距離ではある。さすがに疲れているときは長い坂道が苦痛になる時もあるんだけど、バス代は自分の小遣いから出せと言われているので、渋々毎日地味に汗をかきながら歩いているんだ。

千佳は梓とのことには特に触れず、新しいクラスや部活の新入部員の話しやらで懐かしい声を俺の耳に届けてくれていた。
「あ、あのっ！」
そろそろ長い上り坂が見えて来るという時だった。十分ほど歩いたくらいか。頬を高熱真っ盛りのインフルエンザ患者並みに紅潮させた一人の男子生徒が俺たちの前に飛び出して来た。なかなかハンサムだ。細い路地で死角が多く、待ち伏せするならうってつけ場所だった。
やれやれ、これを見るのも久しぶりだな。
「千佳、先に行ってるぞ」
「えっ、ちょっと待ってよ」
待てと言われてもな、このままでは決して居心地がいいものではないのだ。
「すぐ済むから」と真剣な面持ちになる千佳。
すぐ済ませられるそいつのことを考えると俺も同情したくなる。
その男子生徒の目的は千佳だ。俺はこういった場面を何度も目撃してきた。朝に限らず放課後や場合によっては休日にまで。モテるというのも考えものだ。
千佳は俺が足を止めたことを確認したあと、その男子生徒と向き合った。
「あ、あの、僕は二年D組の長谷川といいます。ずっと、笹野さんのことを見ていました。よかったら、僕と付き合って下さいっ！」
長谷川くんはストーカー宣言しつつ、思いっきり頭を下げて言い放った。
そう、これは告白シーンなんだ。
千佳はいつものように困った顔をしていつものように言う。
「あの、長谷川くん、ごめんなさい。私、昔からずっと好きな人がいるの。だから、あなたとは付き合えません。本当にごめんなさい」
千佳が告白を受けた際に必ず使用する断り文句だ。
長谷川くんは「そうですか」と小さく呟いたあと、背中を向け学

校とは反対方向に走り去った。彼の横顔にはきらりと光る何かが見えたのだが、それを見慣れてしまっている自分が怖い。でも、長谷川くんは学校をさぼるつもりなんだろうか。

千佳は「ふう……」と小さく溜息を吐き俺の隣に戻って来た。そして心苦しそうに長谷川くんが走り去った方を見つめる。これもいつもの光景だ。

俺は何度この光景を見たかわからない。成績優秀、スポーツ万能、おまけに可愛い学園アイドルのような笹野千佳は当然のようにモテて先程のような告白を何度も受けて来た。恐れ多くも自分が千佳に釣り合わないと思う奴は思いのほか少ないらしい。その度にこんな感じで断り続けている。モテる女は辛いねぇなんてからかいもすれば鋭い睨みが返って来る。千佳にとって告白されるのは決して嬉しいものではなく、相手を傷つけてしまう、できれば避けたいことなのだ。

「二年になって何人目？」

「……四人目」

まだ十日も経ってないのに四人とは末恐ろしい。このままだと学年全男子が千佳に告白してしまうんじゃないか？　千佳は俺のそんな懸念を感じてか、

「今は新学年になって、少し勇気を出してみようって人が多いんじゃないかな。私が言うのもなんだけど」

苦笑混じりで言った。

人を傷つけ続けるってことがどんなことなのか俺には想像もつかない。千佳は優しいからきっと千佳もずっと傷ついてきてるんだと思う。幼馴染としては、そんな千佳を楽にしてやりたいとは思うけれど、俺にはどうにもできない。千佳が断り文句で言っている、好きな奴ってのがほんとにいて、そいつとうまくいけば万事解決するんだろうけど。

そのまま互いに何となく話しづらい空気が流れて歩き出し、信号待ちで足を止めた。

「どうしてだと思う？」
「え？」
千佳が唐突に聞いてきた。
「ねぇ……」
千佳は切なそうに少し濡れた瞳をこちらに向けて来る。拍子に俺の心臓はひとりでにポンプ機能を向上させた。そして、
「どうーして告白してくる人があとを絶たないのかな！　あれほど毎度のように好きな人がいるって言ってるのにさ！　普通そんな噂くらいすぐ広まるでしょ？　好きな人がいるっていうのに告白してくる？」
千佳は矢継ぎ早に悔しそうに涙まで浮かべて言い放った。本当に悔しそうだ。それが断り文句が通用していないからか、毎度断ってしまう自分に憤りを感じているのかはわからないが、とりあえずはその設問に答えることにした。
「そ、そりゃお前、好きな人がいるっていうのにお前が誰とも付き合ってないからだろ」
「はぁ？」
今度は露骨に怒りの色を見せてきた。俺、何か怒らせるようなこと言ったか？　何も変じゃないよな。正論だよな、よな？
ぐいぐい詰め寄ってくる千佳の勢いに負けて俺は思わずたじろいでしまう。顔が近いぜ千佳。
「大体真がねぇ――」
信号待ちで何故か千佳に責められていたその時、俺の前に見慣れたリムジンが停まった。横断歩道のド真ん前だ。信号変わったら邪魔だぞおい。そんなことを考えていると、
これまた見慣れた黒い服のおっさんに連行された。
俺は何の抵抗もできないまま、千佳につがるような目だけを残してリムジンの中に押し込められる。視界が反転して、そのままシートに投げ出された。
「おはようございます。先輩っ」

詰め込まれて体勢も整えられないまま走り出した車内で目にしたのは、今日もにこにことご機嫌良さそうな梓。朝、家に押しかけて来ないで油断していたらこれだ。金輪際、周囲への警戒を怠らないようにしなければ。

「今日は随分と過激な歓迎だなぁおい」

俺は明らかな嫌悪を顔に出す。

「えへへ、昨日は歩き回って疲れちゃったので車で登校ですっ。先輩の家に行くのが少し遅れちゃって車で合流できるところがあそこしかなかったから。遅れちゃってごめんなさい、先輩っ」

謝るとこはそこじゃねぇよ。無理矢理拉致ってごめんなさいと言え。それに俺が露骨にこんなに嫌な顔をしてるのに全然気にした様子も見せない。呆れるを通り越して感心してしまう。

梓の家は俺が住んでる住宅街や学校からは少し離れた場所にある。丘の上に建っている豪邸で、近くを通らずとも目立つ建物だからすぐにわかる。わざわざ毎朝俺の家に送ってもらってそれから歩いて学校まで向かっているそうだ。

「昨日はお前が遊びたいって言ったからだぞ」

「だって先輩ずっと歩いてるだけなんだもん。梓は先輩と一緒なら何だっていいんですけど、さすがにあれだけ歩いたら疲れちゃいますよぉ」

正直、お金持ちのお嬢様と遊ぶって言っても何をしていいのかわからないんだ。庶民の街で庶民の遊びをしたところで梓が楽しいとは思えないし。そんなわけで俺は何をしていいのかわからずひたすら街中を歩きまわった。別に梓を楽しませようと思っているわけじゃないんだが、男なら、ねぇ。

「よいしょっ」

俺が憮然としていると、梓が俺の隣に移動して俺の腕を掴んできた。せっかく朝は開放感に溢れていた左腕がまた窮屈になった。まぁ、ここから学校まで車で五分とかからないし、少しの辛抱だろ。

しかし、そんな俺の期待をいつも易々と裏切ってくれるのが神宮

寺梓である。
学校の校門が見えて来て、降りたら背伸びの理由でもつけて梓の腕を振り解いてやろうとでも考えていると、俺を乗せたリムジンはあっさりと校門を通り過ぎた。桜の花びらが横なぎに揺れた。
「おいおい、学校過ぎたぞ！　どこに連れて行くつもりだ！　頼むから普通に学校に行かせてくれ！」
普通なら休みが楽しみな学校なのに。
梓は頬を膨らませてそっぽを向く。
「だってぇ、学校つまんないです。授業中なんて先輩ずっと前向いてるし、おしゃべりできないし、触れないし」
お前は何しに学校行ってるんだ。
「大丈夫ですって。勉強しなくたって梓と結婚しちゃえば生活には一生困らないですから」
生活には困らないだろうけどそれは命あってのことだからね。俺はお前の父親からこの世から抹消されるかもしれんのに。
「そういう問題じゃないだろ。俺はべ、勉強がしたいんだ！　昨日も言っただろ、周りのみんなに遅れを取るわけにはいかないんだよ」
「だから勉強しなくても大丈夫ですってー」
「そう言わずにお願いしますっ」
俺は涙ながらに頭を下げた。それでも梓はぶぅっと頬を膨らませてそっぽを向くばかり。このままじゃ完全に遅刻だ。どんどん学校から遠ざかってるし。
「わかった、梓。一時限目だけはこのままドライブでもなんでもしよう。ほら、俺の腕も貸す。だけど二時限目からは学校に行こうぜ、な？」
「そこまで言うなら……。先輩はほんとに勉強が好きなんですねっ」
嫌いだよ。このままだと学校行かないのが当たり前になってしまいそうだからな。
それからは一時間、梓に愛を囁かれながらドライブすることになった。俺は終始嘆息するしかなかったんだ。

はあああぁぁ〜……。

学校に戻って来て、教室に入った頃にはすでに二時限目が始まっていた。

ガラリ、教室のドアを開けると何とも言えない神妙な空気が流れ出す。授業中に女子生徒を左手にはべらせた男子が教室に入ってくればそりゃ当然のことさ。泣きたくなるね。

担任で古文の今泉先生に対して、俺だけが頭を下げていそいそと席に着いた。みんながこちらを見ようとしないのが逆に辛かった。

授業が終わって休み時間になろうと俺に話しかけてくるクラスメイトはいない。一年の時同じクラスだった男友達も同様だ。みんな、ひそひそ話すのは止めて。梓が隣にいるだけで俺の周りから友達がいなくなる。悲しいよ、寂しいよ。

「先輩、放課後はどうしましょうか？」

いまさらだけど、同じ教室にいるのに『先輩』と呼ばれるのにはかなりの違和感がある。実際先輩なんだから間違っちゃいないんだろうけど。

「もう好きにしてくれ」

こいつが同じ教室に来てたった二日でもう精神的にくたくたくただった。何よりも周りから距離を置かれているのが辛い。新しいクラスになって友達が増えるどころか減る一方だ。そういえば他のクラスに行った友達とも話せてないなぁ。

梓は放課後のことを考えて首をひねらせている。ツインテールがゆらゆら揺れて、思いっきり両側に引っ張ってやりたい。呑気なもんだよなぁ、こいつも。俺ばっかりに構ってないでこいつも友達と……あれ、友達って……。

俺はその時、朝に頭に浮かんだ疑問を梓に投げかけてみようと思った。いつもいつも俺にくっついているがその辺りがどうなのか興味があったのだ。

「な、なぁ。お前って、友達いるのか？」
少しだけ期待を込めて聞いてみた。どんな答えが返ってくるのか。
「いますよ」意外と簡潔明瞭に答えは返ってきた。
「へぇ、どんな奴なんだ？」思わず身を乗り出す。
梓は思い出すように口元に人差し指を当て、宙を仰ぐ。
「うーんと、アメリカの経済を牛耳っているカトレアさんの娘のシンシアちゃんとぉ、イギリスの財閥の息子のウィリアムくんにフランスの裏世界一のマフィアの後取りジャンと、えーと、あと特に仲が良いのはぁ……」
「わかった、もういい……」
そうそう、そうですよね。俺が馬鹿でした。いつもいつも奇抜な行動している梓さんに学校のお友達なんてはずないですよね。きっとそのお友達も似たような人たちなんだろうよ。やっぱりお前のところに嫁ぐわけにはいかない。とてもそんな人たちと友達になれる自信ねぇよ。
しかし、一応聞いてみよう。
「普通に学校の友達なんかはいないのか？　ほら、中学の時とかの」
「学校にですか？　この学校に来る前は家に家庭教師を呼んでいましたから。それに梓は先輩がいればそれだけで十分に学校は楽しいですよ！」
お前朝には学校つまんなーいとか言ってたよな。中学に通わずに高校に入学とか、義務教育を何とも思っていない。
「学校の友達と一緒に遊んだりするのも楽しいぞ。せっかく入学したんだからその辺も楽しまないと」
「先輩と一緒なら」
またそれか。でも、梓だってまだ十五歳なんだし、友達とはしゃいだりするのが楽しいと思うんだけどな。それに梓に友達ができれば俺の自由な時間が訪れるかもしれない。友達と遊ぶ楽しさをこいつが覚えれば。
「梓が友達とはしゃぐ姿なんて見たら俺、梓に惚れちゃうかもな」

微かに、梓の頬がぴくりと反応したことを俺は見逃さなかった。惚れるなんてことはないけど、梓に友達ができることは良いことだと思う。俺的にも、梓的にも。

「学校の友達ができたら、梓のこともっともっと好きになっちゃいます？」

目を輝かせて聞いてくる。俺はお前のことを好きなんて言った覚えは一度もないんだが？

「……かもな」

俺の返事を聞いて梓は満足そうに鼻を鳴らした。かも、と可能性を提示しただけで確実に惚れるなんて言ってないからな？

「くふふっ。見ていて下さいね。友達百人作ってみせます」

「金で釣るなんて無しだからな」

「えっ……？」

呆気に取られる梓。……それをやるつもりだったのか、こいつ。

梓に学校で友達ができるなんて、やっぱり難しいことなのかな？

そして放課後。

あれから梓は特に気にした様子も見せず、相変わらず鏡を使って俺に何かを訴えたりして授業中に遊んでいた。

今、俺がいるのは校内にある使われていない教室。木造旧校舎の中にある、余った机や椅子なんかを置いてある物置のような教室だ。山下くんはここから自分の机と椅子を運んできたらしい。木造校舎には主に文化部の部室が集まっている。茶道部、文芸部、美術部、新聞部、吹奏楽部、あともろもろ。その他放送部は放送室を使っている。文化部の紹介はどうでもいいことだけど。

ここには俺の友達、いや、親友と呼べる同級生に来てもらっている。梓には適当に理由をつけて外で待ってもらっていた。

昔からの男友達、高橋裕也。クラスは千佳と同じ。千佳と同じく保育園の頃からよく遊んでいた友人だ。こいつは背も高く、メガネ

が知的に見えるいかにも人気が出そうな奴なんだけど、常に女子の尻を追いかけまわしているために周りからは変態のレッテルを貼られ、女子から距離を置かれている残念な奴。しかし、女子情報網には素晴らしいものがあり、一部の男子生徒からは神のような扱いを受けている。これ一人。

そして千佳。困った時には千佳に頼るのが一番の解決策なのだ。

俺の親友と呼べる心のお供はこの二人だけなんだけど、何故かここにはもう一人いる。千佳が連れて来た倉敷みちる（くらしきみちる）さんという人でクラスは２－Ｃ。千佳は吹奏楽部に所属しており、どうやらそこで仲が良い同級生らしい。黒髪のロングストレート。無駄な贅肉を一切省いたような細い体で、少し切れ長の目が特徴的な大人っぽい印象を受ける美人と言うのが一番適切な同級生。柔和な笑みを浮かべている。頼み事があると言って千佳と裕也を呼びだしたらオプションでついてきた。

「それで？　何の用なんだ？　わざわざこんなところに僕たちを呼び出して」

これだけだと不機嫌なように感じられるかもしれないが、裕也は鼻の下を伸ばしながら倉敷さんを舐めまわすように見ていた。倉敷さんはそんな視線はお構いなしといった様子で三人の前に立つ俺のことをじーっと見ていた。そんなに珍しい顔じゃないと思うけど。

「君のことは知っているよ。神宮寺さんのペットなんだよね？」

柔和な笑みを崩さず倉敷さんが初めて口にした言葉がこれだ。ある意味衝撃的だったね。初対面でいきなりこんなことを言われたこともあるが、俺は梓のペットだと周りに思われているのが地味にショックだった。

「ペ、ペットとは心外だなぁ。これでも困ってるんだよ」

笑みが引きつるのを必死に押さえて一応釈明しておく。

「そうかい。それは悪かったよ。で、私を呼びだした理由は何なんだい？」

あなたのことは呼んでないってわかってるんだよな。初対面なの

に。
俺は釈然としないまま一呼吸置き、呼び出した理由を話し始める。言うのは簡単なことだ。内容だっていたって単純明快。それを受け入れてくれるかどうかはさだかじゃないけれど。
「その、なんだ……」
いざ口にしようとすると躊躇してしまう。こういうことを頼むのも少し変だと思うし、余計なお節介なのかもしれない。いやいや、これは自分のためでもあるんだ。
俺は少し溜めるように間を置いて、意を決して頼み事を口にした。
「梓の……友達になってくれないかな？」
恐る恐る目を向けた三人の反応は三者三様。千佳は露骨に嫌な顔をして、裕也は訝しげな表情を浮かべ、倉敷さんは柔和な笑みを崩して細長い目を丸くしていた。
やっぱ言うんじゃなかった。すぐに後悔の念が押し寄せて今すぐにここを飛び出したい衝動に駆られる。やっぱり、こんなことを頼むのはおかしいよな。
「何故僕らが神宮寺さんの友達にならんといかんのか。そりゃあ神宮寺さんは可愛いけど、ちょっとあの常識外れの性格とは仲良くできそうにないな。僕のデータでも危険人物扱いだ」
「そ、そうだねぇ。私もちょっと苦手な感じかなぁ」
「おもしろそうだけどね。デメリットの方が大きい気がするよ」
裕也、千佳、倉敷さんが順に否定の意を見せる。そうだよなぁ、そんなもんだよなぁ。単純に裕也と千佳は梓が苦手なようだけど、倉敷さんは梓と一緒にいることで周りからどう見られるかを懸念しているようだ。実際、俺もペットなんて言われたしな。
「だよなぁ……」
肩を落とす俺。こうなることは予想できていたはずなのに、少しばかりは希望があったからなぁ。
「君はご主人思いのペットだね」
倉敷さんは少し呆れる様子で言った。俺はすかさず「ペットじゃ

ないし」と弁解。倉敷さんはくすくすと意味深に笑う。
「でもさ真。どうして真がわざわざそんなことを私たちに頼むの？」
千佳が首を傾げながら聞いてくる。理由はね、説明したらまず断られるんじゃないかって思ったから口にはしなかったけど、この際話してもいいよな。
「まぁ、一つは単純にあいつに友達ができたらいいよなって思ったことだけど……。もう一つは……友達ができたら俺が振り回されることが少なくなるんじゃないかなぁ～って……いやぁ、そんなことを、思ってですね……」
「てめぇ、僕らに被害を分散させるつもりだったのか！」
「君は人に友達になって欲しいと言っておきながらその友達を盾に使おうとしたんだね？」
……はい、その通りです。何の弁解の余地もありません。
しかしこの二人とは違う反応を見せた千佳がいた。
「それって……それってさ、もしかして真が梓ちゃんから離れられるきっかけになったりするのかな？」
離れられるきっかけ？　いや、そういうんじゃないんだけど、もしかしたら友達の輪が広がったりして俺の他に良い奴を見つけたらそういうことにもなるのだろうか。それはそれは願ったり叶ったりの話しじゃないか。やっぱり頭良いな千佳。それとも俺が梓の父親から脅されてるのを知ってるのも千佳だけだし、単純に助けようとしてくれているのか？
「そういう可能性もあるかもな。まぁ、今の梓なら考えもしないだろうけど。周りが見えてくればそういうのもあるかも」
難しいとは思うけど。大体あいつも自分の身分相応の相手を見つければいいんだよ。
「なら、協力する」
千佳の口から信じられない一言が飛び出した。思わず目を丸くして「え？」と聞き返してしまう。
「私が千佳ちゃんの友達になってあげる。それで真が助かるんなら

協力するよ」
満面の笑みでそう言う千佳が天使に見えた。
ああ、頼れるものはさすが幼馴染。泣きそうだぜこんちくしょう。お前は良い奴だ。心底そう思うよ。今度から千佳さんと呼ばせてもらおうか。
だけどいざ頼みを聞いてくれるとなると千佳の身を案じてしまう。もし本当に友達になったとしても俺のように毎日振り回されることはないだろうが、それでもあいつが女子に対してどんな反応を見せるか俺は知らないからな。千佳の交友関係も心配だし。
「いいのか？　あいつと仲良くしてたら俺みたいに周りから変な目で見られるかもしれないんだぞ？」
千佳は一度小さく唸って考える様子を見せたが、
「……いいよ、大丈夫。真が梓ちゃんから離れられるように頑張るよ」
いや、本来の目的はそうじゃないんだが……まぁいいか。千佳が納得してくれているんなら。
「なら私も協力しようじゃないか。少し楽しそうだしね。友達というのはどうかわからないけど、とりあえず神宮寺さんと話してみようか」
倉敷さんも何やら前向きに検討してくれてるみたいだ。さて、あとは……。
「裕也は、やっぱやめとくか？」
「嫌でも変態の称号を頂いてる僕だしな。これ以上変な噂が立つのはあまり好ましくない。今回はパスさせてもらう」
「そっか、残念だな。あいつの親戚は常識人でかなりの美人だったのに。たしか、今度ホームパーティーするとか言ってたな。その子や芸能界のアイドルやモデルも呼ぶらしいけど……。裕也が乗り気じゃないなら仕方ない。そのパーティーには俺と千佳と倉敷さんで行くか……」
「と思っていたが、神宮寺さんにも一般人の友達は必要だろうな。

仕方ない、お前も困っていることだし、一肌脱ぐか」
……ちょろいぜ裕也。
「よーし、みんなありがとう！　じゃあさ、外で梓が待ってるんだけど、さっそく今から友達らしく遊んでみようじゃないか」
俺の提案に三人とも眉をひそめる。
「私とみちるは今から部活だよ」
あっ……。
「ゆ、裕也は？」
「二人が来ないなら今日はパス。慣れ親しんでいるお前と神宮寺さんの中に一人では入れないだろう」
なんとまぁ……。でもここまで怖いくらいに話しが進んできたからな、今日は三人の協力が得られたことが大きな成果だ。これ以上は望むまい。
「そっか。悪かったなみんな、時間取らせて。今度改めて紹介するからさ、よろしく頼むよ」
俺が軽く礼を言うと、倉敷さんがにやりと口端を吊り上げた。
「フフフ、まるで自分の恋人を紹介するような言い草だね」
「いや違うから。本当に迷惑してるの」と間髪入れずに否定すると倉敷さんは千佳を見て「なんて言ってるけどほんとのところどうなんだろうね？」と話しを振る。千佳は「知らない」と急に拗ねたように教室を飛び出して行った。
今朝もそうだったけど、どこに千佳の沸点が存在しているのか謎だ。裕也も「じゃあな」と残して出て行き、残った倉敷さんが「君も大変だね」と溜息混じりで揶揄するように笑って千佳のあとを追いかけて行った。俺は倉敷さんの背中を釈然としないまま見送ったあと、携帯に届いた梓のラブコールで我に返り校門へと急いだ。
「せーんぱいっ！　なーにやってたんですかぁ？　梓を一人残して……。寂しくて寂しくて死んじゃいそうでした」

梓は怪しく黒光りするリムジンの前で腕を組み、子供を叱るように言った。
「悪い、ちょっと友達に用事があってな。友達に」
俺が『友達』のところだけボリュームを上げて言うと、梓がそのキーワードに眉を反応させる。
「どうだ？　今度紹介するからさ、みんなでお茶でもしてみないか？」
三人の協力は得たが梓が会わないと言ってしまえばそれまでだ。
「……誰ですか？」
訝しげに聞いてくる。
「一人は俺の家の近所の千佳だよ。お前も知ってるだろ？」
「ああ、千佳先輩ですね」
何となく安心しているように見えた。こいつも初対面では多少緊張を覚えることもあるのだろうか。まぁ、千佳と梓は何度か顔を合わせたことがあるくらいでお互いのことはほとんど何も知らないっていうのが現状だ。
「あと二人いるんだけど、俺と千佳も一緒だから構わないだろ？どうだ？」
「……ええ、まぁ。真先輩が一緒なら何だっていいんですけど」
あまり乗り気なようには見えないがこれは良い機会だ。梓に友達と過ごすことは楽しいと思ってもらって、学校生活にも馴染んでもらえれば俺がいつも相手するようなことにはならないだろ。そうすれば俺の忘れ去られた平和な日常が……。
「先輩、妙に嬉しそうじゃないですか？」
「そ、そんなことはないですたい！　いやぁ、これで梓に友達ができてまた梓の新たな魅力を垣間見ることができるですなぁと思えば、なっ！」語尾滅茶苦茶。
「そ、そんなに梓のことが知りたいんですかぁ？　やだなぁもう、言ってもらえれば先輩のためならこの身全てをさらけ出すことだって厭わしくは思わないんですよぉ？」くねくね。

それは俺の斬首台直行チケットになるので遠慮しておきましょう。

ミステリートライアングルが起こす化学反応

そんでもって、次の土曜日。

学校はありがたい週休二日制で無人くんになり、グラウンドや旧校舎では朝からせっせと頭や体を動かす奴らが仲良く団体競技や個人戦の練習に勤しんでいた。そんな活動も午前中まで。

梓を紹介するからと言って、千佳、倉敷さん、裕也にそれぞれ予定を確認して本日土曜日に約束を取り付けた。千佳と倉敷さんは朝から音楽活動に励むからと約束は午後からになった。

梓も何かと準備がいるものと思っていたらしく、これまた高級レストランをたった五人のために一日貸切状態にしようとしたため、俺はそれを必死に止めた。梓はともかく一般人の俺らは高級レストランにぽつんといたらいたたまれないでしょ。

それで、約束した場所はごく普通の学校から近いアーケードの中にあるファミレスだった。長時間居座るには便利なドリンクバーなるものがあるからな。それに梓にも庶民的な料理ってのを一度は口にしてもらいたい、なんて興味もあったから。

ファミレスの中はさすがの休日で学生たちや家族連れで大いに賑わいを見せていた。ざわざわと民衆が騒がしい。

禁煙席に案内される私服姿の男二名、私服の女一人、制服姿の女二人が見た目仲良しグループの匂いを醸し出しながらテーブル席に着いた。

ソファーに俺とやたら派手な服装の梓が隣同士で座り、テーブルを挟んで向かって左から倉敷さん、千佳、裕也の順で並び、少々窮屈そうに腰を落ち着けた。そして少し離れた席には明らかにファミレスに似つかわしくない黒服サングラスのおっさんが一人、ドリンクバーを注文している姿が見えた。

それもあってかなくてか、このテーブルには異様な空気が流れていた。おそらく最も心中穏やかではないのが俺だ。頼んで来てもら

った三人ゆえ、こちらが下手なことはできないし取りまとめねばならんという責務を感じている。当然っちゃ当然なんだけど。
梓は毅然とした態度で座っており、いつものように無駄なきらきら笑顔は見せていない。何となく余裕すら感じさせる微笑を浮かべている。倉敷さんは相変わらずの柔和な笑みを浮かべつつも物珍しそうに梓をチラチラと見て、千佳は少し緊張しているのか小刻みに震えているようにも見える。裕也は梓の知り合いの情報でも書き込むつもりなのかマル秘ノートとペンを持参していた。
梓は大金持ちでもあるし、奇行を行う女子高生でもある。そんな奴を目の前にして普通にしていられる方がおかしいのかもしれない。
ここは、やっぱり俺が切り出すしかないんだろうなぁ。
「と、とりあえず自己紹介はあとにして、みんな飯まだだろ？　先に注文しちまおうぜ」
俺はお見合いの幹事でもしている気分でメニューを二つ取り、それぞれのソファーに向かい広げた。三人は曖昧な返事をして千佳がめくるメニューを眺めていく。梓はメニューには一瞥もくれず「先輩と同じもので」と何となく予想できていた言葉を発した。俺はまぁ無難にハンバーグ定食。梓もそれ。倉敷さんはミートスパを、千佳はカルボナーラ、裕也はからあげ定食とごく平凡な食事メニュー＋ドリンクバー五人分を店員のおねーさんに伝えた。
そしておねーさんが去ったあとに訪れたひと時の間。誰も何も口を開くことはなくカチカチと体内時計の秒針の音が響く。
「とりあえず飲み物取って来ようか」
とりあえず続きだがこれも仕方ない。平然と座っているのは梓だけで、俺も含めて他の四人はよそよそしさ臨界点だ。梓はまたもや「先輩と同じもので」と言い、俺と向かいの三人が席を立つ。全員が安堵の表情を浮かべているのは気のせいじゃないだろう。
グラスを二つ取って氷を二つずつ放り入れる。梓の奴はレストランではいつも水ばっかだったから、ここは食事もあることだしウーロン茶で構わないだろ。

そう思いつつお茶を注ぎ込んでいると、千佳が不安げに小声で話しかけてきた。
「ね、ねぇ真。ものすごく帰りたいんだけど」
これには何も言えない。俺ですらいたたまれない気持ちになっているのだからなおさらだろう。「ま、まぁ待てよ。飯も来るし」と延命処置を施す。倉敷さんも千佳で俺を挟むように身を寄せてきて「君が呼んだんだから君がしっかりしてくれないと」と願いか非難を囁かれる。両手に花なんて思えない。裕也は俺の尻を膝で小突き「女の子紹介してくれないと割に合わない」とぼやいてきた。そんな三人に愛想笑いで返事をして一足先にテーブルに戻る。みんなは何を飲もうか迷っているふりをして時間稼ぎだ。
「梓、お茶でよかったか？」
「構いませんよ」
俺と二人になったからか、ようやく梓からいつもの笑みが零れる。俺も少し安心して自然に頬が緩んだように思えた。しかし、自分で招いた事態とはいえ、早々にどうにかしなければ食事も喉を通らなさそうだ。さっきまで疼いていた腹の虫も遠慮して駄々をこねるのを止めていた。
「ど、どうだ？　こんなところ、来たの初めてなんじゃないか？」
梓は周りを見渡して上品な笑みを浮かべる。
「そうですね。パーティーとは違った賑やかさがあります。少し窮屈ですけどね」
あはは、俺は愛想笑いで返す。梓も居心地が良いとは言えなさそうだ。
「まぁ、せっかくだからな。庶民の日常ってのを味わってみろよ」
「はい。先輩と一緒なら梓はどこでもいいですから」
眩しい笑顔に俺は苦笑を浮かべる。そんなことを言われると申し訳ないと思ってしまうのが正直なところ。本来ならこんなとこで食事するような奴じゃないし。俺なんかに惚れちまったおかげでこいつ自身も結構我慢しているところがあるんじゃないかって思う。

梓のいいところっていうのは変に金持ちっぽく振る舞わないところかな。なんかさ、いいとこのお嬢様はこんなところの飯なんて食べられるわけがないって飛び出して行きそう、なんて勝手な先入観かもしれないけど、そうしないのがいい、のかなと思う。その気になれば俺を監禁でも何でもして本当にペットのように扱うことだってできるかもしれないのに。まぁ、俺に近付くためなら何でもやりそうな気がするけどな。昇級してきたし、山下くんには金を握らせたし……やっぱりこいつは存分に己の力を奮っている。

一度陥った自己嫌悪を否定に至ったところで三人が戻って来た。三人とも違う色の飲み物を持ってきている。カラフル。特に倉敷さんの前には虹色に層分けされたドリンクが置かれていた。どうやら本気で何を飲もうか悩んでいたようですな。欲張りさんだネ。

でもここは倉敷さんに助けられたみたいだ。

「うわぁっ。何ですかその飲み物？　梓初めて見ましたぁ！」

レインボードリンクに目を輝かせる梓。さすがのお嬢様もドリンクバーで起こりえる奇跡か災厄を招くみっくすじゅーすを目にするのは初めてだったようだ。

倉敷さんは目を細めて「ほう」と意外そうに漏らし、うっすら笑いながら「飲んでみるかい？」とレインボードリンクを梓の前に差し出した。

興味を惹かれた梓は喜々として俺に目で訴え、俺は内心どうにでもなれと思いながら顎で「飲めよ」と促す。正直、俺は飲みたくない。明らかに奇跡ではなく災厄の色だ。

梓は恐れも知らずそれを一口流し込んだ。そして、

「ぶぉほっ！？」

盛大に噎せた。

涙目になりながら口を拭い、首をふるふると小刻みに振りながら倉敷さんにドリンクをお返し。倉敷さん以外は冷や汗混じりにうっすら笑みを浮かべているが何を言ったらいいのかわからないといった神妙な面持ちでその様子を眺めていた。俺も含めて。

「こ、こんなものをみなさん好んで飲んでいるのですか！？」
梓は思い切り顔をしかめて言う。どうやら奇跡は起こらなかったらしい。まぁどう見てもまずそうだったしな。
「どうだった？」
一応感想を求めてみた。
「こう、何て言うか、甘いのと……苦いのと……辛いのと……酸っぱいのがシュワッていうのと波打つように次々と、押し寄せては引いて……意識まで流されそうでした」
いかにも恐ろしいものでも見たかのように肩を両手で抱え顔を恐怖に引きつらせながら言う。
何となく今のから想像してみたら夜の浜辺で波に打たれ立ち尽くす姿が見えた。ちなみに梓が盛大に噎せた時、奥の席で黒づくめのおっさんが席を立ち上がる姿が見えた。こちらの様子を確認するとまた席に着いた。内心焦ったのは内緒だ。
「あっはっはっ。どうやらこれは失敗だったみたいだね」
倉敷さんは快活に笑って特に悪びれた様子もなく言った。まぁ、梓が飲みたそうだったしな。それを倉敷さんは好意で譲ってくれたわけで、梓の自業自得。しかし大体どういうもんかは想像できただろうに。
「よかったら新しいのを作ってきてあげようか？　三度目の正直って言うからね」
どうやら次も失敗前提で作るらしい。梓は口にハンカチを当てたまま首を横に振って断った。俺の顔に当たるツインテールの片割れがこそばゆい。
「そうかい、残念だな。ところで、私は２－Ｃの倉敷みちるっていうんだ。以後、よろしく頼むよ。一応同級生になるんだし」
倉敷さんは柔和な笑顔に戻し、紳士的に一礼して自己紹介を終えた。唐突な行動に全員が唖然とする。
「次は誰だい？」
倉敷さんはそう言いつつも千佳の顔を覗き見る。何か、独特なペ

ースを持った人だな、この人。
千佳は自分が持ってきた、おそらくはオレンジジュースを一気に飲み干して勢い任せで言った。
「わ、私は笹野千佳！　梓ちゃんとこうやって話すのは初めてだけど、私、真の幼馴染！　知ってるかもしれないけど、私っ、真の幼馴染！」
テンパり過ぎだ。やれやれ。続いて裕也が親指を立てて自分を指しながら口を開く。
「僕は高橋裕也。僕も真の幼馴染と言っていいかもしれないな。ある意味学校で有名なんだ。僕のことが知りたかったらその辺で話している女子の話題に耳を傾けてくれ。きっと……わかるから……」
最初は勢い良かったのに自虐的な自己紹介しつつ以下どうでもいい。
もちろんこれは全て梓に向けられたもので、俺は梓にもやれよと肘でちょんちょん小突く。
「あ、梓は神宮寺梓っていいます。えっと、倉敷先輩に千佳先輩に、変態さんですね。よろしくお願いします」
と上品に首を傾けながら自己紹介を済ませた。
なんだ、梓だって普通に挨拶できたりするんじゃないか。ちょっと安心した。裕也を変態と呼んだのは学校内の情報を知っているという点でむしろ褒められるべきことだろう。裕也がうなだれているのはほっといて。
「そして、ご存知かと思いますが梓は真先輩のフィアンセです」
梓は付け足すように俺の腕を絡め捕りながら言った。言うまではまだいい。千佳が何か頬をぴくつかせているがまぁいいよ。それくらいはな。だけどね、知った顔の前で腕組みなんてされると俺にも麻痺しかけている羞恥心というものが顔を出すわけですよ。
「あ、梓。みんなの前だからな、今日はそういうことやめようぜ？」
「えーっ、先輩とこんなとこに来るの初めてなのに。もっとみんなに梓と先輩の仲を見てもらいましょうよぉ」

なんだ？　いつもべたべたしてくるのはわざとか？　わざとなのか？　お前はいいかもしれないが俺は困るんだよ。ほら、見てみろよ周りの男の目、おばちゃんたちのやーねぇっていう目、バカップル退散みたいな目。ここに来づらくなるだろうが。

「あ、梓ちゃん、真が困ってるみたいだからやめてあげなよ」

千佳が顔を引きつらせて梓を窘める。こめかみに青筋が浮かんでいるのはきっと目の錯覚だ。

「真先輩、困ってるんですか？」

困ってるんですよ。しかし見つめる潤んだ瞳が俺に危険信号を送る。父親の警告、泣かせたらって、こんな些細なことでも泣かせたうちに入るのだろうか。そうじゃないとしても、危ない橋は渡れません。

「ここはな、ほら、なんだ、あとでな」

適当な理由もみつからないまま梓の腕を振り解く。梓は「ぶぅっ」とわざとらしく脹れっ面になり恨めしそうに俺を見る。よしよし、頭を撫でると、とろんと目が溶けて梓猫参上。ごろにゃ～んと言ってみろ。怪面百面相が垣間見える。

ふと気が付けばシラケた瞳が六つで三人分、こちらをジト目で見ていた。

「なんだ、案外お似合いじゃないか。ねえ？」

倉敷さんがにやけつつ二人に同意を求める。

「まったくだ」

嘆息する裕也。

「……」

千佳は何も言わず、鋭い眼光を俺に浴びせる。

俺は慌てて手を止めて「そんなことないよ」と否定。すかさず梓が「そうでしょう？」と話しがややこしくなるからやめてくれ。

その時に思っていたより早く料理が運ばれてきた。ナイスタイミング。忙しそうなのに、手際の良い仕事っぷりに感謝感謝。みんなの料理が出揃ったところでそれぞれ『いただきます』を口にして昼

食を取り始めた。
不調和な空気が一旦途絶え、それぞれ料理を口に運ぶ。
ここで俺の興味は梓に向いた。舌の肥えたお嬢様はファミレスの庶民的な料理を食べてどんな反応を見せるのか。女の子の食べるところをじっと見るのは失礼だけど、興味の方が先行する。
梓はハンバーグに丁寧にナイフを入れ、分裂したちっこい方を愛らしい口に放り込んだ。その瞬間に顔をしかめる。やっぱり口に合わなかったか？
「ど、どうだ？」
恐る恐る聞いてみる。
「え、ええ、まぁ。これはこれで、しっかりとした食べ応えのあるハンバーグですね。味もしっかりしてて、顎が鍛えられていいと思います」
褒めているのかけなしているのか。しかし笑顔を引きつらせ、必死に口を動かし明らかに我慢して食べているのが窺える。
「む、無理して食べなくてもいいんだぞ？」
「いいえ、無理なんてしてません。先輩はこういうのが好きなんですよね。なら、梓も好きになります」
好きになりますって、やっぱり無理してるんじゃないか。そして梓は勢い良くハンバーグを食べ始めた。一生懸命と言った方が正しいのか、嫌いなものを無理矢理胃の中に押し込むような、そんな感じだった。周りには目もくれず、ソースを口の周りにつけ、お茶で流し込むように。
俺は何も言えずにその様子を見ていた。他の三人も呆気に取られ、手を止めて梓の様子を眺めていた。三人に梓の食べる様がどう見えていたのかはわからない。よっぽどお腹が空いていたのか、食い意地が張っているお嬢様なのか、少なくとも俺が感じていたのはそんなことじゃない。何て言うか、言いたくないけど、可愛いなって思ってしまった。梓にとっては意地かもしれないし、プライドかもしれないけど、一生懸命食べる姿が思わず応援したくなるような健気

な女の子に見えたから。そして少しだけ、心が痛んだことを覚えている。
梓がハンバーグを全て平らげ、俺が空になった梓のグラスにお茶を足しに行こうとすると、予想外なことが起きた。
「ほら、梓ちゃん口拭いて」
千佳がわざわざ自分のハンカチを使って梓の口を拭い始めた。備え付けのナプキンがあるのに、もしかしてこれは千佳なりの友好表現なんだろうか。
「神宮寺さん、お茶でいいんだよな」
裕也までが立ち上がりお茶を取りに行こうとする。
「ははっ、まるで子供じゃないか」
倉敷さんは温かい笑みを浮かべて口を拭かれている梓を見ていた。
「む、むぐっ……ひがっ……」
梓は何やら否定しようとしているみたいだが、千佳が「はいはい」と言いながらハンカチを押しつけるので顔を真っ赤にするだけで反論できず、恨めしそうに千佳を見る。
学年は一緒だけど梓が一応の後輩になるので、二人が姉妹のように見えて微笑ましく思う。『はいはい、もう、子供なんだから』『や、やめてよお姉ちゃん。恥ずかしい』妄想ついでににやにや。
「な、何笑ってるんですか先輩っ！」耳まで真っ赤だ。
「お姉ちゃんにお礼しろよ？」
梓は少し躊躇して、そっぽを向いて恥ずかしそうに「ありがとうございます」と千佳にちょこんと頭を下げた。千佳はやれやれと笑って両手にフォークとスプーンを持ち直す。裕也が戻ってきて梓にお茶を渡すと、また恥ずかしそうにお礼をした。ついでに倉敷さんにも礼をした。倉敷さんは「これはご丁寧に」とお辞儀。
それから梓以外は食事に戻り、しばらく梓は俯いていたが暇になってきたのかきょろきょろと首と目の食後の運動に励んでいた。最初の落ちつきがなくなってきて、だんだんといつもの梓に戻りつつあるようだった。

それぞれが食事を終えて、さてこれからが本番だ。五人分の食器が並べてあるのも邪魔なので店員さんに下げてもらう。
「梓、コーヒーでいいか？」
「あっ、梓も行きます」
三人にも飲み物を促すと苦笑混じりで首を振った。梓と二人でドリンクバーに向かう。黒服のおっさんが慌てて席を立って、俺たちがドリンクバーに向かうのを確認したあとまた腰を落ち着けた。斎藤さん、あんたも大変だね。
俺はホットコーヒーをカップに注ぐ。ブラックに砂糖半分。これがここのコーヒーのベストなバランス。梓は初めて見るドリンクバーに目移りしているようだ。
「すごいですね。ボタンを押せば飲みたいものが出てくるんですか？　梓の部屋にも一台置こうかな」
その発想が簡単に出て来るのがお前らしいよ。飲み物くらいお前の家ならメイドつきでやってくるんじゃないの？
梓はおもむろにグラスを二つ取った。一つにアイスティーを注ぎ、もう一つのグラスを持ったまま頭を悩ませている。そしてそのグラスにアイスコーヒーを注ぎ、コーラを足し、アイスティーを足し、ウーロン茶を足し、最後にカルピスを足して石灰水が完成した。梓はそれの匂いを嗅いで顔をしかめつつ、妖艶な笑みを浮かべながらグラスを二つ持って一緒に席に戻った。
「倉敷先輩、さっきのお礼です。梓が気持ちを込めてブレンドしたので一気に飲んじゃって下さいね」
倉敷さんは目の前に突き出された石灰水を見ても動じることはなく、
「ほーう、お嬢様に作ってもらったドリンクなんて格別なんだろうね。ところで、味見はしたのかい？」
「えっ、あ、味見はしてないですけど、梓が作ったんだから間違いないですよ。これでもソムリエの資格持ってるんですから！」
小ぶりな胸を張る梓。思いっきり未成年じゃんお前。見た目で味

がわかるもんじゃないだろうしそもそも関係ないし。
「じゃあ仮にこれがおいしくなかったらソムリエのプライドもズタズタだろうね」
あからさまな嘘に乗っかる倉敷さん。面白がってるんだろうなぁ。
「試しに飲んでみておくれよ。感想を聞いてからでも遅くはないよね」どうぞ、手の平で石灰水を梓に押し返す。
「い、いいいいですよ。じゃあ……」
顔面蒼白だぞ梓。ソムリエだろうとなかろうとなんとなく苦酸っぱな味が予想できるんだけど。
梓は一気に飲んだ。流し込んだ。が、それは口の中まででグラスの三分の一も減っていない。それから口いっぱいに劇薬を含んだまま涙目で俺に助けを求める。はいはい、おトイレ行きましょうね。そう言う間もなく「ぶへぇ……」とそのままグラスにリリースしやがった。我慢できなかったらしい。お嬢様なんだよお前、一応。「くふぅ……」ぐったりと、自ら特製ドリンクの威力を倉敷さんへ見せつける。
「おいしかったかい？」
倉敷さんも意地が悪い。あんたも味見してなかっただろうに。どうして千佳と仲が良いのか不思議だよ。倉敷さんに目をやると、にんまり笑って返される。それがどうにも心を見透かされていそうで気味が悪い。
「お、おいしかったですよ？」
お前もどうして意地を張る。涙目で吐き出されたものを見ると説得力皆無だよ。
「吐き出したのに？」
「あ、あまりに美味で」
「ならどうだい、もう一杯」
「ごめんなさい、おいしくなかったです」
おお、あの梓が謝った。倉敷さん強し。
「うう～、真先輩、梓汚されちゃいましたぁ」

「自業自得だ」
しかしながら俺は新鮮な気持ちだった。梓が俺以外への悪戯心が働いたこと。これって、梓がこの状況を少しでも楽しんでいるんじゃないかって、そう思う。
梓はアイスティーで口直し。俺もコーヒーを一口すする。こんな感じではあるが、場が和んだ気がするのは俺だけだろうか。
「梓ちゃんって、意外と普通の子なんだね」
千佳がくすくす笑って言う。それに頷く両脇二人。よかったな梓。普通に見られることが良いことか悪いことか、ここでは三人との距離が縮まったことで良いことと言えるよな。梓と三人の間にあった壁も、今は透明で薄っぺらいアクリル板くらいだ。まだまだ友達と呼べるものじゃないにしろ、とりあえずは知り合えた。それだけでも今日は万々歳だ。
「梓は普通ですよね？」
きょとんとして聞いてくる。まぁ目の前の三人よりこいつの突拍子のないところを知っているわけで、素直に頷けない。俺のベッドに忍び込んだり、いつ取ったのか俺のTシャツを着て家に来たり、最近では教室に鏡を置いたり昇級してきたり、校内唯一の茶髪だし。そんなことを普通と思っているならお前は普通じゃないよな。
「どうだろうな」返事を濁す。そもそも普通の感じ方が俺たちと梓とじゃ違うだろうけど、黒服のおっさんが警護してるだけで普通じゃない。どうして普通の奴に惚れちまったんだよ、なぁ。
「神宮寺さん、一つ聞いていいかな？」
裕也がにわかに話しを切り出してきた。
「？　いいですよ？　真先輩のどこが好き、とかですか？」
俺は思わず耳が反応してしまう。そういえば、そんなことは一度も聞いたことなかった。ただ一度助けたくらいでこんなに惚れ込むことができるのだろうか。
裕也は持ってきたペンを片手にマル秘ノートを広げ、メガネをくいっと上げ真剣な表情を作り上げた。

「スリーサイズは？」
「お前は何を聞く変態がっ！」
どんな経緯でそんな話しに行きつくのか。俺の淡い期待を返せ。
「えっとー、上から７８、５４、８０です」
そして何故平然と答えられる？　裕也、お前も当たり前のように書き込むんじゃなぇよ。俺だって知らなかったんだぞ。少し悔しいだろうが。
「ちなみに今のはあゆみちゃんのスリーサイズです」
あゆみ、俺の妹。
「お前はっ、なんで俺の妹のスリーサイズを知ってんだよ！　しかもそれを教えるんじゃねぇ！」
梓の頬をつねりながら俺は言う。
「いひゃひゃひゃ。れも、あふはふぉおなひふひーふぁいふなんれふよ」
「あーん？」手を離す。
「梓も、同じスリーサイズなんですよぉ」
頬をさすりながら涙目で訴えた。妹と同じって、想像しちまうじゃねぇか。
「知ってるでしょ？」
「知らねぇよ」頭をゴツン。「暴力反対。ＤＶです」「家庭内ならな」「えっ？」「家族じゃねぇよ。不思議そうな顔すんな」「遅かれ早かれ」「ならねぇよ」
「あっはっは。君たちはほんとにいいコンビだ」
倉敷さんが口だけで抑揚なく笑う。カップルと呼ばれなかっただけよしとしよう。
「むぅ……」少し悔しそうに口を尖らせる千佳。それを見ていた俺の視線に気が付いて栗色の柔らかい髪を忙しなく撫で、頬を染めて照れ隠しをするように「ゆ、裕也、私のスリーサイズは？」何を聞いてるんだ千佳。「上から８４、５７、８５」「ごめん、手が滑ったぁ」千佳は残っていた石灰水を裕也のマル秘ノートにぶっかけた。

「あーっ！　なんてことする千佳！」「知ってんじゃないわよ変態」千佳は憤慨を表すように濡れたおしぼりを使ってインクをぼかしていく。もうそのノートは使えそうにないな。あゆみの秘密も守られた。

そんなこいつらのやり取りを見て懐かしさを感じ自然に笑みが零れてしまう。

「そんな顔……するんですね」

梓が何かを呟いた。けど、俺は断片的にしか聞きとることができなかった。

「どうした？」

「いいえ、何でも」

少し寂しそうに笑う梓を見て、僅かながらもどかしさが見え隠れした。

「ところで、ペットの真くんやい」

「倉敷さん、梓が頭に乗るから」

「ははは、今日はこのあとの予定は考えているのかい？」

また抑揚なく笑い、そんなことを聞いてくる。この後の予定、そんなことは全く考えてなかった。梓を紹介するのが目的だったし。それもほぼ達成できたと言ってもいい。で、当初の予定通りこのままここで過ごすのか否か、と考えてみれば少しもったいない気もする。これは梓のことは関係なく、俺自身が千佳や裕也とこうやって過ごすことが久しぶりなわけであって、せっかくなので話すだけじゃなく遊びたいって思うのが正直な気持ちだ。

「みんなでどっか行く？」

「どこに行くんだい？」

うーん、やっぱり俺が決めないといけないのかな。まぁ、主催だしな。どこに行くってもなぁ、この近くじゃカラオケ……は少しハードルが高い気がする。梓が俺らと同じ曲聞いてるとは思えないし。たしか、ボウリング場があったっけ。体を動かす中での触れ合いもあるかもしれないし、やることは単純。スコアの付け方さえわかれ

ば梓だってできるだろ。
「ボウリングでも行く？」
「いいね」「いいよ」「いいぞ」
倉敷さん、千佳、裕也は了解する。梓に目配せすると、
「ボウリングってピンをボールで倒すやつですよね。梓、やったことないけどできるかなぁ」
決まりだな。さて、次の予定が決まったところで善は急げと行きますか。
ここでの支払いは俺。梓は現金を持ち歩かないし、感謝の意味もあり三人の分は奢り。多少手痛い出費ではあるものの、今日の成果からすれば安いものだ。梓のために自分の金を使うのも実は初めてだったりする。「梓があとで払います」と言っていたが、ここは男を立てさせてくれと丁重にお断りした。

そして、今現在――
「な、なんでなんでっ、梓のボールはガーターばっかりなんですか！」
「ぬっふっふー。まだまだ甘いよ、梓ちゃん」
俺は梓と千佳のボウリング勝負をただ座って見守っていた。五人なのでレーンを二つ借りたんだけど、何故かどういうことからか二人の勝負が始まってしまい、俺と倉敷さんはその様子を見守るべく腰を落ち着かせていた。ちなみに裕也は空いているレーンで一人ひたすらに投げ続けている。いろんなフォームでどれが女性ウケするか考案中らしい。
「今度こそ！　……うあーっ！　まただぁ！」
「だからね、教えてあげるから」
「敵の情けはいりません！」
敵って。まぁそもそも言いだしっぺは梓だった。初めっから何やら千佳に対抗意識を抱いていたらしい梓は俺に投げ方を教わりつつ

も、隣で次々に千佳がピンをなぎ倒していく姿を見て「勝負です！」といきなり宣戦布告をしやがった。千佳も断る理由がなかったのかすんなりそれを受け入れた。一ゲーム終わって当然ながら千佳の圧勝。それから梓に火がつき再戦。で、その途中だけど、結果は目に見えてわかる。

二人の様子を微笑ましく思いながら形だけでも「梓頑張れー」と梓を応援。その俺の声も聞こえないほど、梓はボウリングに熱中していた。反対側の奥のレーンではいかついおっさんが一人で淡々とストライクを連発する姿が見える。注目されてますよー、斎藤さん。

「ご主人様のお世話も大変だね」

同じく二人を眺める倉敷さんが長い黒髪を翻して聞いてくる。

「今日見ていたところでは？」

「そうだね、世話焼き女房ってとこかな」含み笑いで答える倉敷さん。

「うわー、ランクアップで性転換だー」

「手術代が安いところ紹介しようか？」

「そんな情報いりません」っていうか知ってんの？

くっくく、鼻をくすぶらせて倉敷さんは笑う。「じゃあ将来は主夫だね」「そんな倉敷さんは主婦だろうね」「ありがとう」「お礼なら女の子として産んでくれたお母さんに」あっ、梓またガーターだ。「ふふ、君は愉快だね。聞いていた印象とはだいぶ違うよ」千佳の奴、何を言ってたんだか。

「ところで」

倉敷さんはニヤケ顔をやめてニヒルな笑みを浮かべ言った。

「その命、神宮寺家が、握ってる？」

「五七五？」

倉敷さんが目を丸くさせる。そんなに驚かなくても、明らかに区切ってたから気がつくよ。

「気がつかなかったよ」

「はいはい、鈍感ですね」

倉敷さんは不思議な人だ。俺にとってもまだまだ顔見知りの領域を出ない倉敷さんはある意味魅力的と言っていい。それは女子としてではなく、あくまでも不思議な人物という点で。掴みどころのない口調で、その奥に何を考えているのか全くわからない。もしかして千佳との友情も作り物なんじゃないかって、そんな懸念が浮かんでくるほどに、ふわふわとした、奇妙な存在である。

「千佳から聞いたの？」

「それしかないよね」にんまり笑って答える。

「ならおおむね聞いた通りで間違いないと思うよ。隠すつもりはないけど、梓にだけは知られたくないから、あんまり好ましい話題じゃないな」梓に知られるといいように利用されかねないからな。

「それは失敬。以後気をつけるよ。それで、君は神宮寺さんのどこが好きなんだい？」

俺は一種の衝撃を受けたように目の前がチカチカと一瞬気が遠くなる。またガーターになった梓を一瞥して、倉敷さんに目を戻す。

「ん？」とこちらの顔色を窺い、倉敷さんの長い髪がはらりと落ちる。

「どこをどう見てそう思うの？　千佳から何て聞いてるの？」

「君が、神宮寺さんに追いかけ回されて大変だーって聞いてるよ。だけど振ってもダメ、受け入れてしまっても、どちらにしろ彼女の父親が怖いんだろう？」

ニヤニヤと、心地悪いからやめて欲しい。その視線から逃れるべく、「そう」と一言で答えて二人のボウリング勝負に視線を固定する。もうすぐで二ゲーム目も終わりそうだった。梓の悔しがる姿を見て、少しばかりの嬉しさと寂しさが押し寄せる。何を感慨深く思っているんだか。

「巣立つヒナを見守る親鳥の気分かな？」

さっきの答えは諦めたのか、問いを新たに聞いてくる。

「根本的なものが違うよ」

おや？　考えるふうに首をひねる倉敷さん。

親鳥とか、俺は梓の保護者じゃないんだ。友達作って少しでも俺から離れてくれればいいと思ってるだけ。だけど「むしろせいせいするよ」と強気な発言ができないのも困ったところではある。隣の開放感と隣の虚無感、物理的には似てるけど、意味が全く違うもの。開放感を得てしまえば、虚無感も同時に感じてしまうことを、俺はどこかでわかっていた。わかりたくなくても、感じてしまうのだからどうしようもない。だけど先を見通せば、いずれは虚無感に陥るべきなのだ。

「親鳥気分の真くん、自分の中に矛盾って感じたことないかい？」

その問いに返す間もなく、梓が乱暴に足音を立ててこちらに駆け寄ってきた。倉敷さんはふむ、と頷いてその身を引く。

「せーんぱいっ！　千佳先輩に勝てませんっ！」

悔し涙まで浮かべて梓が訴えてくる。勝てませんと言われても、俺は梓を一瞬でプロボウラーに変える術は持ち合わせていない。

「教えてあげるって言ってるのにー」

追って千佳が顔を覗かせる。嘆息しつつも、表情は穏やかだった。俺は梓が女の子同士の勝負に一生懸命になる姿の物珍しさの方が先行していた。

「先輩の愛の力が足りません」

梓はそう言って唇を押しつけようとしてくる。「これで我慢しろ」と飲みかけのコーラをアヒル口に押し当てる。

「間接キッス頂きます」

満足そうに喉を鳴らしてそれを飲む。恥ずかしいから口に出して言うな。

「か、間接キス……」千佳が何やらふるふる震え「自分のを飲みなさい！」無理矢理に梓が持つコーラを奪取した。

「千佳先輩が意地悪しますぅ！」

「い、意地悪じゃないしっ」

千佳は顔を真っ赤にさせて抗議する。梓は腕をぱたぱた振って千佳に脹れっ面を向けていた。ボウリングが二ゲーム終わったっての

に、元気だな二人とも。裕也はほら、横でバテてるのに。
「真先輩、次のゲーム千佳先輩に勝てたらご褒美下さい！　そしたら梓頑張れます！」
　別に頑張らなくてもいいんだけど、そうした方が盛り上がれるのかな。
「千佳に勝てたらな」
　何を要求してくるのかが知らないが、今日初めてボウリングをした梓が千佳に勝てるわけがない。万が一にもないな。これまで二人の差は百ピン以上離れてるし。
「くふふっ。真先輩を思いっきり愛でちゃおっ」
　含み笑いで妄想を始める。勝ったらだからな。頭の中ではすでに勝ってるみたいだけど。
「そ、そんなの絶対負けないからね！」
　千佳は鼻息荒く対抗意識を燃やす。なんとも頼もしい。心の中で全力で応援しよう。
「店員さんにコツを聞いてきますから、ちょっと待ってて下さいね」
　梓はそう言ってとったったと掛けて行く。それだけ見ればただのガキンチョのようだ。別にコツなんて俺らに聞けばいいのに。変なプライドがそれを拒否しているのか。ともあれ、コツを聞いただけで勝てるなら苦労はしないよな。
　千佳は梓がカウンターに行っている間にもぶんぶんぶんぶん腕を振りまわしてやる気をみなぎらせる。「あんなちーちゃんは初めて見たよ」と倉敷さんも少し楽しそうだった。
　しばらくして梓が嬉しそうに戻って来ると、ボールを一つ軽いものに変えた。それが秘策と言うならば、俺の安全は保障されたようなものだ。
「さー勝ちますよー！」梓は意気揚々とレーンの前に立ち、何度か素振りをする。
「真の貞操は私が守るっ！」千佳、とんでもないこと口走ってるぞ。相当テンパってんな。不安になってきた。

二人はじゃんけんで順番を決め、先に投げるのは千佳になった。最後の勝負、ここは祈りながら見届けようと俺は二人に体を向け、体勢を整えた。倉敷さんも興味津々といった様子でその場を見守る。裕也はだらりと椅子に腰かけ、おっくうそうに顔だけを二人に向けて「スカートの中見えないかな」と呟く。「見せようか？」と倉敷さん。「堂々と言われると何かなぁ……」裕也は気のない礼をして二人の勝負に目を戻した。倉敷さんは肩をすくめて「そうかい」と意地悪そうに呟いた。

千佳の一投目、華麗はフォームから放たれたボールは緩やかなカーブを描きながら一番ピンへ直撃。そのまま共倒れを誘発し、ストライク。

「よし！　よーしっ！」

千佳の盛大なガッツポーズに合わせて俺も心の中でガッツポーズ。梓には悪いが三度目の正直という言葉は神頼みなんだ。三連敗を記してくれ。

梓は何も臆する様子はなく、鼻を鳴らして新たに用意したボールに指をかけた。スコアボードの表示が『ちか』から『あずさ』に移動して、新しいピンが統率の取れた整列を見せる。

梓はてけてけと小走りでスローラインに近づき、そろ～っとボールを転がした。とにかく当てろとアドバイスを受けたのか、ボールは真っすぐに一番ピンを目指して進んで行く。ピンに当たり負けしそうな勢いだったが、整列したピンは真ん中から十戒を思わせるように綺麗に割れ、倒れる。ストライク。嘘だろ？

「きゃあーっ！　やったやったぁっ！」

大はしゃぎで飛び跳ねて喜びを体で表す。生まれて初めてのストライクに拍手でも贈りたいところだったが、驚きが先行して言葉を失った。どんなアドバイスを受けたのかは知らないけど、店員さん、あんた天才だよ。

「先輩っ！　見ててくれました？　ストライクですよ！」満面の笑みを輝かせる。

「あ、ああ。すごいじゃないか。コツを掴むのが早いんだな。才能あるんじゃないか？」
「えっへっへー。楽しみにしていて下さいね。今日の夜はお楽しみですっ」
むっ、いかん、そういう勝負だったか。千佳、頼むぞ！
「ま、まぐれだよ！　一回ストライク取ったくらいじゃ勝てないんだからね！」
千佳も動揺は隠せないようだったが気迫の籠った目を俺に向ける。
『私、負けないから』そう伝えたいのかはわからないがここは千佳を信用するしかない。俺は頷きで返して千佳は構えに入る。
千佳の二フレーム目は惜しくもストライクは出せなかったが難なくスペアで終わらせた。疲れはあるはずだろうけど、さすがは千佳だ。全てをそつなくこなす学園アイドル。ファンクラブがあるなら会員になってもいいくらい今の千佳は輝いている。希望の星だ。頑張れ千佳！
続いて梓の二フレーム目、てけてけてけ、さっきと同じゆっくりとしたボールが三角形の頂点を目指して進んで行く。今度は狙いが外れたようで二列目か三列目くらいに当たった。勢いのないボールはそのまま横に流れて奥に吸い込まれたが、ピンは当たったところからカタカタカタと倒れ、最後に一番ピンを倒し……ストライク……。んな馬鹿な。
「やったやった！　またストライクぅ～！」
梓は俺に向けてピース。もはや勝利の？サインと言っていいほどふんぞり返って「にーん」と笑っていた。
「う、うう嘘だ！　さっきまであんなに下手くそだったのに！」
千佳は驚愕して倒れてしまったピンが流れて行くのを見つめていた。
「嘘じゃないですよぉ。ほら、機械の表示だってストライクが二つ、並んでま～す」
イラッと、神経を逆撫でするような甘ったるい声で梓は自分のス

コアを指差す。
間違いなく、二連続で決めた。次もストライクならいきなりターキー。まぐれが三度も続くわけないから、梓がターキーを決めれば間違いなくコツを掴んだということだろう。何なんだ一体。あれか？　梓は一応頭がいいからな、力学的解説を聞いて投げやすいボールをチョイスしたんだろうか。いや、それでもガーターばっかりだったし、ピンに当たるだけマシになった程度しか上達は見られない。
と、するとだ。
本当に梓の実力なら負けを認めざるを得ないだろう。千佳が負けるイコール俺の負けだ。潔くこの身を捧げよう。しかし、何故わざわざスタッフに助言を乞いに行った？　プライドか何かとは思ったが、あれだけみんなの前で千佳と差をつけられていたんだから関係ないっちゃ関係ないよな。別にアドバイスを聞くなら俺だって倉敷さんだって裕也だっていたんだし。むしろこういった場合は俺を頼ってくるはず、なんだ。
次のフレーム、それで見極めてやる。
千佳の三フレーム目。千佳はここですでに敗色にまみれていた。レーン上での下剋上が展開され、余裕の相手と満身創痍の我が身。四本、四本。八本を倒すことが精一杯の様子で千佳の三フレーム目は終了した。梓が立つのを待たず、椅子に崩れ落ちうなだれる。栗色の髪が顔を覆って表情を隠してはいるが、ほぼ戦意喪失状態だ。でもよく考えてみてくれ千佳。あんなころころ転がしたボールでそう易々とストライクが取れるわけないじゃないか。おそらく、梓は使ったんだよ。俺に近付くためなら何でもする。それが神宮寺梓なんだ。
梓は千佳の様子を一瞥して、軽やかなステップでボールを取り、位置についた。
てけてけてけ、ごろ～。今度は投げた瞬間にわかるほど一番ピンには向かっていない。疲れか？　やりおったわこいつ。絶好のチャンス到来。梓の転がしたボールは左奥のピンに当たるか当たらない

かのギリギリを通過。ぐらぐらとピンが揺れ、内側へと倒れた。かこ、かこかこかこかこ。それから何とまぁ、不自然にも程がある。端のピンを起点にドミノ倒しのように次々に倒れていくボウリングのピン。それは三角形の外周を一周し内側へと向きを変え、最後に真ん中のピンを倒してストライク。実に不自然な倒れ方、倒れた方向。ミステリートライアングルの完成だった。

「きゃーっ！　やったやったぁ！　またストライクですぅっ！」演技派だなぁ。

勝利を確信しているガッツポーズ。まだまだ、勝負はこれからだ梓。

「梓、こっちにおいで～」

「きゃうんっ。はいはいただいま～」

餌を待つ子犬のように、尻尾を振りながら寄って来る。可愛いなんて思っちゃいけない。「おすわり」と言いつけると梓は従順にも俺の前に膝をつく。一見すると危ない構図に見えるがこれはおしおき、しつけなのだ。

俺は目の前に屈んだ子犬のツインテールを思いっきり両側に引っ張った。

「はにゃっ！？」

梓は面食らった猫のように目をぱちくりさせて頭の尻尾の付け根を押さえ叫んだ。俺はうすら笑みを浮かべ、梓を睨みつける。

「あ～ず～さ～ちゃ～ん？」

「は、はひっ！」

「カウンターの人にいくらお小遣いあげたんだ～？　んん～？」

「は、ははは て、はてはて、何のこと、ことでしょうか？」

俺は掴んでいた二本の尻尾にねじりを加えた。梓の顔が悲痛に、愉快に歪む。

「はにゃにゃにゃにゃーっ！？」

「白状しろ。ピンの仕組みはわからんがあんなふうに倒れることなんてないんだよ。容疑は明白だ。正直に言わないと一生口利いてや

んないからな」
泣かせたら一生口利けなくなるけどね。これは俺の命懸けの賭けだ。梓が自分の非を認めてくれるのを願うだけ。
「にゃ、にゃー……にゃー……にゃあ……五百万ほど……にゃあ……」
ご、ごひゃく？　五百円じゃなく五百万だと！？　こんな勝負のために……やはりこいつの金銭感覚は俺たちとは一線を引くものがある。そこまでして勝ちたいか。
「今すぐ、今すぐに謝って来なさい。そんな大金をこんな勝負に使うんじゃありません。小切手なんだろ？　返してもらえ」
「ひゃい……」
三人は神妙な面持ちで俺と梓のやり取りを見ていた。それに作り笑いで一瞥して、うなだれる梓の首根っこを掴み、一緒にカウンターに謝りに行った。せっかく手にした大金を返せと言うのもいささか忍びないが、受け取る方もどうだろう。
カウンターでさっき梓が話していた女性の店員さんを見つけ、まずは俺が頭を下げた。その店員さんはびくっと肩を震わせる。
「あの、すいません。さっきこいつが小切手を渡したと思うんですけど、返していただけませんか？」
同じく、梓の頭も無理矢理下げさせる。
「あぁ、さっきのですよね。ちょっといきなりで気が動転して勢いで混乱して有頂天になってあれこれ考えてぜひともなんて言われるのでうあーっとついもらっちゃったんですよね」
かなり動揺しているようで申し訳ない。そうだよなぁ、五百万なんて、ある程度好きなもの買えるもんなぁ。手放したくないよなぁ。本当、申し訳ないけど。
「先程ご迷惑をおかけしたことは謝ります」ぺこぺこ。梓もぺこぺこ。
「い、いえいえ、さすがに五千万なんて大金、初対面の人にあんなことでもらうわけにはいかないですし、現実的に考えたらこんな話

しありえないし。これもおもちゃなんですよね？」
ごっ、五千？　聞き間違いか？　梓に目をやると、冷や汗混じりで目を泳がせていた。小切手が信じられてなくて良心的な人で良かったものの、まったく、人の人生を変えてしまうような金をこんな勝負につぎ込むんじゃねぇよ。
まぁ、それはいいとしても……あの三人は……。
店員さんもどこか安心した表情で小切手を返してくれた。その内容は紛れもなく金五千萬。
そしてカウンターを離れ、梓にデコピンを一発。「ひゃうっ！」
「ほんっとにアホだなっ！　お前はっ！」
「だ、だってだって、先輩と一夜を過ごせるならそれくらい……」
ふぅ……。梓、違う、違うんだよ。俺が怒っているのはそんなことじゃない。お前が金をどう使おうが知ったこっちゃないんだ、実際。あるものも使うのは仕方がないことだと思うよ。それは力だと思うよ。お前がその気になれば欲しいものは何でも手に入れられるだろうさ。だけどな、今日それをやっちゃいけない。せっかく話せるようになったんだ。せっかく一緒に遊べたんだ。余計なお世話かもしれないけどさ、お前、笑ってたじゃないか。
「今日は楽しかったか？」
「えっ、あ、はい。みなさん良い人で、こんなことして遊んだのも初めてですし。これからまたこうして、みなさんで遊べたらって、そう思いました」
梓は無邪気に笑う。俺はどんな顔をしているんだろう。自分ではよくわからない。いろんな心情が巡りに巡って、ただただ、呆れていた。当たり前のことをわからない、そんな奴もいるんだから。でもそれは、単純で、遠い。
「なら、千佳たちにも謝ろうな」
梓はきょとんとして首を傾げていたが、俺はそれ以上何も言わなかった。元々は住む世界の違う者同士、それがこうして一緒にボウリングをしたことだって、小さな奇跡と呼べるものかもしれない。

梓が感じてわかってくれるのを切に願う。『友達』として梓が三人に受け入れられるかどうか、手助けはするが、あとは本人次第。
――なんて、何やってんだ、俺。本当に保護者気取りじゃないか。倉敷さんの言葉もそうだと思えてしまう。自分のため、これは自分のためなんだ。
三人の元に戻ると、千佳がジト目でこちらを見ていた。さっきのやり取りと、俺と梓が謝る姿を見て何が起こったかわかったのだろう。本気で向かって行ったのに、相手はインチキしていた。そんな奴と友達なんてなれるのか。俺には笑って済ませられる程の度量はない。
「あの、千佳先輩、さっきはすみませんでした」
気持ちはあまり込められていない、戸惑いながらの謝罪だった。
「何を、謝ってるの？」
千佳は表情一つ変えることなく、冷淡に言った。その目はとても冷たさを感じさせるもので、長い付き合いのある俺ですら直視することは遠慮願いたいくらいだ。ダメだなこりゃ。そんなことが頭をよぎる。
「え、えっと、お金を使って、ストライクになるようにしてもらった……こと、です……」
さすがの梓も千佳の醸し出す雰囲気に気圧されているようで、語尾が小さく、自信なく口にした。
「じゃあ、どうして謝ってるの？」
「え？　え、えっと、ど、どうして……って……」
そこで梓は俺に目で助けを求める。俺は何も答えないし、顔に出すこともしない。これはお前自身の問題なんだ。
「梓ちゃんは、真がいればそれだけでいいの？」
答えられない梓の様子を見て千佳はまた質問を投げかける。梓は、それにだけはすぐに答えられた。
「はいっ。真先輩が梓の全てですっ！」
俺は、覚悟してしまった。

千佳は少し間を置いて、梓から目を逸らして言った。
「それなら、私は梓ちゃんの友達にはなれないな。ごめんね、神宮寺さん」
俺の中にもその一言は響いた。期待していたものが、音を立てて崩れて行く。淡い期待だったとはいえ、こればっかりは仕方がない。いくら俺が何を言ったとしても、これは千佳と梓の問題で、それはあとの二人も同じことで。元々梓だって友達になることを望んでいたわけじゃない。一番悪いのは、俺だ。いらぬことをしてしまった。その後悔の念だけが体に纏わりつく。
しかし、梓の反応は、俺の予想を裏切ることになった。いつも人の考えていることとは違う、斜め上をいく。良い意味でも、悪い意味でも。そして、今回は良い意味で予想を裏切られたことになる。
「えっ……」
小さく漏らした梓の表情はみるみるうちに曇り、俺に助けを求める余裕すらないのか肩を落とし、拳を握り締めた。ツインテールも力なくしょぼくれているように見える。
「と、友達には……？」
梓がここまで落胆の色をはっきり見せることは珍しかった。どれだけ俺から冷たくあしらわれようと、罵られようと、それをプラスに変えられるのが梓の性格なのに。
梓は楽しかったと言った。また遊びたいと言った。それを期待していた相手に、はっきりと拒絶されたのだ。あんたとはもう遊びたくない、そう言われているようなもの。こっちは遊びたいと思っているのに相手はそれを望んでいない。俺と梓の関係に似てるけど、異なるもの。
他人から見ればあれだけのズル、笑って許してやれよ、そんなことを思われるかもしれない。でも、それは友達であることが前提なんだと思う。今日はある意味儀式でもあった。異端者として見られている梓が受け入れられるための。
千佳が考えていることは何となくわかる。俺もそっち側の人間だ

からな。今日の小さな事件も梓の一つの奇行であって、そんなことが日常的に起こらない俺たちは必然的に『違う』と思う。自分たちとは違う。類は友を呼ぶ。そんなふうに、自分とは違うものをそう易々と受け入れられない。

千佳は俺を見て、声には出さず『ごめんね』と唇で謝った。友達になってあげると言った手前、申し訳ないと思っているんだろうか。でも、一緒にいたくない奴と友達なんて、うわべだけでも友達やれないよな。申し訳ないのは俺だよ。俺は苦笑で千佳に返事した。

「ど、どうしてですかっ！？」

突然、梓が叫ぶように声を上げ、千佳に詰め寄った。懇願するような目で、すがるように。

「だって、神宮寺さんは私のことなんてどうでもいいでしょ。真がいればいいんだから。あんなことして、自分の思うようにことを運ばせて、人のこと馬鹿にしてるよね。そんなの友達なんかなれるわけないよ。友達ってさ、恋人同士と似てるものだと思うんだよね。相手のこと気遣って、思いやって、そんな仲間を、友達って言うんだと思うよ」

千佳はまるで梓に言い聞かせるかのように言った。

梓は自分より少し背の高い千佳のことを見上げ、そしてうつむいた。少し間が空いて、梓はもう一度千佳を見上げ、またうつむいて、また見上げ、何度かそれを繰り返したあと、重い口を開いた。

「さ、さっきは……すみませんでした。千佳先輩の気持ちなんて、考えずに……」

お、おおっ……。俺は思わず出そうになった声を噛み殺した。梓が本気で千佳に謝っているのだ。悪かったと思っているのだ。そんな梓を俺は今まで見た事がなかった。

「友達に……なってくれませんか？」

梓はゆっくりと頭を上げて細々とその言葉を口にした。梓の方から友達になってくれなんて言葉、俺は夢か幻を見ているのではと自分を疑ってしまいそうな、それほど俺にとって衝撃的で、現実味の

ないことだった。頭の中で小宇宙が爆発し、それがブラックホールに飲み込まれて新たに思考が誕生するまでに数秒を要した。
千佳は嘆息し、にっこり笑って梓の頭を優しく撫でた。
「梓ちゃん。さっきの続き、投げる？」
「あっ……は、はいっ！」
ここに、梓と千佳の何かが成立した気がした。
千佳は呆けている俺を見て、ウインクと同時に舌を出して悪戯っぽく笑った。もしかしたら、これは千佳が亜美に友達っていうのを感じて欲しくて一芝居打ったんじゃないか、そう思わせるウインクだった。そういえば千佳はそういう奴だった。気配り上手でいつも人に気を遣う、人情味溢れる奴なのだ。頼れる親友がいたことを俺は大いに感謝した。
「今度はズルなしの真剣勝負だからねっ！」
「はいっ！」
お互いに嬉しそうに笑いながら、ボールを磨く。少しだけ、鼻の奥が熱くなるのを感じた。
俺はそんな二人を横目にさっきまで座っていた席に着く。その時に倉敷さんを見ると、「へぇ」と笑って二人を見つめていた。裕也も嘆息しながら笑みを浮かべている。青春の息吹を感じる。梓のおかげで遠出していた青春が、ただいまと顔を覗かせた。
俺はみんなの様子を見て、ほっと胸を撫で下ろした。
「本気だからね」「はいっ！」梓はにこにこ嬉しそう。「負けないよ」「はいっ！」梓は勝気に。「準備はいい？」「はいっ！」梓は頷く。「梓ちゃんが勝ったら真を好きにしていいよ」「はいっ！！」梓は闘志をたぎらせる。それまだ続くんだ。「私が勝ったら真から手を引いてね」「はいっ！　……えっ、え？」梓は困惑。千佳はにやりと口元を吊り上げた。千佳、お前まさか……今まではこのために……？
「いくよ！」
「えっ、ちょちょちょっと、ち、千佳先輩！？　て、手を引くっ

て……？」

「もはやサイは投げられたぁ！　ボールは投げられたぁ！」ストライク！

笹野千佳、恐ろしい奴である。神宮寺梓、憎たらしい奴である。

倉敷みちる、不思議な人である。高橋裕也、変態脇役である。

梓ちゃんとお泊まりデート

ファミレスで食事して、ボウリングに行って遊んで、梓がみんなと親睦を深めてから一週間が経った。　あの後は惨敗を記した梓が千佳に泣きついて、俺から手を引く条件をなしにしてもらった。必死な梓は少し可哀想に見えた。

その後、梓と千佳、倉敷さん、裕也は学校で顔を合わせれば挨拶を交わすくらいの仲にはなった。まだまだ仲の良い同級生のようには見えないけれど、それでも確実に梓の中で何かが変わったと思う。相変わらず教室内には鏡を置いて、教室では自由奔放に振る舞ってはいるが、直接影響を受けるのが俺だけならさほど問題はない。多少周りに迷惑をかけているだろうが、クラスのみんなも梓の起こす行動に慣れてきたのか、梓がこのクラスにやってきた当初と比べれば教室にはだいぶ穏やかな空気が流れていた。慣れって不思議だよな。俺も鏡が目の前に置かれていることに違和感を感じなくなっていた。

そんな学校生活が一時停止して休日を迎えた朝。

梓に拉致された。

いつもより遅めの起床。気がつくと、空を飛んでいた。やかましい音が体の芯まで響き、少し狭い鉄の壁に囲まれた空間。ここは、ヘリの中だ。

体を起こして周りに目をやると、優雅な空の旅で朝のティータイムを満喫している梓。少し幼く見える白いワンピースに身を包んでいた。

「おはようございます。先輩っ」

素敵な笑顔を向けて来る。こういうことは前にもあった。気がつくと海の上の豪華なクルーザーとか。寝起きでの船酔いで真っ先にリバースしたのは二年前の話し。

「おはようじゃねぇよ。どこだここは」

「梓はあれから少し勉強しました」
「俺の質問にまず答えろ」
「普通の、一般的に恋人とはどういった時を過ごすのか、一般的な大衆的なところを調べていった結果が今に至ります」答えろっつーの。恋人じゃねぇっつーの。
「起きたらヘリの中っていうののどこが一般的なんだよ！　誘拐だぞ！」
「安心して下さい。ちゃんとあゆみちゃんの許可は取ってあります」
「妹じゃなくて俺の両親の許可を取れ。その前に俺の許可を取れ」
「先輩寝てましたし」
「せめて起きるまで待つか起こすかしろよ」
「えーっ、先輩断るでしょ？」
「やっぱ誘拐だよお前！」
ともあれ、どうやっても逃げ出すことはできない。小窓から外を覗くと辺りは一面海だった。全くどこかわからない。俺の中の方位磁石も全く機能しない。服は寝間着のジャージだし。いかにも高級品のワンピースに身を包んだ梓とジャージの俺。どう見たって不釣り合いだ。
「コーヒーですか？　紅茶にします？」
「……コーヒー」
当たり前のように言うよなこいつ、ほんと。
「で、どこに向かってるんだ？　わざわざ自家用ヘリまで飛ばしやがって。毎度毎度ことが大袈裟なんだよ、ったく」コーヒーあちっ。
「梓の島です。もうすぐ着くと思いますよ」
島？　アイランド？　梓の島って、個人で持ってるっての？　いや、こいつならありえる。誕生日か何かで島をもらうって、そんな役に立たないものを平然とやる親がこいつにはいる。
「お小遣いで今日のために買いました」
「お小遣いて、お前のはもはや小遣いじゃねぇ」俺の小遣い、月一万。梓のおかげでほとんど使わないけど。その辺ではお世話になっ

てるんですよ、ほんとに。
島を買って、そこに連れて行って、一体何をするつもりなんだ。一般的な恋人との過ごし方を調べたとか言ってたよな。それがどうして島を買うことに繋がる。
「今日の目的は？」
訝しげに俺は聞く。
「浜辺で海を眺めたり、景色を眺めたり、ゆったりとした時を過ごすのです」
「……は？」
「誰もいない浜辺で肩を並べて海を見つめる。その時二人に言葉はいらない。ただ風の音と波の音だけが囁き、時折香る潮の匂いが自然と顔をほころばせる。そして、二人はそっとキスをした」
「しねぇーよ！　んなことのために島買うな！　そこらの海でやればいいだろ！」
「いやいや、エメラルドグリーンに輝く海の真っ白い砂浜で二人っきりの時間を過ごすことが一般的な恋人との過ごし方だと」指を立てて自慢気に言う。
「そりゃ一度はしてみたい恋人との過ごし方だろ。一般人はエメラルドグリーンの海なんてそんじょそこらにない海にちょくちょく行ったりしない」
「ですよねっ」てへっ。
「……お前、しばくぞ？」
狭いヘリの中で梓を追いかけ回す。梓は「きゃいん！　きゃいん！」と子犬のような鳴き声で逃げ、俺が寝ていた小さなベッドに飛び込んだ。俺は飛び掛かり、梓の腕を掴み、拘束する。
押さえつけられた梓のワンピースははだけ、肩ひもはずれ落ち、白い柔肌の太腿が露わになる。梓の髪からは、やたらいい匂いがする。
「あの、初めてだから、や、優しくして下さいね……」
梓は頬を染め、全てを俺に委ねるつもりで目を瞑り、唇をぎゅっ

と引き絞る。俺は梓の額にかかったツインテールの片方を払い、そっと、梓の額を撫でた。
「あっ……」
梓の唇から小さな吐息が漏れる。
「行くぞ？」
「は、はいっ……！」ぺちんっ。「あいたっ！」
「人をさらったおしおきだ」
ぺちぺちぺちぺちぺちぺちぺちぺちぺちぺちっ。秘儀、デコピン乱舞。親指以外で流れるように打つ高等技術。地味に痛い。
「あいたたたたたたたっ！　痛いですっ！　やめっ……いたたっ……ハァハァ……」
梓が恍惚の表情になりかけていたのですぐに手を止め、飛びのいた。
「な、何でやめちゃうんですかぁ？」
「変態め」
それから梓を新たな世界に目覚めさせてしまったことに後悔しつつ、窓の外を眺めていた。梓は俺の腕を掴み頬をすりすりと、犬から猫へとその身を変貌させた。これならいつものことだから気にならない。……気にしようよ、俺。
「見えました。あれですよ」
しばらく飛ぶと、梓は窓の外を指差して言った。その先を見ると、確かに島があった。空からでははっきりとその大きさはわからないが、歩いて一周できそうな、それほど大きくは見えない島だ。見る限り建物らしきものは確認できない。どうやら無人島らしい。ぐるりと囲むように白い砂浜。島の中央には木がまだらに生えている林がある。
「じゃ、そろそろ……」
梓は何やら重装備に身を固め始めた。分厚いジャケットを着て、目にはゴーグル。そして、その背中に背負っているものは……パラシュ……おい、まさか、嘘だよな？

「斎藤さん、先輩にも」
梓の専属警護人、斎藤さんが操縦席から現れ、俺は梓と同じ格好に無理矢理着替えさせられた。そして、梓が俺の後ろに立ち、しっかりと二人の体が固定された。ヘリは高度を上げているように見える。
「あ、ああ梓？　まさかとは思うが、こ、ここ、ここから飛ぶんじゃない、だろうな？」
「お察しが早くて助かります」
ヘリのドアが開かれた。耳を劈くような風の音が聴覚を支配し、目の前には青々と澄み渡った空がパノラマに展開される。しっかり掴まっていないと今にも吹き飛ばされそうだ。
「暴れないで下さいねー！　間違って海に落ちたら死ぬかもしれませーん！」
背中の梓が耳元で叫ぶ。
「ふ、普通にヘリで降りればいいだろっ！　何でわざわざ飛ぶんだよー！」
「吊り橋効果狙いでーす！」
「つ、吊り橋って！　ここっ！　空っ！　橋ないっ！」ドキドキドキ。
「四の五の言わずに行きますよー！」
「ま、ままま待てっ！　俺っ、飛んだことなんかっ！　ないっ！　ないからっ！」
「安心して下さーい！　梓も初めてですからーっ！」
……えっ？
「おまっ、うそだっ！　やめえぇぇっ！」
「ウィィィィィ、キャァァァァァァン……」
まじやめっ、しぬっ、ぜったいっ、だめ、ぜったいっ！
「フラァァァ

ぁぁーー……！！！！！！！」

今世紀最大の叫び声を上げ、宙に投げ出される。太陽の光を全身で浴びて、前も後ろも横も上も下も、青かった。水平線が丸みを帯び、地球が丸いことを実感した。

俺は、鳥になった。

「あっはっはっはーっ！　爽快でしたねーっ！」

「はぁっ……はぁっ……」

今、無事に島の上にいる。奇跡としか言いようのない。飛んでいる、いや、落ちている最中、梓が叫んでかろうじて聞き取れた言葉が「コントロールの仕方がわかりませーん！」だった。死を、覚悟した。パラシュートが開き、風に流されながら、おそらくは全く着地予定地点と違ったであろう狭い方の砂浜に着地できた。その際に砂浜に擦りつけた鼻が痛い。俺はいまだ足がすくみがくがく震えているが、梓はいかにもスカイダイビングを満喫したかのように爽やかな笑顔で笑いかけていた。

「死に、死にかけた……。寝起きでいきなり死にかけた……」

「うーん、先輩っ！　ほら、見て下さい！　目の前に広がる美しく輝くエメラルドグリーンの海！　サンサンと照りつける太陽！　まるで梓たちを祝福しているかのような光に満ちた世界ですよ！」

「何を、祝福……うぁぁ……」

もはや梓にツッコム気力がない。元気もない。もう、くたくただ。屈託のない笑顔に太陽の光も加わってとろとろに溶かされそうだ。

背中にかいた嫌な汗をどうにかしたくて分厚いジャケットを脱ぎ棄て、ジャージも脱いだ。シャツ一枚になって一息吐いたところに、空からふわふわと、まるで救援物資が届いたかのように何かが舞い降りてきた。それは俺の目の前に小さなパラシュートと共に落ちた。大きなバッグだった。

「あ、来た来たぁ」

ジャケットを脱ぎ棄てた梓がぴょんぴょん飛び跳ねながらそれに駆け寄り、中身を確認。俺も一緒に中を覗くと、そこにはカセットコンロ、あとは調理道具がいろいろ、食材がいろいろ、ペットボトルの水、寝袋がぎゅうぎゅうに詰められていた。ここで過ごせと言わんばかりに。

「梓、一応聞くが、これは何だ？」

「え？　一日分の食料と寝袋ですよ？」

さも当然のように言う。

「つまり？」

「今日はここで過ごして、明日迎えに来てもらいます。ほら、明日も学校お休みですし」

ああ、死亡フラグ発生の予感。ここで寝ることなんて大したことじゃない。梓と一緒ってことが大きな問題だ。

「ちなみに、お前のパパはこのことを知ってるのか？」

「な・い・しょ」

愕然とした。梓の頬をいつの間にかつねっていた。「いひゃひゃっ！」

……終わった。俺の人生が終わった。このことがあの親に知れれば即刻俺の命の灯が消える。この世から消える。いっそこのままここで暮らした方がマシなんじゃないか？

「帰る！　いますぐ帰るぞ！」

「残念ながら、ここは通信機器一切の電波が届かない場所なんですね。衛星通信も不可です。ですから、明日にならないとだーれも来てくれません」

にこにこと邪悪な笑みを浮かべて嬉しそうに言ってのける人さらい。無人島に二人きりの、完全に閉鎖された空間。難破船でも漂流して来ない限りは、俺と梓を見つけてくれる人はいない。しかし、波は穏やかだった。本当に梓と二人っきりで一夜を過ごさねばならん状況に陥ってしまった。照りつける太陽が、俺の体を焼く戒めの炎に見えてならない。

「はぁ……」
先の人生が暗闇に包まれたことを無念に思い、砂浜に寝転がった。さらさらと、気持ちの良い手触りの砂が首筋を撫でる。ここがどこかもわからないが、住んでいた場所より暑い。少なくとも南に下ったことは間違いなさそうだった。毛穴からはじんわりと汗が染み出てきて、まだ四月だというのに海に飛び込みたい衝動に駆られる。目の前に広がるのは紛れもなく、透明感のあるエメラルドグリーンの海だった。
「先輩、どうします？　泳ぎます？　水着もありますよ。生着替えもお披露目ですっ」
「ゆっくりするんじゃなかったのかー？」
うきうきわくわく、落ち着きなく言う梓を一瞥して空を見上げた。角のない丸みを帯びた雲が行き場を求めて彷徨って見えるほど風は穏やかで、湿度のない気持ちの良い空気が肌を触る。不覚にも、悪くないなと思ってしまう。少しでも現実に目を戻せば……いや、今は考えるまい。どうせなら、少しでもこの楽園を満喫してみようか。
少し歩いてみることにした。見知らぬ島に漂流して、海岸線を歩き自分で地図を作るなんて、ちょっとしたサバイバル体験でもどうか。まぁ、空からこの島の全貌は見たけれど、あの岩を目印に、あの木を目印になんて、ちょっと楽しくなってきたぞ。目を開いて起き上がると、細かい砂がぱらぱらと落ちた。
「梓、この島を一周してみようぜ」
「どこまでもお供します」
奥ゆかしく首を傾けた梓は俺の隣を歩く。さっきのバッグに入れていたのか、赤いリボンが巻かれた麦わら帽子をかぶり、幼さを強調させる。大きさの違う足跡をスタートとして、一周歩く。足跡が波にさらわれないように、波打ち際を避け、ゆっくりと、爽やかな風と戯れながら。
紙もペンもなく、地図は頭の中に描き出す。
ハンモックでも吊れそうな大木を一つ目の目印に、次は行く手を

阻む障害物のように幅広く伸びた岩を。
「二人の式は、こんな海辺の教会で挙げたいですね」
その岩を乗り越えて、漂流してきたらしい丸太が二本並ぶ砂浜と林の境界線を次の目印に。潮が満ちればそこまで浸るのか、と今のうちに満潮時の予想を立てておく。
「子供は二人欲しいですね。男の子と女の子。先輩似なら、きっと可愛いんだろうなぁ」
もうしばらく歩くと、巨大な木が砂浜に影を作るように斜めに生え、緑色のドレスを惜しげもなく見せつけているところがあった。砂浜に葉の影ができていることに少しだけ神秘を感じながら、四つ目の目印に、
「なんなら今日子供作っちゃいましょうかっ！」
したところで小振りでも柔らかな胸を押しつけてきた梓を振り払って俺は逃げ出した。
既成事実を作るわけにはいかん。俺が生き残れる可能性はまだゼロじゃない。何もしてない、無理矢理連れて来られた。何度も訴えればあの閻魔様も見逃してくれるかもしれない。
これは……生き残りを賭けた、本気のサバイバルだ。

「いいか、この線からこっちに来るんじゃないぞ。わかったな？」
「うう～……どうしてそんな意地悪するんですかぁ……」
全速力で島を一周し、曖昧な地図を頭の中に広げ終えたあと、荷物のそばで適当に線を引き境界線を作った。間違いがあったら何も言い逃れができない。俺も一応は健全な男子高校生なのだ。二人っきり、誰も邪魔が入らない無人島で、一応女子高生である梓の執拗なボディーアプローチを受け続けてはいつまで自制心が持ってくれるのかわからない。こいつは美少女なのだ。それは紛れもない事実であり、いい匂いがするし、小振りな胸だけどスタイルはいいし、愛らしい瞳と唇を見ているだけならまだしも、直接肌と肌との触れ

合いが頻繁に行われた日にゃあ俺の中の獣が雌を求めて暴れ出すこともあるかもしれない。
「どうしてもだ。俺と一緒にいたければ入ってくるな」
「うう～……そんなの、どうしたらいいんですかぁ……」
見えない壁に必死にかきむしるようにすがる。パントマイム披露。
いっそのこと話して……いやいや、ダメだダメだ。梓に言ったらいいように利用されるだけだって。都合が悪ければ泣いたり、二重に脅されることになりかねん。それだけは避けなければ。
梓がうじうじと砂浜をいじってうなだれている時、ふと空を見上げれば太陽は真上にあった。もう昼頃なんだろうか。そういえば、時計も携帯も持ってきていない。腹も減ってきた。そうしてまた一つ気付く。梓の奴、料理なんてできるのかと。レストランばかり行っていたので今まで気にも留めなかった。ちなみに俺はできない。作り方さえわかればできるだろうが、それがわかるようなそれらしい本も荷物には見当たらなかったし。
「梓、お前料理できるのか？」
境界線ぎりぎりまで出張り、期待を込めて聞いてみた。梓ができないのなら、調理なしで食べられるものを食べなくてはならない。無知は愚かなり。
「もっちろん！　花嫁修業はバッチリですっ！　そのために調理器具を持ってきましたから」
えっへん、胸を張る。憎たらしくも愛らしい仕草だが今は頼りになった。梓が料理なんて意外だけど。
「じゃあさ、そろそろ腹減ってきたから何か――」
「嫌です」
俺が言い終わる前に梓はぷいっとそっぽを向いて拒否してきた。
「ふぇ？」
思ってもいなかった返しに素っ頓狂な声を上げてしまう。
「意地悪する先輩には梓の手料理なんて作ってあげませんっ」
ぷいぷいっ、頬を膨らませて、わざとらしい怒り方だ。しかしそ

んなことを言われて梓にすがってしまうのも癪なので、俺も意地になる。
「ならいいよ。自分で作るから」
「それはいいですけど、バッグはこちら側にありますからね。その線を越えないと調理器具はおろか食材さえ手に入りませんよ？　先輩のご飯は梓の手にあり、です。くふふっ」
こ、こやつ、むかつくっ。その含み笑いがむかつくっ！　きいぃいっ！
「いいよ！　いいですとも！　一日くらい、何も食べなくたって平気だよ！」
「ちなみに水もこちら側にあります」
ぐぬぬ……、み、水は厳しい。ただでさえ暑い中走り回って喉が渇いている。さっき見たところ、この島に水源らしきものは見当たらなかった。何もかもが梓の手の中にあるということか。
「簡単なことですよぉ。その線を消しちゃえばいいんですから。梓は先輩が欲しい。先輩はご飯が欲しい。利害は一致しますよね」
いや意味がわからん。でも水だけはどうあっても欲しい。命と水との天秤かよ。
「あれ？　人……か？」
俺は唖然として梓の後ろを指差して言った。もちろん、こんなちっちゃな無人島に人なんて俺ら以外にいはしない。我ながらなかなかの演技力である。
「え？」
まんまと振り返る梓。この隙に水だけでもっ。
「せーんぱいっ♪」
バッグに手をかけた刹那、梓にその腕を掴まれた。にーんと嬉しそうに満面の笑みを浮かべ俺を見下ろしていた。
「ここには人はおろか動物一匹生息していないのは調査済みです。いけない子ですねぇ、先輩。人を騙して食料を奪い取ろうなんてぇ。線、越えましたねぇ。うへへへ……」

怖い。なんていやらしい、いや、恐ろしい笑い方をする奴なんだ。女の子とは思えない力で俺の腕はがっちり固定されていた。危険。退避。避難。様々な救難信号が届く事のない誰かに向けて発信される。

「待てっ！　落ち着け梓！　ここは共同戦線といこうじゃないか！　空腹という敵を倒すためにはお前の力が必要だ！　俺も微力ながら力添えをしよう！」

「うへへ。じゅるじゅる、つーかまーえたぁー」「聞けーっ！」

俺は力任せに押し倒されそうになる。このままでは俺の貞操が、いや、命が……許せ、梓！

俺は流れに任せそのまま後ろに倒れ、梓の腹に足を当て、秘儀巴投げで梓を投げ飛ばした。

こうするしかなかったんだ、梓。すまん。

「うへへへ」

俺は見た。空中で笑いながら身を翻し、華麗に着地する梓を。

「お前何者！？」

「さぁ、観念してその身を梓に捧げて下さい。先輩」じゅるうり。

どこでタガが外れたのかわからない。この二人っきりっていう状況がここまで梓を変貌させてしまったのか？　どうにも、逃げられそうに、ない。どうする。どうする？

梓は獣のように涎を垂らし一直線に俺に駆け寄り、そのままの勢いで俺を押し倒した。頭を打ち付けて一瞬の目眩。そして梓は勢いよく唇を押しつけようとする。それを首を捻ってかわした。せめて涎は拭いてくれ。そんなことを冷静に思う俺は、追い込まれた危機で、最も有効な言葉を呟いた。

「俺は……清楚でおとなしい梓が好きだな……」

「……っ！」

ぴたりと、梓の動きが止まった。こういった反応はわかり易い奴である。梓はゆっくりとその身を起こし、恥ずかしそうに背を向け、ワンピースについた砂を払い落とした。「ふう」と小さな溜息を吐

き、麦わら帽子を取って結んでいたツインテールを解く。背中の中程まであるウェーブのロングヘアーが大人っぽさを演出する。そして梓はゆっくりと振り返り、
「先輩ったらもう、乱暴なんだから」
親指を口に当て、艶っぽい瞳で照れながら言った。鼻の頭に砂がついて間抜けに見えたことは黙っておこう。ツッコミたいところはいくらでもあったのだが、つまるところ、俺は勝ったのだ。猛攻に耐えきった自分に勝利のファンファーレを贈ってやりたい。ついでにもう一言。
「家庭的な人も結構好きだな。料理って、愛情が籠もるほどおいしくなるって、ほんとかな？　梓の愛情たっぷりの料理って、きっとうまいんだろうなぁ」
梓をチラ見すると、ぷるぷると肩を震わせていた。
「どっせーい！　任せてくだしゃい！」
作り上げた清楚さは一瞬でなくなり、瞳に炎をたぎらせて梓は叫んだ。舌舐めずりはやめろ。俺を料理するんじゃないんだからな。
梓の髪型がまた変わった。料理し易いようにか、後ろで一つに結んでポニーテールを作り上げた。
「勝負服に着替えます！」
勝負服？
ごそごそと、鞄の中をまさぐり取り出したのは、ハート柄が異様に散りばめられているエプロン。まぁ、当然の装備かな、と思って見ていれば、突然ワンピースを脱ぎ出す梓。一張羅を脱ぎ捨てた梓は純白の下着姿を太陽の下にさらす。
まさかとは思うが、エプロンと言えば、
「その通りっ！　新婚生活の定番、裸エプロンですぅ！　悶えて下さい！　梓を見てハァハァして下さい！」
心を読むな！　女の子が自分からそういうこと言うな！
「お前の裸エプロンなんて見ても興奮しない」
「がーん……」

本気でショックを受けているらしく、少し悪い気がした。
「ま、まぁエプロン姿はありだな。でも、服は着てる方がいい」
「そうですか……」
残念そうに、脱ぎ捨てたワンピースを着直す。そんなに落ち込まんでもよかろうに。もっと恥じらいを持てよ。
梓は勢いをなくし、いそいそと料理の準備を始めた。
何を作るのか期待してしばらく眺めていると、バッグから取り出したのは大きめの鍋とカセットコンロ。鍋に水を入れ、コンロに火を点けお湯を沸かし始めた。お湯が沸騰して次に取り出したのは、明らかにレトルトカレーとレトルトご飯三個パック。それを湯煎にかけ、待つこと十分。
「できましたぁっ！」
「うわーい……」
待ち焦がれたご飯だー。乾いた拍手を贈ると、梓は恥ずかしそうに「えへへ」と笑う。本当に褒められたと思っているのか。何が花嫁修業はバッチリだ。お湯の沸かし方を教えてもらうのが花嫁修業なら世の中の女性は小学生でそれをクリアーしている。
「っていうか何だよこれ！　俺すっごく期待してたんだぞ！　返せ！　俺の期待を返せ！　大体食材なんて他にもいろいろ入ってたじゃないか！」
「あんなの、ただの雰囲気ですよ。さ、食べましょう。一流ホテルの熟成カレーですから、おいしいことは間違いありません」えっへん！
梓は誇らしげに言う。残念だ。まったく残念だ。
だけど、カレーはおいしかった。

昼食を済ませ、夕食には何の期待も抱かないまま、やたら豪華なティーセットでお茶を満喫していた。その辺にこだわる辺りは梓もお嬢様ということなんかね。

「ティータイムはいいですけど、このあと暇ですねぇ」
お前が連れて来たんだろうが。
「海でも眺めてようぜ、海。それが目的だったんだし」
「誰の？」
「いいよもう……」
なーんにもない島なのに、俺の心が落ち着くことなんてないのかなぁ。そんなことを思っていると、白い鳥が優雅に空を舞う姿が見えた。あんなふうに飛べたら、一人で帰れるのに。何もかもから解き放たれる開放感、あははー。
「先輩、遠い目してますよ。そんなに梓との将来が楽しみなんですか？」
「ある意味、楽しみだ」お前から離れられるその時が。
いつでもどこでもこいつは俺の隣にいる。それが当たり前になっているこの今から、ほんとにこいつがいなくなってしまえば俺はどうするんだろう。梓の顔を見つめると、「えへへ」と笑ってあどけなさを二割増しする。もしお前が金持ちじゃなかったら、俺たちの関係ってどうなってたんだろうな。もしかしたら恋人になっていたのかもしれない。でも今の梓は、やっぱり金持ちの梓で、こいつの性格だってそれがあるからこうなったもんだろうし。
「はぁ……」
俺が溜息を吐くと、訝しげな表情で俺の顔を覗き込んでくる。もし、万が一、いや、億が一、あの父親に認めてもらうことがあったとすれば、俺は梓と恋人になるんだろうか。そんなありえないことを頭に思い浮かべれば、疑問が一つ浮かんでくる。どうして俺が梓の恋人にならなきゃいかんのか。梓のことを好きでもないんだから。
「泳がないんですかー？　ほら、水着もあるんですよー？」
荷物から取り出した水着をひらひらと俺の眼前で披露する。水色のビキニだった。美少女と水着。このセットが目の前に転がっているのだから、男子高校生としては胸をトキメかせるはずなんだけどな。やはり俺にとっては地雷になる。少しは恥じらいを持ってく

れれば、俺だって多少危険を冒してでも拝みたいなんて思うかもしれないのに。あれだ、色気がない。それにさっき下着姿まで見たし。
「日に焼けるぞ。やめとけ」
「オイル塗ってくれます？」
「塗らないからやめとけ」
「ぶぅ……」
不満気な梓を一瞥して、俺は白い砂浜に腰を下ろした。少しだけ落ち着いて見れば、素晴らしく綺麗な場所である。波の音が心地よく、目を閉じて耳を澄ませば、波の中にいるような気分にもなれた。それを邪魔するように、梓がずしゃずしゃと砂浜を踏み荒らして俺の隣に乱暴に腰を据える。不満そうなままだったが、俺は気にせず後ろに手をついて体重を支えた。梓も真似して、結果二人で海を眺める形になる。
文句言うなよ？　当初の目的だ。平和なゆっくりとした時を満喫しようじゃないか。
誰もいない浜辺で肩を並べて海を見つめる。その時二人に言葉はいらない。ただ風の音と波の音だけが囁き、時折香る潮の匂いが自然と顔をほころばせる。そして、二人はそっと、
「キスをした」「だからしねぇって」俺の脳内に語りかけるな。
「ファーストキスは大事にとっておけ」
「梓はもうファーストキスは済ませてますよ？」
きょとんとして、当たり前のように言ってきた。こいつ、ちゃんとそんな相手がいたんじゃないか。どうしてこうなっちまったかなぁ。何度こういうことを思ったか。でも、心がちょっとズキッと青春の痛みを感じたのは秘密だ。
「先輩が寝てる間に。何度も唇を重ねました」
「返せ！　俺の初めてを返せ！」
「じゃあ、今から。んー……」
「しねぇっつーの！」
怖ぇ、怖ぇよこいつ。部屋の鍵は二重にかけておかないと。なん

ならソコムにでも頼もうか。いや、企業なら買収されかねない。警報装置でも取り付けるか？
「大体なぁ、不法侵入だぞ。いくら神宮寺家でも警察ざただからな」
「梓はいつもきちんとあゆみちゃんの許可は取ってますよ？　キスだって」
あゆみー、キスの意味わかってて許してるのかー？　お兄ちゃんは大変なんだぞー。
「ちなみに先輩の部屋の合鍵も作ってます」じゃらん。
「よこせ」
俺が手を出すことをわかっていたかのように、梓は鍵を素早く引っこめた。鍵は紐を通していてネックレスのようになっていた。梓はまた含み笑いで俺を見据える。「梓の宝物ですから」そう言って鍵を首にかけ、鍵はちょうど胸元に収まった。「どうぞ」と胸を突き出してくる梓。何がどうぞか知らないけど、俺は首元の紐を掴んで一気に鍵を奪い取った。
「ああーっ！」
「ふっ、まだまだだな梓」
俺はそいつを勢い良く遠投。鍵は海の藻屑となった。鍵もサンゴの仲間になれて本望だろう。
「まぁ、型番は記録してますからいくらでも複製できますけどね」
やっすい宝物だな。
「その記録ごとよこしなさい」
梓は舌をべーっと出してにししと笑う。そんな笑い方をされると、怒る気も失せるのが困ったところだ。可愛く思ってしまうのも、気のせいじゃないだろう。「ったく、可愛くねぇな」そう思う度に、俺は梓から目を逸らす。
「小悪魔梓ちゃんですっ」
ああ、ほんとに、可愛くねぇ。

夕食もまたカレーだった。一応ビーフカレーがチキンカレーに変わって全く同じじゃなかったものの、やっぱり残念だった。
だんだんと日が落ちて来て、やっと方角がはっきりしてくる。日没は、それを『死』と象徴する文化もあるらしくて、そのことを考えると、まるで自分の命が消えていくような儚さを感じてしまう。明日になれば俺はどうなるのか。今のところ間違いは犯してないし、きっと、きっと大丈夫だ。うん、大丈夫！
「せーんぱいっ。一緒に夕陽を眺めましょ」
この島からは水平線に沈む夕陽が綺麗に見えた。きっと日の出も美しいものなんだろうなぁ。夕陽を眺めるのは、まぁ悪くない。風情に溢れている。辺り一面がオレンジ色に染まって、梓の茶色い髪は金色に輝いているようにも見えた。
「暗くなるまで、静かに眺めような」
空には待ちきれんと言わんばかりに己の存在を主張する一番星が一つ。梓はそれを見つけて指差し「一人ぼっちですよ」と呟く。「今は見えないだけで、そのうちみんな追いつくさ」なんて、ロマンチスト気取りか、俺。でもその通り。それほど時間も経たないうちに辺りは暗くなり、頭上には満天の星空が広がった。どれがどの星座かまるでわからないほどに、無数に散りばめられた光。さっき見た一番星も、もうどれだかわからなくなっていた。夜空を見上げれば、星の海に落ちて行くような錯覚に陥る。それほど深くて、綺麗な夜空だった。
梓もこればっかりは黙って夜空を見つめていた。街中ではまず見る事のできない星空。梓はいろんなとこに行ったことがあって、初めて見るわけでもないだろうに、それでもやはり心奪われるものがあるのだろう。
どれほど黙って夜空を眺めていたかわからない。決して見飽きないと思っていた夜空を眺めることに飽きてきた頃、俺の肩にこてん、と小さい頭が乗っかってきた。重心を熟知しているかのように、ぴったりと寄り添い体重を預け、安らかな寝息を立てる梓。こいつも

なんだかんだで疲れてたんだろう。
「まったく、おとなしくしてれば可愛いのに」
良く聞く台詞だ。でもそれはこいつにこの上なく当てはまる言葉だろう。本当に、こいつの寝顔は思わず頬が緩んでしまうくらいに愛らしい。
「ぐへへ……せんぱーい、あんっ、激しい……むにゃ……」
「何の夢見てやがるんだ、ったく」
そんなことを言っていると、突然梓に押し倒された。不意打ちを喰らって、覆いかぶされる形になる。
「こ、こらっ、俺はっ……！」
「むにゃ～……えへへ……」
「なんだ、起きたんじゃないんだな」
寝ててもこれなら、さっきのことは撤回せにゃならんかな。
「大サービスだからな」
上に乗っかる梓を横に寝かせ直して、腕枕をする。柔らかい髪がくすぐったかった。
「この星空を見せてくれたお礼だ」
満天の星空の下、無人島に二人きりで、まるで、世界に俺たちしかいないような、そんな小さな世界だった。

翌朝、プロペラの轟音とすさまじい風によって目が覚めた。
聞いたところ、梓のお父様は海外出張中でこのことは耳に入っていないらしい。
安堵よりもやけに唇が腫れあがっていたのが気になったが、想像もしたくないので慣れない砂浜で寝たせいにした。照れながらも満足そうな梓に恐怖しか抱かない、また一つ、大事なものを失った気がした。

犬

「やぁ、ジョン」

ある日の放課後、梓を先に外で待たせ、職員室への用事を済ませた帰り、倉敷さんに会った。長い黒髪がさらさら揺れていた。相変わらずの柔和な笑みで片手を上げ、聞き慣れない名前を呼んだ倉敷さんの視線を追い、振り返ってもそこには誰もいない。どうやら俺に向けられている言葉らしい。

「やぁ倉敷さん。来栖真です」と同じように片手を上げ名乗りを上げた。

「ははは、知ってるよ。ジョン」

二人っきりで話すのは初めてだが、日本語が通じているのかわからなかった。それとも倉敷さんの友人はみな、倉敷さん専用翻訳機でも常備しているのだろうか。千佳からもらっておかないとな。そんなどうでもいいことはさておき。

「俺は見た目通りの日本人で両親も日本人なんですけど？」

「見てわかるよ。馬鹿にしないでくれないかな」

軽く怒られた。「ごめんなさい」と理不尽な怒りに謝罪する。馬鹿にされているのは何となくこっちだと思うんだけど。

「ジョンっていうあだ名をつけられたのは初めてだな。なんで？」

「うちで飼ってる犬の名前がジョンなんだよ。ペット繋がりさ」

さらりとひどいことを言ってくれる。この前世話焼き女房にランクアップしたのにまたペットに戻って来た。面白そうににやにやして、からかってるんだろうなぁ。

「それじゃあ俺が倉敷さんのペットみたいじゃん」

「おー、それもいいね。ほら、お手」と倉敷さんは軽快に笑って右手を差し出した。それにお手を返せば、俺はめでたく人間以下に成り下がる。どうしたものか、このまま流れに乗ってお手でもやってみようか。どんな反応を見せるか少し楽しみではある。そんな好奇

心が悪戯して、俺は倉敷さんの右手にちょんと手を添えた、
「うわっ、本当にやるなんて。ちょっと引いちゃうよ」
ドン引き。ちくしょーめ！　当たり前に返されたよ！　そんな軽蔑の眼差しを向けないで。調子に乗りました。
「なんだいジョン。私のペットになりたかったのかい？」
「違います。お付き合いしただけです。っていうか呼び止めたけど何か用事？」
「ただの挨拶さ。意外と自意識過剰だね」
馬鹿にされているというか、ケンカを売られているのではないだろうか。
「まぁまぁ、気を悪くしないでおくれよ。今日はご主人様と一緒じゃないんだね」
「……外で待たせてる。職員室に用事あったから。倉敷さんこそ部活じゃないの？」
「……へー。私も用事でさ、今から帰るところなんだよ」
「そうなんだ。それじゃ倉敷さん、また明日」会うかわからないけど。
「うん、行こうか」
と自然に俺の隣に並んで歩き出した。まぁ帰るんだから昇降口までは一緒になってもおかしくはないよな。
そう思っていれば、先に靴に履き替えた倉敷さんは、俺が靴に履き替えるのをわざわざ目の前で待っていた。訝しげに思いつつ、そのまま愛想笑いを向けて正面玄関から出ると、それでも隣を歩いてくる。なんなんだ。
「こうしてると、恋人同士みたいだね」
首を傾けて、上目使いを披露して俺を見上げて来る。その柔和な笑みに心臓が一瞬跳ねる。長い髪を流すのはわざとだろうか。梓以外にそれらしいことを言われたことは初めてだった。からかっているのだろうが、それでも勘違いしてしまいそうなほどに魅力的な笑顔だった。またまた自意識過剰って言われるのがオチなんだろうけ

ど。
校門付近の桜並木もすっかりその花びらを散らしてしまい、新入生じゃなければ春の終わりを感じている奴もいるかもしれない。どこかそわそわする春の空気が、また語りかけようと鼻をくすぶる。
「そんなこと言っててさ、彼氏とかいないの？」
倉敷さんの意地悪な笑みを真似て聞く。こんな感じかな？　口元だ、もっと端を吊り上げて、にやぁ。
「残念ながら、この十六年間そんな話しとは無縁に生きて来たよ」
「ふーん……」
なんだか、すました顔で普通に答えられて拍子抜けした。曖昧に流されるような、冗談ではぐらかされるようなことを予想していて肩すかし。美人なんだけどな、まぁ、雰囲気が独特だからなぁ。
「無縁っていうか、倉敷さんそういうの興味なさそうだしね」
心外だな、倉敷さんはそう呟いて鼻を鳴らした。
「私のレベルに見合った相手がいないだけさ」
「あー、そーですね」
それはほんと倉敷さんのペースに合わせられる奴なんてそうそういないと思うよ。何を考えているのかわからない、雲のような倉敷さんと意思疎通できる奴がいるなら会ってみたい。
「先輩の浮気者ー！」
校門前、梓が叫びながらリムジンから飛び出してきた。そんなに叫ぶな。注目されてるじゃないか。それに浮気とか、何度も言うけど恋人じゃねぇっつーの。
「やぁ神宮寺さん」
倉敷さんは俺に向けたような柔らかい笑みを梓に向けた。浮気者の片棒を担いだというのに動じないところが倉敷さんらしい。
「あっ、誰かと思えば倉敷先輩。こんにちは。あぁやだ、早とちりしちゃった。梓恥ずかしい」
両手で頬を押さえてくねくねと可愛さアピール。
「早とちりって、なんだい？」

わかってるんだろうけど、倉敷さんは首を捻って梓に聞く。その仕草が変に大人っぽく見えた。
「真先輩が女の人と歩いて来たんで、梓をほったらかして遊びに行くものだと思っちゃいました。えへっ」
自分の頭をこつんと小突く。こう、なんていうか、お前も自分に見合った仕草だな。
「ああ、そうなんだよ。遊びに行くんだ。なんだジョン、言ってなかったのかい？」
「はい？」
あはは、何を言ってるんでしょうねこの人は。そんなこと言ったら単純な梓は反応しちゃうじゃないですか。これくらいの嘘くらい見抜いてくれよな梓。
「じ、ジョン？　いつの間にあだ名で呼び合う仲になったのですか！？」
そこかよ。あだ名っていうか、思いっきりけなされてるようなもんだけどな。なんだか、この先ずっとジョンって呼ばれそうだ。
「ふふふ、大人の事情だよ」
倉敷さんはそう言って俺の腕を取り、腕組みを敢行してきた。しかも体を寄せるように。梓と違う女の人の匂いが鼻をくすぶる。俺は「は？　へ？」と唖然とするばかりで抵抗すら忘れてしまう。倉敷さんの表情はなぜか勝ち誇ったように目を細め、梓を見下ろしていた。
梓は一瞬何が起こったかわからないように目をぱちくりとさせて固まり、
「む、むがーーーー！　は、離れて、離れて下さい！　そこは梓の場所ですっ！」
と梓は無理矢理に倉敷さんを剥ぎ取りにかかる。倉敷さんは細い見た目通りに力が弱いのか、難なく梓に引き離された。倉敷さんは「いやんっ」となんだその猫なで声は。梓は鼻息荒くして、いわく自分のポジションをゲット。いやぁ、モテモテだね、俺。

「お前こそ離れなさい」
「むぅがーーーー！　なんですかっ！　そんなに倉敷先輩がいいんですか！」
おいおい叫ぶなよ、叩くなよ。注目されてるって。そこの羨ましそうに見てる男子、喜んで選手交代してやる。人生を賭けたゲームだけど。
「そういうことじゃなくてな、みんな見てるだろ？」
毎度毎度、俺は落ち着いた生活を送りたいんだ。注目されるなら、いい成績取ったとか、体育祭で一位になったとか、その程度でいい。すでに時遅しかもしれないけどさ。このままでは西校名物にでもされかねん。
そこでピピピ、と危険信号。梓は涙目で「うう～……」と俺を見上げていた。制服に型がついてしまうくらいに俺の腕をぎゅっと掴み、唇は逆への字できつく結ばれている。斎藤さん、窓を開けていかつい顔を覗かせないで。決して泣かせたりしませんから。
「か、帰るか。なっ」梓の頭を撫でつつ背中には冷や汗。できる限りの作り笑いで梓をなだめにかかる。
「うう～、倉敷先輩はいいんですか？」
帰ろうと言ってるんだからいいじゃないの。余計なことには気が利く奴だな。ボウリングでの一件を生かそうとでもしてるのか？友達を思いやるって、一応それを見せようとしてるみたいだな。
「さっきそこで会っただけだから。用事あるらしいし」
「私との用事をすっぽかすのかい？」
ああもうやめて。これ以上場をかき乱さないでくれ。
「先輩、やっぱり……」うるうる……。
「ち、違うぞ。倉敷さんが言ってるのは冗談なんだ。からかってるだけなんだよ」
今回ばかりは梓に味方する。俺と梓と倉敷さん、最悪な組み合わせになることが発覚した。トラブルメイカー倉敷さん、悪気ありありで大層タチが悪い。不思議な人なんかじゃなかった。要注意人物

だ。
「そうだ。神宮寺さんも一緒に来るかい？　ちょっと買い物に付き合ってもらおうと思ってたんだよ。暇そうな友達はジョンしかいなかったからね」
本格的にジョンという呼び名が定着しそうだ。そんなことはどうでもよくないけどいいとして、倉敷さんが梓を誘ってる？　最初は梓と一緒にいることはデメリットが大きいとか言ってたのに。俺の知らないところで事が進んでいるようだ。っていうか梓もって、俺が行く事前提じゃないか。
「えっ、梓も一緒にいいんですか？」
乗せられてるんじゃねぇよ。
「ジョンのお世話はご主人様に頼むことにするよ」
「そういうことならっ」
あんたたち、意思疎通できてるみたいだね。
「お願いだから、俺を人として扱って」

そういうことならっ。梓にも俺がペットとして認識されてしまって、二人して倉敷さんの買い物に付き合うことになった。
いい日和で散歩するにはちょうどいい気温、というのもあって、高級車は落ち着かないと言った倉敷さんを先頭にアーケードを目指して歩き始めた。梓は相変わらず俺の腕に絡みつき、牛歩カードの役割を果たしている。
どうしてこうなった。倉敷さんの用事が適当なものじゃないことはわかったが、どうして俺らが付き合わなければならんのだ。いや、俺が。行くなら二人で行ってくればいいものを。
今のところは一応友達の同級生が仲良く買い物に向かっているという朗らかな事情だけなんだが、この先ゆめゆめ油断できない。倉敷さんの悪戯心が働かないことを祈るだけだ。
梓がいろいろやんややんや俺に話しかけてきて、倉敷さんがその

会話にずいずい身を割り込ませることはないわけではなく、目的のアーケードに着いた。梓とぶらぶら（らぶらぶ）して、五人で遊んだアーケードだ。この時間は制服姿が目立ち賑わいを見せていた。

「倉敷さん、何買うの？」

素早く任務を遂行させて帰路に着きたい。緩衝材兼起爆剤の俺としては長居は無用だ。

「まぁ、せっかく来たんだから少し寄り道して行こうじゃないか。目的のものはすぐに買えるし」

いつも通りの柔らかい笑みを向けてくる。さっそくだ。俺の願いはいとも容易く打ち崩される。今日の予定が白紙なのは梓も知っているから、下手な言い訳を駆使して帰るわけにもいかない。梓は今のところご機嫌だからひとまず安心していいものの。

「神宮寺さんも、こういうのって、友達らしいとは思わないかい？」

倉敷さんはそう言って、雑貨屋の前できゃっきゃ騒いでいた女子高生を指差した。そして「楽しそうだよね」とにんまり梓に笑いかける。

梓は何やら俺の顔をじぃ～っと見つめ、名残惜しそうに腕を離れた。そしてちょこちょこと倉敷さんに歩み寄り、制服の裾をちょんと摘まんだ。保護者交代。倉敷さんは従順に自分のとこにきた梓の頭を撫でる。

「行こうか、あずあず」

「はいっ、みっちー先輩っ」

……なんだろう。何かわからないが何かが成立した気がする。うん、君たちはいい友達になれるんじゃないかな、多分。

二人はさっさと歩き出してしまって俺だけが取り残される形になり、このまま帰ろうかと思ったが、あとあと面倒なので渋々二人の背中を追いかけることにした。梓の背中を見て歩くというのもなかなか新鮮味があり、その横に友達がいるもんだからこれまた奇妙だ。

少しだけ、空いてしまった左手が荷物で埋まることを期待した。

まず二人が向かったのは近くの書店。とりあえず入ってみた感が

あるが、それでもファッション誌を並んで見る二人の姿には感慨深いものがある。こうして見れば、梓だってそこらの高校生と変わらない。

俺は欲しい本も特になく、ぶらぶらと店内を探索してみる。割とよく見る男性ファッション誌に目を通し、文庫本コーナーの新作を眺め、ゲームの攻略本で新発見をし、週刊誌を立ち読みしていた。

「ジョン」

すると横から倉敷さんがにゅっと顔を覗かせた。ジョンに反応してしまう自分が少し可哀想に思える。春日さんは一人で、いつもの笑顔を浮かべていた。なんとなく雰囲気でわかる。何かよからぬことを考えているに違いない笑顔だ。これで倉敷さん検定三級だな。

「ご主人様がお呼びだよ」

そんな俺の心配は思い過ごしであったらしく、梓に言われて俺を呼びに来たらしい。三級失格だな。何段階あるか知らないけど。

それよりも、

「倉敷さん、今日はどういうこと？」

「どういうこと、と言うと？」わざとらしく首を傾げる。

「学校であんなことしてからかったり、アーケードに連れてきたりしてさ」

「そんなの、おもしろそうだからに決まってるじゃないか」

「……そースか」

当然のように言われた。そうか、この人は何も考えてないんだな。

「ご主人様を待たせちゃいけないよ」

倉敷さんには珍しく、そわそわとした様子で促された。梓を一人にしては心配なので、とりあえず急ぎ梓の元に案内されることに。

その梓は十八禁コーナーで堂々とエロ本を立ち読みしていた。

一瞬躊躇する。十八禁コーナーなど、思春期真っ盛りの男子高校生としては行きたくても行けない秘密の花園で、そこにたどり着くまでにどれだけの勇気を要するものか。周りの目が気になって、羞恥心が形となって現れそうなほどに膨れ上がる。このまま梓に声を

かければ、エロガキバカップル共が、などとレジのおばちゃんのいらぬ誤解を生みかねない。だがしかし、女子高生があんなとこで「うひひひ」なんて笑いながらアレな本を立ち読みしているのは止めねばならぬと俺の常識心が投げかける。迷っている暇はない、一刻も早く連れて立ち去るのだ。

俺は早足で梓に近付き、無言で梓の首根っこを掴み「ひゃうっ！？」十八禁コーナーをあとにした。そのまま割と人の少ない文庫本コーナーへ引っ張って行く。

「お前はっ、何読んでんだ！」

自分でも顔が紅潮しているのがわかる。

「うへへ、先輩はどういうプレイが好きなんですか？」

梓はいやらしく笑い、俺の目の前でエロ本をぱらぱらとめくる。内容はやっぱり男と女のアレな部分がアレしてて、いろいろとアレな写真がスクープ写真のように散りばめられていた。

「何で持ってきてんだよ！」

思わず声を荒げてしまい、いそいそと立ち読みしていた他の客の注目を浴びる。エロ本を俺と梓の間に隠すように持ち、客の視線が手持ちの本に戻るのを待った。

その一部始終を遠目から眺めている倉敷さん。本当におもしろそうに笑っていた。そわそわしてたのはこういうことか。ここまで計算してここに入ったんなら大した人だよあんた。

俺だってこういう本は少ないが何冊か持っている。俺が家族と梓の目を盗んで買った宝物だ。そりゃ高校生にもなれば、一人であれやこれやうんぬん。そんなに想像力豊かではない俺にはこういう本は必要なものなのだ。でも女子高生と一緒にこの類の本を手にしているというのは俺的にノー！　それがいくら梓と言えど恥ずかしいのだ。

梓は手に持つエロ本の表紙を見て、「うーん」と首を傾げた。

「でも先輩の部屋には漫画モノが多いですよね」

ああっ！　もうやだっ！　何で知ってるの！？

「ちなみにあゆみちゃんと一緒に見ました」
ああ……さよなら俺。
「先輩、口から魂出てますよ？」
消えたいです……。
そんなことを思った俺も、部屋を勝手に探索された怒りで梓と妹にエロ本を見られた羞恥心も吹き飛び、梓の両頬を思いっきりつねりながら書店を出て行った。
しばらくは、他の本屋に足を伸ばそう。

「うう～……ほっぺが痛いですぅ……」
某ハンバーガーチェーン店で氷を頬張りながら呻く梓。
「ありゃお前が悪い。人のプライベートを勝手に見た罰だ」
「まぁまぁ。面白かったんだからいいじゃないか」
「随分と主観的な感想だネ」
書店での一件、あれでやけに喉が渇いてしまったので近くのファーストフード店でアイスコーヒーを飲んでいた。割と若者が集う二階席で、俺の隣に梓が座り、早々にアイスティーを飲み干して氷を頬張っている。倉敷さんは向かいに座って頬杖をついて、にこにこと満足気な笑みを浮かべていた。
「倉敷さん買い物は？　早く済ませて帰ろうよ」
「まぁまぁ、あずあずとこうやって過ごすことも滅多にないんだし、もう少し遊んで行こうじゃないか」
「そうですよ先輩。梓との時間は夜にでも」「とらねぇよ」
そんなに意気投合してるなら俺がいなくてもいいじゃないか。
「俺は帰るから、二人で遊べば？」
「男物を探しに来てるんだよ。ジョンのアドバイスが欲しいんだ。もう少し付き合っておくれよ」
困った顔でそう言われると、むげに断ることはできない。頼りにされて、答えられそうなら答えてやりたいとは思う。今回はまぁ、

男の意見が聞きたいようだし。それにしても男物か。色恋沙汰とは無縁に生きて来たと言ってたけど。
「気になってる人でも？」
「なんだい、気になるのかい？」
質問に質問で返された。そんなことを話すと、梓がジト目で俺を見て来る。心配すんなっていうのもおかしいけれど、決して倉敷さんのことが気になってるわけじゃない。どちらかと言えば、お前と同じような要注意人物なんだから。
「別に」
俺がそう言うと、倉敷さんは嘆息してつまらなそうに「家族のだよ」と言った。家族ってことはお父さんか兄弟へのプレゼントか何かだろう。
「俺、あんまりセンスに自信ないけどなぁ」
「女の私よりもマシだと思うよ」
そう言ってくれると助かる気もする。家族のへのプレゼントと聞いて一気にプレッシャーがかかったことは間違いない。こう、家族が喜んでる姿を見るっていいよな。去年あゆみにクマの抱き枕をプレゼントした時はすごく喜んでくれた。少しだけクマさんに嫉妬してしまったが、それでも満足だった。
「去年は何をあげたんですか？」
梓が興味津々に倉敷さんに聞く。一般家庭の事情が気になるのか倉敷さんだからかはわからない。
「前は服を買ったよ。すぐに汚して着られなくなってしまったけどね」
プレゼントを汚されてしまったっていうのに、倉敷さんは満足そうに笑っていた。汚して着られなくなったって、小学生くらいの弟かな。俺もそんな頃があったなぁ。千佳と裕也と一緒に遊んで泥まみれになって、母さんに怒られたりしたなぁ。そういえば、梓の小さい頃の話しは聞いた事がない。梓も外で遊んだりしていたのかな。ま、似合わないね。機会があれば聞いてみよう。

「服ですかぁ。真先輩、お誕生日には何をプレゼントして欲しいですか？」
お前が聞いてもあまり意味がない。一昨年はプラモデルが欲しいと言ったら自家用ジェットを製造段階からプレゼントされようとしたので全力で断った。去年はちょっと欲出してデジカメが欲しいと言ったら梓の写真集だった。中身を見もせずに机の隅で埃を被っている。つまり、物をねだってもそれを手にするということは叶わぬということだ。
「そうだな、丸一日一人の時間が欲しい」
「うぐっ、そ、それは難しいですね」
「一番簡単だ」
一人ぼっちの誕生日っていうのも寂しいけど。
そんな俺と梓のやり取りを見て倉敷さんがくすくすと笑う。
「君たちは見ていて飽きないよ」
「見せものじゃないんだけどね。観戦料でももらおうかな」
「いつも指定席でも用意してくれるなら喜んで払おうじゃないか」
「ははは、冗談っすよ」
常々この三人でいることを想像すればそれだけで気が滅入ってしまう。
そうだな、やっぱり千佳と裕也の三人で一緒にいるのが一番落ち着くんだろうな。今はそれと真逆。一言一句に気を遣わないとならないような気苦労。これでもね、苦労してるんすよ。
「私もジョンに何かプレゼントしてみようかな」
「いいよそんなの。気持ちだけありがとう」
「そうかい。リボンを首に巻いて私をどうぞっていうのやってみたかったんだけどね」
「ダメーーーーー！」
ああ、またか。
梓は顔の前に大きくバッテンを作り立ち上がって叫んだ。クロスチョップでもお見舞いする気か？

「いいじゃないか別に。君とジョンは恋人ってわけじゃないんだろう？」
「ダーメーです！　恋人とか言う以前に真先輩は梓の婚約者なんですから！　誘惑するような真似しないで下さい！」
「婚約者以前に恋人からだろう？　恋人じゃなかったら婚約者でもないんじゃないのかい？」
「え？　いや、婚約者だから恋人で、恋人じゃなくても婚約者で、えっ、でも婚約者だったら恋人だから……むがーーーー！　どっちでもダメなものはダメです！　真先輩には梓がいるんですから他を当たって下さい！」
「私は……ジョンがいいな」
「なっ！　ななっ！　真先輩！　真先輩も何か言って下さい！」
おっ、やっと俺の出番かー。そんな話しの前にあなたたちね、TPOをわきまえなさいって。同じ学校の奴もいるんだからさ、もうちょっとボリューム落として話そうよ。倉敷さんももうすっかり梓のお友達だよ。デメリットやらを味わって下さい。
「どうでもいいけど、早く外に出ようぜ」
「どうでもいいとはぬわんですくわぁーーーーーーーーー！！」
あはは、言葉のチョイス間違えた。
とりあえず迫り来る梓に目つぶし。びしっ。「はうっ！？」
「さ、倉敷さん、今のうちに」
「ジョンもいろいろ大変だね」
あんたのせいだよ今日は。

「はう～……目がぁ……ほっぺがぁ……」
アーケードのベンチで休憩中。梓は回復中。梓は膝を抱えてそこに顔を挟み込み、目を押さえて呻いていた。ちょうどCDショップの前で、ここもここで、俺が梓を泣かせたような目で通行人に見られてる。な、泣きたいのはこっちなんだからねっ！

「梓、キズものにされましたぁ。先輩、責任取って下さいね」
「ニヤケ面が見えてるぞ」
「梓の初めては先輩にって決めてましたから」
「戻って来ーい」
さすがはポジティブ梓ちゃん。もうすっかり元通りだ。やり過ぎかと心配していたけど。何気にクリーンヒットしたからなぁ、目つぶし。
倉敷さんは相も変わらず面白そうに梓のことを見ていた。ほんと、いいおもちゃを手に入れたみたいな顔で。梓もご苦労なこった。ん、これはもしやあれか。勢力の三角関係。梓は俺に強く倉敷さんに弱い。倉敷さんは梓に強く俺に……弱くないな。俺、最弱。多分俺と梓がセットでおもちゃ。楽しんでもらえて光栄だね。
梓に友達を作ろうとしたことが、とんでもない悪友を引き当てた。意味もなく倉敷さんを見ると「なんだい？」と首を傾げて聞いてくる。その仕草だけはピカイチ。
「千佳と仲良いのが信じられない」
「ああ、豆電球は優しいからね。こんな私でもうまくやれるのさ」
「豆電球？」
「ちかちかだから」
たしかに、豆電球と呼ばれて笑っていられるのなら優しいな。この前はちゃんとちーちゃんって呼んでたよな。でも、俺もジョンか。俺はペットだもんなぁ。梓に尻尾を振ったりしないけど。でも、豆電球よりはマシかも。
「ジョンも豆電球と仲良いじゃないか」
含み笑いで言ってくる。それ同時に呼ばれたら誰かわかんないよ。
「まぁ、付き合い長いから。仲が良いって言うか……うん、まぁそうなのかな」
正確に言えば、一番落ち着ける相手なんだよな。だから、仲が良いっていうのとは少し違う気がする。何も心配いらないっていうか、気を遣わないっていうか……ああもう、何なんだろうな。

「先輩は梓と一番仲が良いんですぅ」
ずいずい、と俺と倉敷さんの間に顔を割り込ませる梓。
梓は千佳と対照的な感じだな。退屈はしないけれど、落ち着いたためしがない。今も間に入り込んだ勢いで、俺のファーストキス（俺の中では）を奪いに唇を寄せてきた。デコピンで一蹴。
額を押さえる梓を横目に、俺は大きく溜息を吐いた。
まったく、普通からかけ離れてしまった俺の青春。今のところ、それを平均水準に戻す手立てを俺は掴めていない。
この金持ちお嬢様は一体いつまで俺に付き纏うのか。
人と違うことを良いことと捉えるか悪いことと捉えるか、それは人それぞれであって、俺に関して言えばあまり好ましいことではない。梓が突拍子もないっていうのもあるけど、もっと周りに足並み合わせた生活を送りたいんだ。
気がつけばいつも隣には梓がいて、それと共に失ったものがあって、それは普遍的な日常であり、友達との触れ合いだったり。でもその結果全てが悪いことなのかと言えばそうでもない。
梓といればそれなりに退屈はしないし、普通の人生じゃ経験できないこともいくつか経験できた。こんな高校生が人生などと口走るのは大層なことだが、それでも一般的に言って、目が覚めたら海の上やら空の彼方やらはまずありえないだろう。そのうち目が覚めたら宇宙ってこともあるんじゃないだろうな。
梓から俺への興味が退かない限りは、この先も梓は俺の隣に居続けるんだろうな。俺が望もうとも望まぬとも。
「ジョン。ジョン！」
ああ、意識がどっか行ってた。
「なに？」
「呼んでみただけ」
なんだよ。
「先輩！」
なんだ？

「呼んでみただけです」
対抗すんな。
「んで、これからどうするの？　どこにも行かないんだったら倉敷さんの買い物済ませよう」
「ジョンはそんなに早く帰りたいのかい？」
本音を言えばそうだけど、露骨に本音を出すわけにもいかない。
「そういうわけじゃないんだけど」ととりあえず答える。
「じゃあゆっくりいいじゃないか。人生楽あれば苦ありだよ」
「いや意味がわかんないから」
今が苦ってこと？　わかってるんなら解放して。
「人生梓あればラヴありですよ」「俺以外の誰かがな」「また先輩のツンが出た。デレはどこ？」「持ち合わせていない」「あ、そうか。二人きりにならないと」「好都合。縛り上げて拘束する」「やん、大胆。倉敷先輩の前ですよ？」ぴしっ。「やっ」デコピン。「……ハァハァ……さっそくですね……」「お前キモイよ」「言葉責め、梓はどんなプレイでもＯＫです」「一生放置プレイで」「ほ、奉仕プレイ？　せ、先輩が、梓に奉仕……げへへ」「よし、行こう倉敷さん」
「え？　見せてくれるのかい？　奉仕プレイ」
さ、帰るか。
「ちょい待ちジョン。ははは、冗談さ。あずあずはさておき私はいたってノーマルだからね」
疲れる、疲れるよ二人とも。
倉敷さんが梓の意識を取り戻し、不承不承、また二人のあとをついて行く。

アーケード内の店の看板が灯り出し、夕刻を告げる。だんだんと仕事を終えたスーツ姿が目立ち出し、一日の終わりを感じさせる。
あれからはなんとかっていう洒落たブランドショップに入り、梓

の着せ替えファッションショーに付き合わされた。女物のショップに入るだけでいたたまれない気持ちになるっていうのに、梓の奴、最初は試着室から下着で出て来やがった。「どうですかこれ？」なんて公衆の面前で俺に感想を求めないでくれ。こそこそ声と視線が痛い。倉敷さんは倉敷さんで「ひゅーひゅー」なんてどこのオヤジだ。梓が着替える度に何かしらの感想を求められ、俺が適当に「似合ってる」と言った服をお嬢様は全てご購入。ちなみに、倉敷さんは梓をうまいことおだてて服を買ってもらっていた。近くにある服の値段を見ると、必ずゼロが五個はついていたのを確認した。倉敷さん、あんたたくましいよ。

荷物持ちは俺。次はゲーセンに入りクレーンゲームに夢中になる、ムキになる二人。景品なんて欲しくはないだろうに、取れないことで躍起になっていた。ゲーム代は全て倉敷さん持ちだが、服の代金と比べれば安いものだろう。梓においては筐体を自宅に備え付けることを決定したようだ。次にここに来た時はプロキャッチャーになっていることだろう。

いや、梓が友達と楽しそうに遊んでいるのは実にいいことだ。微笑ましい姿だと思うよ。

でもね、俺、ほったらかしなんだ。

べ、別に寂しいわけじゃないんだからね！

二人専用のレースゲームとか、リズムゲームとか、ビデオゲームとか、俺は黙って見てるだけだったけど、いいことだ！　俺から梓が卒業するいいきっかけになるかもしれんのだ！

「先輩っ！」

「な、なんだ梓！」

「ジョンが尻尾を振ってる」

……いかんいかん。声をかけられて喜んでるみたいじゃないか。

「な、なんだ？」こほん。

「プリクラでも撮らないかい？」

梓の言葉を倉敷さんが引き継いだ。より一層の絆を深め合えたら

しい。
プリクラ……プリクラねぇ……。
梓とゲーセンに来たのは実はこれが初めてだったりする。前にも言ったが、俺が街中で梓をエスコートすることはほぼ皆無で、こんなところで梓が楽しむなんて思いもよらぬことだったわけだ。
なんたってお嬢様だからな。
……なんだ、これ？
お嬢様だからって、なんだそりゃ。
梓が大金持ちのお嬢様って、そんなことはわかりきってることだ。
だからって、決めつけていた。
ボウリングの時だって楽しそうだったじゃないか。
俺は梓に普通の友達を見つけようとして、俺自身が梓に対してお嬢様だからという先入観でずっと見ていた。
『梓ちゃんって、意外と普通なんだね』千佳の言葉が思い返される。
そうだ、その通りなんだよ。こんなところで楽しめるはずがないって誰が決めつけた。
それは俺だ。
今日だって、高い買い物してたとは言え、女子高生が普通にショッピングを楽しんでいるように、普通にファッション誌を眺めるように、普通にファーストフード店でお茶するように、普通にゲーセンで遊ぶように、普通なんだ。
「先輩？」
「プリクラ、初めてか？」
「はいっ！」
嬉しそうに笑う梓に少し罪悪感を覚えた。
悪かったなぁ、こんな楽しみ方なら、いくらでも教えてあげられたのに。
「じゃ、俺とお前の、初めてのプリクラでも撮るか」
これが、俺の初めてのエスコートになるな。
「私もいるんだけどね。二回目に混ぜてもらおうかな。ジョン、優

しくするんだよ？」
どういう意味だ。でもその申し出はありがたく受け取っておこう。
プリクラ機の中に入り、俺はおぼつかない手つきで機械を操作する。千佳なんかと撮ったときはあいつが全部やってたから、俺は覚えている限りで、背景とか、明るさとか、まぁ標準的なものを選んだ。一つはハートの背景なんだけど、これは梓のご希望で。
少し緊張して、一回目。背景は学校の教室。普通に横に並び、梓は満面の笑みで、俺は自分でもわかるくらいにぎこちない笑みで、撮り終えた。少し緊張がほぐれて二回目の撮影。この機種は三回撮りなので残りは二回。ここはカメラに寄って、腕を組み、梓が思いっきり顔を寄せて二回目の撮影終了。
最後の撮影。梓の選んだハートの背景で。
「先輩。チュープリ撮りましょっ！」
ちゅ、チュープリって、どこでそんな専門用語を。
普段なら全力で断る。引き剥がしにかかる。だけど、今回は……。
「ほ、ほっぺなら許す！」
梓は思ってもみない答えだったのか、きょとんとして、わなわな震えて拳を握り締めた。
「つ、ついにデレきたぁーーーーー！！」
盛大なガッツポーズと共に、俺の首に手を回し、ほっぺにぶちゅう。
「わっ！　お前っ！　撮影まだだっ！　ひいぃっ！　舐めるな！　や、優しくしてぇ！」
「うへへへっ」じゅるじゅるっ、ちゅぽんっ。
プリクラ恐怖症になるほどの、恥辱にまみれた、記念すべき梓との初めてのプリクラ撮影が終了した。
少しばかりの、俺の罪滅ぼしだった。
この次は三人での撮影。男一人、女二人なんだから俺が挟まれることになるのは自然っちゃ自然なんだが、二人で腕を組むのは止めて欲しい。俺を挟んで言い合いするのも、二人とも顔が近いから。

梓、唾飛ばすな。で、何言に倉敷さんの胸が……。いや、だからどうした。
「仲良くジョンを挟もうじゃないか」
「ダメですっ！　離れて下さいっ！」
「ははは、二人とも仲良くなー？」
「みっちー先輩の味方ですかっ！？」
「ジョンのしつけがなってきた」
「ははは。いいから、ほら、はい、チーズ」
出来上がったのは、言うまでもなく俺が二人の言い合いをなだめているプリクラで、これはこれで、この時のことを思い返せる代物になった。
備え付けのハサミでプリクラを分け、梓が強引に俺の携帯にチュープリとやらを貼りつけた。我ながらひどい顔だ。
倉敷さんは目を細め、微笑みながら三人のプリクラを眺めていた。
「三人で撮ったプリクラなんて、初めてだよ」
倉敷さんは少しだけ寂しそうにそう呟いた。
「初めてって、友達とはあんまりこういう遊びはしないの？」
「私はちーちゃんしか仲の良い友達はいなかったからね」
自嘲気味に笑いながら言う。ただ、友達がいなかったと、過去形で言ったことで、なんとなく救われたような気がした。あながち、梓を紹介したことが間違いではなかったんだと思ったから。
「そろそろ行かないと店が閉まってしまうから、ジョン、いいかな？」
「あ？　ああ、そのために今日はついて来たんだし」
ようやくお役目を果たせる時が来たようだ。
ああ、長かった！　やっとおうちに帰れるぜ！　まったくもってせいせいする！
……なんてことを今日ここに来る前の俺は思ったんだと思う。
でも今は少し違う。
梓を知って、倉敷さんを知って、自分を知った。

少なくとも、今の俺は来てよかったと思ってる。
楽しかったかと聞かれれば、そうじゃないかもしれないけれど、二人を見るとそう思えてしまうのだ。
そして、倉敷さんに案内されて連れて来られたのは、
「えっ、こ、ここ？」
「そうだよ。同じ男のジョンなら気持ちがわかるだろう？」
ペットショップだった。
「うちのジョンの首輪がぼろぼろでさぁ。君ならどんなのが欲しい？」
「ふっっっざけんなあぁぁぁっ！」

と、俺の罵声が狭い店内に木霊し、涙目で店を飛び出しリムジンの中、鼻息荒く興奮していた俺を梓がなだめていた。
「先輩、どーどーどー」
数時間掛かりで馬鹿にされた、とでも言えばいいのか。まったく、倉敷さんも悪戯心には恐れ入る。
嗅ぎ慣れたリムジンの匂いで落ち着きを取り戻し、梓に目をやると、にへへと笑ってシートに背中を預けた。そしてバッグからさっき撮ったプリクラを取り出して、またにへへと笑みを浮かべる。嬉しそうな梓を見て、悪い気がしないのは嘘じゃない。
「楽しかったか？」
「はいっ！」
「そっか。……悪かったな、今まで」
「え？　なんですか？」
「なんでも。今度は、そうだな、遊園地とか水族館とか行ってみるか？」
「先輩となら何でもいいですっ！」
そういう答えが、今までは少しだけ重荷となっていた。梓相手に、気にしないでもいいのにな。何やってんだか。

「じゃ、考えとくよ」
少しばかりの悔恨の中で、気持ちが軽くなった気がした。

図書館ではお静かに。舐めんなっ。

暦は五月の半ばに入り、教室内には五月病という精神病を患っているクラスメイトが大半だった。

「……うひひひっ……くふっ……うくくっ……」

まぁ、一人だけは元気なんだけどな。

授業中、鏡に映る梓は何かの雑誌を読みながら笑い声を上げていた。表紙は隠してるから、いかがわしい雑誌であることは間違いない。梓の隣の坂本さんも、授業をしている男性数学教師の佐々木先生も、俺にどうにかしろと目で訴えるのはやめてくれ。教師ならたまにはガツンと言ってやればいいんだ。特に今はテスト前なんだし、それくらい注意するのが妥当だろ。いつも全然授業を聞いてない梓はテスト大丈夫なんかね。教師陣だって、いくらなんでも採点まで誤魔化すなんてことはなかろう。

背中をとんとん叩かれて鏡を見ると、梓が雑誌の中身を鏡に向けていた。

「ぶふっ！？」

思わず噎せた。いかがわしいものと思っていたけど、梓の奴、授業中にエロ本なんて読んでやがった。開かれたページには裸の男女が濃厚なベーゼを交わしている写真がでかでかと載せられていた。坂本さんも目を丸くさせて顔を真っ赤に染め上げている。だとしても、そのエロ本をちらちら見るのは思春期だからだね。それに気付いた梓は、今度は坂本さんの方にエロ本を向けて笑いかける。「ひゃっ」と小さく声を上げて顔を伏せる坂本さん。何をやってんだ梓。

これにはさすがの佐々木先生も黙っていられなかったらしい。

「じっ、神宮寺さんっ」

佐々木先生は声を裏返しながら、必死な形相で梓の名を呼んだ。

「はい？」

梓はきょとんとした声を上げ、それに教室のみんなも後ろを振り

返る。一月もの間この教室で授業を受けてきて、梓が教師から名指しされるのは初めてのことだった。
佐々木先生は、梓が反応したことを確認して、すらすらと黒板に何かの数式を書き始めた。黙って見ていれば、教科書では次のページにあたる、次の授業で教えてもらう予定の公式を使う数式だった。
「こ、この問題を前に来て解きなさいっ」
しどろもどろになりながら、佐々木先生は言った。その勇気ある行動に敬意を表したい。偉大な力に立ち向かえる教師の鏡だろう。ただ、まだ教えていない内容で勝負するのは卑怯だと思うけど。スタンドミラーで梓の様子を見ると、明らかに不満そうな顔をしていた。
「梓がですかぁ？」
クラスメイトも興味津々で教師ＶＳ梓の戦いの成り行きを見守る。俺は明らかに去勢を張っている佐々木先生の味方をしたい。これで梓も授業を受ける必要性を感じてくれるといいんだけど。まぁ予習でもしてない限りは解けない問題だけどな。
俺は振り返り、ざまぁみろとにやけるのを押さえつつ、梓に目で『行けよ』と促した。
梓はぶすっとしながら「ぶぅ……」と呟き渋々前に歩き出す。みんなの前で恥をかいても、授業中遊んでいて佐々木先生の我慢の限界を超えさせたお前が悪い。
そして、俺は困り果てる梓を堪能しようと楽しみにして見ていれば、梓は何の躊躇いもなくチョークを取り、すらすらと問題を解いていった。どうして解けるんだ。いや、適当に書いてるだけか？俺は予習など試みたことはないので答えが正解かどうかはわからない。問題を解き終えた梓はチョークを置き、不満そうに佐々木先生を見る。
「あの、できましたけど？」
「あ、ああ。ありがとうございます。席に着いて下さい」
佐々木先生が敬語になった。どうやら正解だったらしい。クラス

メイトは唖然としながら悠々と席に戻る梓を目で追い、梓が席に着くとみんな前を向いた。
後ろの席からは、何事もなかったのように「うひひっ」と笑う声と、ページをめくる音が聞こえ始めた。
「さ、さぁっ。ここもテストに出るからな。みんな神宮寺さんを見習って予習しておくように！」
佐々木先生の完敗だった。
授業が終わると、佐々木先生は肩を落とし、溜息を吐きながら教室を出て行った。みんな可哀想な目で見るのはやめてやれよ。俺は佐々木先生は頑張ったと思うよ、うん。それにしても、梓の奴……。
「お前、どうしてあの問題解けたんだ？　まさか授業中遊ぶために予習してるとか言わないよな？　つーかそんなもんここで見るな」
いまだエロ本を眺めながら「うひひひ」と笑っていた梓からエロ本を没収して聞く。
「あっ、あっ」とおもちゃを取られた子供のようにエロ本に手を伸ばす梓。「もう、見たいならいつものように梓の裸見ればいいじゃないですか」
「見てねぇよ！」いや、坂本さん、そんな軽蔑の眼差しで僕を見ないで。下着までしか見てないから。って言うか見せられてる方だから。
「梓は一般の高校で履修する内容くらいもう頭に入ってますからね。昇級してきたのだって、ちゃんと試験を受けたんですよ？」
冗談じゃないらしい。こいつ、俺とのこと以外は興味がないのか、それがどうしたみたいな顔で首を傾げている。頭が良いとは聞いていたけれど、格が違う。年下にこんなこと思うのはいささか悔しいが、こんなのも含めて普通じゃないなお前。
「なら、今度の中間テストも余裕ってわけか」
「ついに先輩と梓の愛情テストが決行されるわけですね。中間ということは、び、びーまで……そ、それでも梓は満足です！」
「お前はエロ本じゃなくて教科書を読め。つーか、もうすぐテスト

なんだから、今までみたいに遊んだりしないからな。お前のせいでろくに勉強できないんだから、こんな時くらいそっとしておいてくれ」
予想通りと言うか、やっぱり梓は口を尖らせる。
「えーっ。テストなんてどうでもいいじゃないですか。どうせ梓の家に婿入りするんですから」
「ちっともよくない。何もかもよくない。お前がどう邪魔しようと俺はテスト勉強する。決めた。今日の放課後からテストが終わるまでお前とは遊ばない。一緒にも帰らない」
梓はほんとに鳩が豆鉄砲喰らったような、ぽっ、と目と口を開けて唖然とした。
「そっ、そそそんな殺生な。けけ決して勉強の邪魔などいたしませんとも。ですからどうか、この通り、先輩のお傍にいさせて下さい」
拝むように懇願された。そんなにお願いされても、お前がいたら絶対勉強にならないことはわかりきってるんだから、ここはやっぱりしばらくおとなしくしてもらう他にない。
「ダメだ。お前は絶対に邪魔をする」
「こっ、こんなにお願いしてもダメですか！？」
今度は頭を机に擦りつけ始めた。なんか、俺すげー。教師だって頭も上がらない梓が俺に頭下げてるんだぜ。優越感を感じるね。
でもそんな俺には、やっぱり天罰が下るのだ。
「ねぇ見て。可哀想だね、神宮寺さん」「うん。あんなにまでして」「来栖くんってひどい人だったんだ」「調子に乗んなよ」「勉強くらい一緒にすればいいのに」「あーいうプレイなんだよ」
クラスメイトの囁き声が聞こえる。冷や汗が、どこからともなく流れ出してきた。いつの間にか、俺が悪者になっていた。最後のは意味がわからんけど。とにかく、このままではまずい。このままじゃ例え梓が俺から離れたとしても何て噂されるかわかったもんじゃない。クラスの中で孤立するハメになる。
「あ、梓？　わかったから頭を上げてくれな。そうだな、い、一緒

に勉強するか？」
「はっ、はいっ！」
「な、泣くなよ」
まさに感無量といった様子だった。嬉し泣きするほど俺と一緒にいたかったのかよ。……ほんと、しょーがねー奴っはぁっ！？
不意に悪寒が走った。きょろきょろと周りを見渡し、殺気を感じて俺の目は外に向いた。
あの、物陰に隠れてこっちを見ているのは、梓の警護人の斎藤さんだ。
い、いやだなぁ、梓のこれは嬉し泣き、嬉し泣きですから。悲しませたりはぎりぎりしてませんから。ははははっ。
……はぁ。

そういうわけで、今日の放課後から勉強すると言った手前、勉強しないわけにはいかず、俺と梓は市立図書館に来ていた。家の中や学校だと何かしらちょっかい出してきそうだからな、『館内では静粛に』と釘が打ってある図書館がベストプレイスと判断したのだ。不特定多数の人がいるここなら梓だって騒いだりすることはなかろう。
「どうして図書館なんですかぁ。勉強なら先輩の家ですればいいのに」
こいつ、やっぱり勉強する気なんてなかったな。俺だって策を何にも考えてないわけじゃないんだぜ。
「でも、図書館っていう静かで周りの目がある中でバレないようにこっそりするのも背徳感があっていいかもしれませんね」
お前は何をするつもりだ。
「こう、机の下に潜り込んで、周りにバレないように先輩のを……うひひ……」
「ほんとに潜り込んで来たらケリ飛ばすからな」

教室で少しでも可哀想かなって思った俺が馬鹿だった。こいつは裕也以上の真正の変態だ。
落ち着きのない梓の口を手で塞いで、その手を舐められながら館内に入り、変態のことを考えていたらほんとに変態がいた。あいつが一人で勉強なんて、珍しい。
館内に並べられた机には俺らと同じようにテスト勉強に励んでいる奴らや、純粋に読書を楽しんでいる一般の人たちが大勢いた。その中で、変態こと高橋裕也が難しそうな顔をして学校の教科書と向き合っていた。六人掛けの机の端っこに腰掛け、その対角線上には一人の女生徒がいる。うちの高校の制服じゃない。あれは近くの私立女子高の制服だ。端正な顔立ちで、ちょうど同じテスト期間なのか、その女生徒も黙々と勉強しているようだった。
知り合いを見つけて、俺の足は自然とそちらへ向く。
「よっ、裕也。お前がこんなとこで勉強なんて天変地異の前触れか？」
もちろん小声で話しかける。梓はぺこりとお辞儀をして挨拶と成した。
「やぁ。来栖くんじゃないか。君たちも勉強かい？　お互い、テストには苦労しているからな」
紳士的な変態がそこにいた。
「ど、どうしちまったんだ裕也。お前らしくもない。ついには教科書に載っている文章にも性的興奮を覚えたか？」
「ははは、やめてくれよ来栖くん。ほら、あちらの方も迷惑そうだから。ここは静かに勉強するところだよ」
その女生徒は鬱陶しそうにこちらを見ていた。ヒンシュクをかったようで自粛する。裕也が爽やかな知的笑顔を女生徒に向けぺこりと謝り、俺と梓はいそいそと裕也の向かいに座った。すると今度は裕也が迷惑そうな眼差しを向けてきた。館内の蛍光灯が裕也のメガネに反射する。ぎらりと睨まれているように思えた。
不気味な裕也が気になるところではあるが、目的はテスト勉強だ。

裕也も、梓も木だ。動かない、喋らない、ただ光合成を繰り返す木だ。さー、気合いを入れて勉強しよう。時間は約二時間。みっちりやってやる。

日本史の教科書を取り出し、年号暗記を試みる。簡単な記憶作業から、徐々に頭を使う勉強に切り替えていこう。と、教科書を開いたところで、俺に向けてノートが差し出された。訝しげに思い、差し出された方を見ると、裕也が真剣な表情で何かを訴えていた。

そのノートの片隅には『僕はあの子を狙ってるから、どこか行ってくれないか？』と書かれてあった。紳士的変態には恐れ入る。やはりこいつは俺が知っている裕也だったのだ。必死な形相からは真剣さが伝わる。

勉強もしないといけないし、俺には親友に対する嫌がらせをする理由なんて全くなく、本当に迷惑そうだったのでその場を離れようとした。したんだけど、梓の奴がそうはさせなかった。

梓は座っていた俺の膝を押さえ、裕也が見せて来たノートを奪い取った。裕也も、まさか梓がそんな行動を取ると思っていなかったのか、呆気に取られた顔を見せた。

「面白そうですね」

梓は小さく呟いた。倉敷さんの笑顔に近いものを今の梓からは感じる。

「梓に任せて下さい」

「ちょちょ、お前、何するつもりだ」

「じ、神宮寺さん。あ、あの、僕のことはいいから、君らは君らの愛の営みを」

「要は、あの人と仲良くなりたいんですよね。変態さんは」

「え？　そ、そうだけど……」

「大船に乗ったつもりでいて下さい」

素敵な笑顔だった。

裕也の「いや、あの」と困惑してしているのなんてお構いなしに、梓は立ち上がりその女生徒のそばに寄って行った。

「すみません、その制服、純心校のですよね？　梓あなたの通ってる女子高に憧れてたんですよぉ。今どんな勉強してるんですか？」
梓は女生徒の隣に座り、友好スマイルを持って接近を試みる。上流階級の社交的な場に行く事も少なくはない梓は、お近づきになることには手慣れている様子だ。
「え？　あ、ここ……」
律儀にもその女生徒は参考書か教科書を梓に見せる。戸惑っている様子だが、自分の高校が憧れの対象と聞いて悪い気はしなかったのか、嬉しそうに自分の制服を見回していた。
「あ、フランス語ですね？　懐かしいなぁ」
「懐かしい？」
「以前、父の仕事の関係でパリに住んでいたんです。とても綺麗な街でした」
「そうなの。あ、じゃあ、この問題わかる？」
「どれですか？　ああ、この問題はですね……」
「――あ、そうなるんだ。えっと、ここも、聞いていいかな？」
「ええどうぞ。うふふ……」
見事なお手並みだった。ちなみに梓がパリに住んでいたというのは嘘っぱちだ。ただ、フランス語のことはわかるらしい。なんか、十ヶ国以上の言葉は話せますとか言いそうだな。お嬢様スキルだ。
ま、これはいい。梓がいろいろやっているうちは俺も勉強できそうだ。
そう思っていれば、裕也が俺の教科書をトントン叩いた。勉強したいんだけど、梓を連れて来たのは俺なわけだから、裕也を無視するわけにもいかないだろう。
「す、すごいじゃないか。神宮寺さん」
感嘆の声を上げ、羨望の眼差しを梓に向ける変態。
「まぁ、頭は良いみたいだぞ。このあとどうするつもりかは知らないけど、梓に頼ってみるのも面白いんじゃないか？」
「そ、そうだな。あとで何か要求されたりしないだろうか。体とか」

「……あ゛？」
「じょ、冗談だよ来栖くん」
別に梓がお前とどうなろうといいけどさ。ったく、何いらついてんだか。まぁ変態同士お似合いかもな。いやいや落ち着け俺、深呼吸。すぅー……はぁー……。よし、始めよう。
「先輩っ」
あー、今度は何だ？
「梓、読みたい本があるんですよ。先輩一緒に探してください」
と無理矢理俺の腕を掴み、立たせようとする。
「受付の人に聞けばいいだろ」
梓はウインクしながら「いいからいいからぁ」と俺を立ち上がらせた。なるほど、裕也とその人を二人っきりにしようってことか。ってかお前が仲良くなっただけで裕也とは何も進展してないじゃないか。
「優子さん、そこの知的な好青年は梓よりもフランス語ぺらぺらですから。あとはお任せします」
女生徒の名前は優子というらしいっていうか、
「お前、それ結構な無茶振り――」
「しーっ。行きましょっ」
連行された。残された裕也は先程とはうって変わって泣きそうな顔でこちらを見ていた。無念だな。やっぱり梓に関わるとロクなことにならん。
特に目的もなく、本が綺麗に陳列された本棚をぐるぐる回る。荷物は残してきたまんまだし、わかってたことだがこいつが一緒だと勉強にならねえ。二年になって初めてのテストでお粗末な結果になりたくないのに。
「やっぱ、勉強の邪魔したな」
ジト目を梓に向けて、俺は言う。
「優子さんと仲良くなった変態さんとダブルデートっていうのもいいかと思います。そして二人がいちゃいちゃしているのを見て先輩

も梓に……くふふっ」
「聞け。そしてお前は少しは本音を隠すってのを覚えろよ」
「梓はいつも直球ストレートですっ」
ストライクゾーンには入らないけどな。
「どうすんだよ。教科書置いたまんまだし。何か戻りづらいし」
「資料ならここにいくらでもあるじゃないですか」
「資料はあってもテスト範囲わかんないからどれを見ていいかわかんねぇよ。全部教科書とノートに範囲書いてるんだから」
「むぅ～、それは困りましたね」
誰のせいだ誰の。
ＲＰＧなんかでは、どうしようもなく困ったときにお助けキャラが現れたりする。だけど現実ではそんなことは起こらない。とも限らないのだ。
「こんなところで逢引かい？　若い子たちは場所も選ばないから困ったものだね」
聞いたことのある声だった。二年になって知り合った友達で、おそらくは梓と一番気が合う女友達。現れたのはお助けキャラではなく長黒い髪を持つ悪魔だった。
「や、やぁ倉敷さん」
「みっちー先輩だ」
倉敷さんは何故か「ふふん」と自慢げに鼻を鳴らした。俺は自然と身構えてしまう。ペットショップの一件以来、苦手意識がついたのかもしれない。
「この前はジョンのおかげでいい首輪が買えたよ。深い青色で悲しみと悔しさに満ちた色の首輪」
「それ全然嬉しくないんですけど」
けらけらと、倉敷さんは声量を抑えて笑う。
「倉敷さん部活なんじゃないの？　またサボり？」
「サボりとは心外だな。この前は一刻も争う事態だったんだよ。野良犬と間違われて保健所行きは困るだろう？　それに、今日からテ

スト前で部活は原則禁止なのさ。ちーちゃんに勉強教えてもらってるんだ」
　ちーちゃんって、千佳もいるのか。これは好都合かもしれないな。違うクラスの同級生が二人もいるんだから教科書だって大体揃ってるだろう。
「倉敷さんのクラスって今日日本史の授業あった？」
「うちはなかったけど、ちーちゃんのクラスは小テストがあったみたいだよ。一問間違えたって悔しがってたから」
「千佳どこ？　教科書見せてもらいたいんだけど」
「ん、入口側の列の一番奥にいるよ。私と二人だけだったから、今は一人で勉強してる。必要ならちーちゃんと二人だけの甘い時間を提供してあげるよ」
　誰がそんなことを望んだか。
「だ、ダメ……っ！」
　図書館の中で叫びそうになった梓の口を手で塞いだ。さすがにここではまずいだろお前。それとべろべろ舐めんな。
「くっくく。相変わらずだねあずあず。ジョンだってわざわざ教科書借りなくても、今日あった授業の勉強すればいいじゃないか」
「いやそれが……」
　俺は先程の裕也の件についてかいつまんで説明した。
「ははっ、みんなお変わりなく健やかに過ごしているようじゃないか」
「まぁそだね」
　倉敷さんはふむ、と顎に手を添えて考える人を演じる。
「どれ、私も少しちょっかい、もとい手助けでもして来ようかな」
「えっ、みっちー先輩が行くんですか？　じゃあ梓も」
「そうだね。勉強はちーちゃんとジョンの二人でさせてあげよう」
　倉敷さんが意地悪そうにそう言うと、梓は「うっ……」とジト目で俺を見てくる。俺はしっしっ、と手で追い払うように「行って来いよ」と厄介者払いを試みる。

「ま、まぁ、図書館の中でいろいろしようなんて梓くらいしか考えませんよね」
自分が特殊なことを自覚してるならやめろ。
それから梓は何度か俺を振り返りながら倉敷さんについて行った。俺はそれを笑顔で見送り、千佳がいるであろう一番奥の机を目指す。千佳は可愛いけれど、俺の中では最も普通に分類される友達なので、一般人に紛れて勉強する千佳を見つけるのに少し時間がかかった。そのまま無言で千佳の向かい側に座る。だけどこちらをちらりと見ることもせずに勉強し続ける千佳。集中してるんだな。でもさすがに座っているだけで本を開くこともしない俺を訝しく思ったのか、少しだけ顔を上げ、俺と目が合った。
「ん？　あ、あれ？　真？」
「よう。随分熱心なんだな」
「あ、うん。最初のテストだし」
千佳はそう言いながら、辺りをきょろきょろと見回す。
「倉敷さんなら梓と一緒に裕也のとこ。裕也の奴、こんなとこでもナンパしようとしてるみたいでさ、二人とも面白がって茶化しに行ったよ」
「あ、やっぱり梓ちゃんもいるんだ」
「まあな。テスト前だからついて来るなって言ったんだけど、さすがに泣きつかれちゃな」
「ふーん……。そっ」
千佳はそれだけで、また手元に目を戻した。何かそっけない。勉強の邪魔したからだろうか。
「じゃ、邪魔したか？」
「別に」
下を向いたまま答えられた。やっぱ機嫌悪そうだな。教科書貸してくれってだけでも言いにくい。今日はこのまま帰ることになっちまうのかなぁ。そんなことを思っていれば、千佳が書き取りをしていた手を止め、俺を睨んだ。やっぱり目の前にいられるとウザいの

か。
「真は勉強しなくていいの？　いっっつも梓ちゃんといちゃいちゃいちゃいちゃいちゃしてて、追試受けることになっても知らないから」
「い、いちゃいちゃはしてねえって。俺だって勉強しに来たんだぞ？　でもいろいろあって教科書とか鞄ごと裕也のとこでさ。それで千佳に教科書見せてもらおうって思ったんだ」
「……それならそうと早く言ってよ。教科は？」
何か言える雰囲気じゃなかったんですって。
「に、日本史。年号覚えから始めようかなって」
「んー、それはオススメじゃないよ。記憶問題は時間が空いたら忘れちゃうかもしれないから。最初は数学の計算式とか、わかりにくいのをひたすら解いて頭に覚え込ませた方がいいよ」
もっともらしい。それが千佳のやり方なんだな。
「でも数学ねぇ。苦手なんだよな……」
そんな逃げ腰の俺に、千佳は「うーん」と唸る。
「じゃあ……お、教えてあげよっか？　テスト範囲は、大体理解してるから……」
「ああそりゃ助かるけど、千佳の邪魔しちゃ悪いだろ」
「いいよ。今日は一応区切りのいいとこまでしちゃったし」
千佳がそう言うなら、お世話になるか。年号なんて覚えるだけだしな。
「それなら、千佳先生にお世話になろうかね」
「うんっ。じゃ、じゃあ隣に来て。そこじゃ教えにくいから」
言われるままに、俺は千佳の横に移動する。懐かしいな。中学の時はこうやって勉強を見てもらったりしてた。そういえばここの席、千佳の指定席だったか。
そして、まずは復習からという千佳の言葉通りにテスト範囲をおさらいしていた。非常にわかり易く、できれば数学の授業も千佳にお願いしたいくらいだ。でも、最初は要領良く教えてくれていた千佳の様子が俺が質問を重ねる毎にだんだんとおかしくなっていった。

「ここはこの式を当てはめるんだよな？」
「……」
「千佳。……おい、千佳聞いてんのか？」
「へ？　あ、ああ、うんそう」
　時間が経つにつれ、考え事でもしてるのか、こうやって聞いても答えてくれないことが多くなっていた。
「さっきからどうしたんだよ。ぼーっとして。やっぱり邪魔なら――」
「ち、違うの。だ、大丈夫だから」
　やっぱりおかしい。ぼーっとしてるかと思えば、こちらから話しかけると、慌てたように忙しなく自分の髪をとく。問題を解いている時なんかはじーっと見られているような感覚もあった。
　俺が訝しく千佳を見ていると、千佳は少し照れくさそうに小さく「えへへ」と笑って頬を掻きながら、
「なんか……やっぱりいいなぁって……」
「ん、何が？」
「ううん、何でもないの。ごめんね。っていうか、これくらい授業聞いてたら誰でもわかるよ？」
「そ、そう言うなって」
　こっちは授業中だって梓の相手で忙しいんだ。
「ふふ……続きしよっか」
「させませんっ」
　ずいずいっと、俺と千佳の間に怪面ツインテール参上。空気椅子まで使って、無理矢理に体をねじり込む。それに合わせるように、倉敷さんがにやにやしながら向かい側に座り、「うーん」と俺と千佳を見る。
「いやー、すっごくいい雰囲気だったんだけどねー。あずあずが我慢できずに飛び出しちゃって。お姉さんとしては、幼馴染同士がいちゃつく姿をもう少し目に焼き付けたかったんだけどねー」
「い、いちゃつくなんて……っていうかずっと見てたの！？」

「ちーちゃんが熱っぽい瞳で幼馴染の横顔を愛しむように見ていた時から」
「ちっ、ちが……っ！」
千佳は顔を真っ赤に染めて立ち上がり、ガタンッと椅子の立てた音が館内に響き渡った。「あっ……」注目を浴びて、耳まで赤くしながら目を伏せて静かに座る。それから俺に頭を向けて頬を机につけ、「う～～～～……」と唸る。
「ははは っ。可愛い幼馴染じゃないか。真くん」
倉敷さんがそう言うと、千佳が頬を擦りつけたまま抗議するように「違うもん～」体をくねらせる。
俺は嘆息しながら頭をかく。千佳はいつもいつもこんなふうにからかわれてるんだろうなぁ。
「梓の目の前で浮気とは、とんだ不埒物です」
猫が威嚇するように歯を見せ、梓が言う。
「勉強教えてもらってただけだって」
「勉強なら梓が教えてあげます。千佳先輩より上手に教えてあげます」
梓が鼻を鳴らしながら言うと、むくり、千佳がゆっくりと身を起こした。
「梓ちゃん、一年生の授業飛ばしてきた梓ちゃんには無理だよ」
あはははは ー、冷たい微笑を浮かべて千佳が言う。
「梓の方が千佳先輩より勉強できますもん」
しれっとして梓が反論する。自信満々だなー。千佳だってずっと学年上位なんだけど。ボウリングの時といい、どうして梓は千佳に対抗意識燃やすかな。
「ふーん、じゃあテストで勝負する？」
「いいですよ？　ボウリングの時とは違って梓の得意分野ですからね。万が一にも負けはありません」
「私が勝ったら今度から真にはずっと私が勉強教えるから」
「ええいいですとも。梓が勝ったら真先輩と保健体育の実技指導を

します。主に性教育の」
ちょっちょっちょ、待て待てーい！
「おいおいおいおい、お前ら勝手に決めんな。俺の意思はどうなる。千佳のはともかく梓のはダメだ」
「真は黙っててて」「先輩は黙っててください」いいのかよ千佳それで！　絶対の自信があんのか？
千佳はともかく梓にまで冷たい視線を向けられるとは。
「おおーっ。これが修羅場っやつだね。くわばらくわばら」
あんたも千佳をからかって梓を焚きつけたようなもんだろうが。
「それで、勝敗はテストの総合結果で決めるのかい？」
倉敷さんはすでにジャッジ気取りだ。いいよね、外から楽しむだけの人は。二人の勝負にどうして俺が巻き込まれなきゃならんのだ。しかも今回は下手すると梓が勝ってしまうようなこともあり得る。高校で勉強する内容が頭に全部詰め込まれてる梓と千佳じゃ、大学生と高校生の対決みたいなもんだ。範囲は限定されているとは言え、千佳が不利に思えてならない。
「梓は何でもいいです。千佳先輩の得意科目だけで勝負してもいいですよ？」
ほんとに相当な自信だ。ものすごく不安だ。
「それじゃあお言葉に甘えちゃうけど、本当にいいの？」
千佳も得意げにほくそ笑む。俺が一生入れない勝負だな。梓は「オフコース」と英語を持ち出した。それくらいなら俺でもわかるぞ。馬鹿にしているようだがそれだけで自慢げなお前の方がアホに見える。
「じゃあ、私は英語の真が取った点数で。梓ちゃんは真のどの教科にする？」
「……はい？」「あ？」「……なるほど」
梓、俺が疑問符を浮かべ、倉敷さんだけ納得していた。俺の取った点数って、えっと、何の勝負だったっけ？
「つまり、私と梓ちゃんがそれぞれ選んだ教科の勉強を真に教えて、

その教科でテストの点が上だった方が勝ち。何でもいいって言ったからね」
「千佳先輩が英語を教えて、梓が他の教科を教えるってことですか？」
「そう。ただし、教える場所はここで。毎日お互いに一時間ずつ。それでどう？」
「場所と時間はいいですけど、千佳先輩が英語を選んだってことは、真先輩は英語が得意ってことなんじゃないですか？」
「そうかもね。でも、それは教え方次第じゃないかなぁ？」
千佳の奴、変に悪知恵が働くな。俺は確かに英語の点は割と良かった方だ。だけどどれも平均的で、そう大差があるわけじゃない。それも千佳は知ってるから、特別に有利っていうわけでもない。おそらく、俺の成績で勝負するのには他の狙いがある。千佳の思い通りなら、八割方千佳が勝つ勝負だ。
「確かにそうですね。でも、一応聞かせてもらいます。真先輩、英語の他にいけそうな教科はありますか？　後から選ぶんですからこれくらい構わないですよね？」
「いいよ。どれを選んでもそう大差ないけどね」
やっぱり、どの教科にするかは大した意味はない。
「俺は英語だって微妙だ。他にあえて言うなら社会系かな」
「じゃあ、日本史にします。真っ先に勉強しようとしてましたし」
日本史ね。覚えるばかりの教科でどう教えてくれるのかな梓先生は。
「じゃ、決まりだね。勝負はフェアに。家で教えたりしたらダメだよ？」
満面の笑みの千佳だった。勝負はフェアに、ね。よく言うよ。
「もちろんです」
「ふふふ、ちーちゃんも悪よのう」
「違うよみちる。これはね、戦略って言うの」
おおお、なんだか梓が可哀想にも思えてきた。その梓は二人の会

話に訝しげな表情を浮かべる。
「真先輩、どういうことですか？」
俺に聞くのかよ。俺も勝負に巻き込まれるのはゴメンだし、千佳の戦略っていうのを教えてやろうか。
「お前、この勝負負けるぞ」
「先輩が弱気になったらダメですよぉ。任せて下さい。梓はとっても教えるの上手いですから」
胸を張る。そういう問題じゃないんだけどなぁ。倉敷さんなんか今にも噴き出しそうなくらい笑いを堪えてるし。
「はぁ……。お前なぁ、お前が勝ったら保健体育の実技が待ってるっつーのに、俺が日本史で英語より良い点取ると思うのか？」
「え？　……あっ！　ず、ずるいですっ！　よく考えたら全然公平な勝負じゃないじゃないですか！」
「お前、静かにしろっ」
立ち上がって猛抗議した梓を椅子に座らせる。俺が一つずって、俺と千佳で梓を挟んだ。
「あっははは。やっぱり面白いなあずあずは。今頃気がついたのかい？」
「むぅ～……。巧妙な罠です。こんな結果が見えている勝負はダメです」
「えーっ。もしかしたら真が梓ちゃんとの保健体育を心待ちにしてるかもしれないよ？」
「そうだねぇ。日本史頑張ればあずあずからのご褒美があるんだから」
千佳も倉敷さんも、勝負なんてどうだっていいって感じだな。千佳も一緒になって梓をからかっているみたいだ。
「そんなこと、あるわけないじゃないですか」
言い切った。言い切りおったわこいつ。じゃあ最初っから気付けよ。
俺が嘆息すると、千佳は本当に面白そうに笑った。倉敷さんも、

やれやれといった様子で微笑みを浮かべている。何か通じるものがあったらしい。
「案外、似たところにいるのかなぁ」
小さく、千佳が呟いた。
「一番の悪者はジョンってことだね」
何だ、何故俺がいきなり悪者扱いされるんだ。
「ふふっ。梓ちゃん、勝負はどうする？　真にはフェアにやってもらおうかなって思うけど」
「「え？」」
俺と梓は同時に目を丸くした。フェアって、俺が梓を勝たせるようなことするわけないじゃないか。
「フェアに、ねっ」
千佳がウインクで合図を飛ばす。ボウリングの時にもあった、何か考えがあってのこと。アイコンタクトで通じるなら言葉なんて必要ないんだぞ？　まぁ、言わんとしていることはわかる。公平に、一緒にってことだよな。それはなかなか難しい。二人には本気で教えてもらわないと。
「やるか？　梓。満点が取れるくらいは教えてもらいたいけどな」
「そっ、それってこくは……っ！」
告白じゃねぇよ。叫ぼうとするな。塞いだ手を舐めるな。三回目。
「ぜ、ぜぜぜひやりましょう。覚悟は、いいいいいですね？」
「ああ。フェアにやるよ」
梓は言葉にならないガッツポーズを何度も繰り返した。
結局、二人に教えてもらうのは明日からになった。中間テストまでは約十日。少なくとも二教科は平均以上が取れそうだ。
で、だ。今まで忘れてたんだけど。
「倉敷さん、裕也は？」
「ああ、何かいい感じに話してたのが面白くなくてね。彼女を泥棒猫呼ばわりしたら怒って帰っちゃってさ。変態ならそれを追っかけて行ったよ」

「……ひでぇ」

十日間、図書館に通いつつ二人にはみっちり教えてもらった。その間もあの二人にいろいろあったけど、それはまた話す機会があれば。

千佳の教え方もわかり易かったけど、梓もさすがで、覚えるだけにしろ歴史の背景からきっちり理解させてくれるので、自然と覚えられた気がする。

テストの出来はと言うと、梓も頑張ってくれてたけどやっぱり英語の方が良かった。

それで、だ。

「えっ。二つとも同じ点数だったんですか？」

「ああ。ほら、見るか？」

テストが返却され、梓に英語と日本史の結果を見せる。全く同じ点数だ。八十六点。過去最高の点数だったりする。他の教科は逆に僅かながら平均以下。

「むぅ。なら千佳先輩との勝敗は……」

「チャラだろ。同じなんだから」

「あーん……先輩との保健体育がぁ……」

がっかりする梓の頭を撫でて、外の雲を見上げる。

実は、英語の方は満点を取れていた。わざと回答を間違えて同じ点数になるよう調整した。俺なりにフェアな勝負結果にしたつもりなんだ。引き分けの取り決めはしてなかったしな。

だけど、今回の結果は運の要素が強かった。たまたま日本史のテストが自信のある英語より先にあったからうまく調整できたものの、逆だったらどうだったかわからない。日本史は、確実にわかる回答以外は書かなかったから。逆だったらどうなっていたか、考えたらお先真っ暗だな。下手すると人生を掛けた勝負だったかもしれん。

「ま、また次のテストの時はよろしく頼むな、梓先生？」

「はいっ。ところで、やっぱり先輩は女教師と言えばワイシャツにメガネですか？」
「着なくていいからな」

押し掛け女房と消えた記憶

「ふあ～あ……。あ～～～～～～……よく寝た」
朝日か日中の日射しかわからない陽光で目が覚めて、時計に目をやると午前十一時。最近の休日にしてはよく寝た方だった。
体を起こして背伸びをして、今日一日の予定を頭に巡らせる。
……予定なし。
進級してからは、これが初めての本当の休日だった。
梓の奴は相変わらず俺の隣をキープして、自称恋人兼マネージャーの役割を担っている。
そんな梓が今日はいない。もっと言うと、日本にいない。どこかの国の皇族とのパーティーに出席するために家族総出で出掛けているのだ。ついて来てと何度もせがまれたが全力で断った。家族も一緒のためかそれほどしつこくなかったものの、それでも諦めさせるのには苦労したんだぜ。もっとも、俺はあの父親と同じ空間にいるだけで目眩が起きそうになるからな。どんな手を使ってでも逃げ出したさ。
というわけで今日はのびのびとした休日。
梓からパーティーのことを聞いたのは昨日のことなので、なーんにも予定はない。
梓が入学してきてそこで止まってしまっていたＲＰＧでも久しぶりにやってみようか。読みかけの文庫本を読破してやろうか、街へ出かけてみるか、一日ごろごろしてみるか、やることが多いようで、実は何もすることがないのが実際のところ。
案外、と言うか当たり前にもぬけの殻な自分に叱咤するように両手で頬を叩き、部屋を出た。
妹のあゆみは部活のためか家にはいない。父さんと母さんも出掛けていた。一人だった。
顔を洗って寝ぐせを直し、とりあえず外にも出られるように外出

用の服に着替えた。だからって行動がそれに伴うかと言えばそうじゃなく、足は自然と部屋に向く。
しわくちゃのままの布団を整え窓を開けると、爽やかな風と春の陽気が気持ち良い。ちょうど日射しが布団に当たり、物干し竿へ運ぶ手間を省いてくれる。
少し遠くでは子供のはしゃぐ声が聞こえ、電線には小鳥が仲良さそうに羽を休めている姿が目に止まった。
平和だ。
何にも心を脅かされることのない。
いくら自由な休日と言えど、真昼間から部屋でゲームなんていうのは何か損しているような、負けた気がする。
読みかけだった文庫本を一冊手に取り、日の当たるベッドの上でそれを広げた。
別段景色が良いというわけではない、ただの住宅街だけれど、窓辺で読書なんて少し優雅な気がする。そんな言葉が俺に似合わないことなんて重々承知しているが、ゆっくりとした時の中、そよ風と戯れながらの読書なんて格別だ。
「しかしなぁ」
どこまで読んでいたかわからない。挟んでいたはずの栞はどこかに抜け落ちているし、シリーズもので、前巻の内容だって覚えてないからストーリーはおろか誰がどのキャラクターかすらわからない。としたところで読むのを諦めた。手に持っているのは四巻だから、最初っから読んだらそれこそ一日費やしてしまう。それはゆっくりとした休日と言ってももったいなさ過ぎではないか。そう思えばゲームだってそうだ。ステータスの見方や、次にどのイベントをこなせばいいかもわかるはずがない。
そうなればやることは限られてくる。
勤勉家ではないのでこの時間から勉強なんてできるわけがない。テスト前だけで十分だ。ならば、寝るか外に出るか。最初の選択肢は二つ。消去法でいけば、さっき起きたばかりなので後者になる。

ま、こうなることは予想できたというか、そのために着替えたんだしな。
かと言って、一人でぶらつくのも寂しい。
携帯に手を伸ばし、メール履歴に目を通した。当然ながら画面は神宮寺梓で埋められている。毎日のように顔を合わせているからメールの件数自体はさほど多くはないけど。今日はパーティー中なのか、お空を飛んでいるのかメールは届いていない。
電話帳をピ、ピ、ピ。カーソルが停まった先は高橋裕也。あいつでも誘ってぶらぶらしてみるか。
プルルルル……。三回目のコールが鳴ったところでおっくうそうな男子高校生の声が耳に届いた。
『お～っす。厄介事ならお断り。麗しき女性からのお誘いはいつでも大歓迎』
俺から連絡すること自体珍しいのに、梓関連で警戒されているのか第一声がこれだった。
「もしもしと、電話対応の基礎から教えてやろうか？」
『うるさい。この前はよくもやってくれたな。お詫びに神宮寺さん宅のホームパーティーのお誘いか？』
あれは倉敷さんのせいだろう。梓を連れて来た俺の責任がないわけでもないけど。ホームパーティーのことなんかすっかり忘れてた。デマカセだったしな。梓の家に近付くなんざごめんだ。
「梓は今海外のパーティーに出かけてる。その話しはまた今度な。ところで裕也、お前今日暇か？　せっかく梓がいないんだから、たまにはどっか遊びに行かないか？」
『何が悲しくて男二人で休日を過ごさねばならんのか』
「どうせ女子にも愛想尽かされてるんだからいいだろ？」
『き、傷つくぞ？　とにかく、ナンパ以外はお断り。僕だって忙しいんだよ』
「ちっ。脇役が」
『な、なんだとそれは聞き捨てならな――』

ピッ。
悲しいけどな、間違ったことは言ってないんだ。
さてどうするか。休みの日にわざわざ連絡して遊ぶほどの友達も梓のおかげでいなくなったし。……あ、やべ、寂しい。
あとは千佳か倉敷さん。でも二人とも部活だろうしなぁ。
……一人で、かな。
空はこんなに青いのに、一人であてもなく街中を彷徨うなんて寂しすぎる。いっそ旅にでも出てしまおうか。
溜息を吐き、窓際に置いた文庫本を本棚に直すべく取り、窓を閉めようとした時だった。
「あれー？　真？」
家の前の路地から俺の部屋を見上げる人物が一人。制服で栗色の髪を揺らして、手には楽器ケースを担いでいる幼馴染。物珍しそうにぽかんと俺を見上げていた。
「よう千佳。今帰りか？」
「うん、早く終わったから。梓ちゃんは？」
当然の疑問を投げかけてきた。
「今ごろ時差ぼけでもかましてるんじゃねーの。海外出張中ー」
「えっ。外国に行ってるの？　……じ、じゃあ真一人？」
「おう。そっちは？　楽器持ち帰って来てるみたいだけど、どっか行くのか？」
「ああこれ、吹奏楽コンクールの楽譜届いたから家でも練習しようと思って」
「そっか。部活もいろいろ大変だなー」
部活に真面目なことはいいことだ。でもこれで千佳の線も消え、か。残りは倉敷さんだけど、二人で遊びに行くなんてないな。散々馬鹿にされて散々こき使われそうだ。やっぱ一人で出掛けるかな。
「まっ、真は今日何するの？」
「なにもー。ちょっと街の方ぶらついてみようと思ってたくらいだな」

「そ、そっか。ひ、暇してるんだ……そっか」ぶつぶつ。
千佳は何やらうつむいて呟いていた。
そういや昼飯も食わないと。いつも梓と一緒だから母さんも昼飯なんて残してくれてないし。適当に飯食って時間潰して帰ってくるかなぁ。
「じゃーな。練習頑張れよ」
久しぶりにハンバーガーでも食べに行くか。
「ね、ねえっ！」
窓を閉めようとして声で引き止められた。そわそわと、忙しなく栗色の髪をかきあげる。
「ひ、暇なら真の部屋に行って、いい？」
「だってお前、練習は？」
「い、いい！　いつでもできるからいい！　真が一人なんて珍しいんだからこんな好機を逃す手はないと思うの！　あっ、じゃ、じゃなくて！　ご飯！　ご飯食べた？」
「ま、まだだけど」
「じゃあ待ってて！　いい？　すぐ来るから待っててよね！　着替えて来るから！　動いちゃダメだからね！」
俺の返事も待たずに千佳は慌てふためき駆け出していた。家は近所なんだからそんなに焦らなくてもいいのに。
千佳が来ると聞いて少し緊張を覚えたが、それは俺がごく当たり前だった日常から遠ざかっているということなんだろうな。
動くなと言われたけど、それがどこまでのことかわからないのでとりあえず窓を閉めて一階に下りた。千佳が来るなら下で待っていた方がいいよな。
ピンポーン♪
……もう来た。今下りて来てソファーに座ったばかりなのに。
ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポーン♪
な、なんだなんだ？　千佳じゃないのか？　インターホン鳴らして少しの間も待てないとはどこのどいうつだ。

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポーン♪
だああっ！　うるせっ！　ちったあ待つってことしろよ！　誰だか知らないけど！
「はいはいただいまー！」
ガチャッと、玄関の戸を開けると、
「ちょっと！　何で部屋にいないのよ！　動くなって言ったじゃない！　ばか真！」
泣きそうな顔の千佳がいた。窓際から動くなって本気だったらしい。
「よ、よう。早いな」
「すぐ来るって言った」
それにしても早過ぎだろ。全力疾走かよ。
「い、いや、迎えるのに下りてきてたんだよ」
「それならいいけど……。どこか行っちゃったかと思ったもん」
今日の千佳は様子がおかしい。よく知っているからこそすぐわかる。妙に女々しくなっている気がする。千佳の私服姿も久方ぶりだった。長袖のTシャツにジャケットを羽織り、ジーンズを履いている。そういえば千佳のスカート姿は制服以外で見たことがない。
「その荷物は？」
俺は千佳の手に握られていたビニール袋を指差した。ビニールに入れてくるなんて、よっぽど急いでいたのか。
「あっ、これご飯の材料。私がお昼作ってあげるね」
何とまぁびっくらこいた。長らく付き合いのあるものの、千佳の手料理なんて食べたことはない。やはり何かおかしい。ただの気まぐれだとしたらそれまでだけど、何か企んでるわけじゃないよな。……いやいや、千佳に限ってそんなことはないだろう。梓や倉敷さんなら大いにありえるけどな。
それにしても手料理なんて、何を作って……ま、まさか！
「れ、レトルトカレーか？」
「え？　真、カレーが食べたかったの？」

「い、いやいや、気にしないでくれ」
無人島での出来事を思い出してしまった。あれは期待していただけに残念だったから。梓じゃないんだから、そんなオチはないな。
「チャーハン。材料は余り物しか持ってきてないけど、それでいいよね？」
「ん、ああ。何か悪いな」
さっそく千佳は準備に取りかかった。「エプロン借りるね」と母さんのエプロンを見事に着こなした千佳を見ると初々しさが溢れ出て思わず三秒停止した。幼馴染とはいえ、普段見慣れない千佳のエプロン姿は女らしさを三割、いや五割増しして淡白なリビングに花を咲かせる。
「ジャーの中のご飯、使っていいかな？」
それに一拍置いて「いいんじゃないかな」と答えた。「怒られたら真が炊いてね」と舌を出して笑う千佳を見てこちらも思わず頬が緩む。
トントントン、リズムよくまな板を叩く音が心地よく耳に届く。母さんがまな板を打つ音とはまた違い、意味もなく自分の手で膝を叩き同じリズムを刻んだ。
千佳は野菜をきざみ、ボールに取り分け、マヨネーズをご飯に混ぜ始める。
「知ってる？　こうするとね、ご飯がパラパラになるんだよ。豆知識」
ふふふ、と微笑を浮かべ、不思議そうに料理風景を眺める俺を一瞥した。手際良く料理する姿がやけに良く似合う。
「千佳は良いお嫁さんになるんだろうな」
思いついた常套句を言ってみた。素直に出た言葉でもあった。
「や、やだなぁ。ま、真は家庭的な子って、す、好き？」
と照れながらに言う。
「まぁ、好きだよ。やっぱ、うまいご飯が家に帰れば待ってるっていいと思うし」

どこのオヤジだよ俺。まだまだ高校生。そんなことを思うのはまだ何年も先だ。って結婚なんてできるのかな。仮に梓とそうなったところで毎日シェフの豪華料理なんだろうな。それはそれでいいけど、やっぱ違うよなぁ。

「うふふ。そっかぁ」

どうやら千佳のご機嫌を上げることに成功したらしい。鼻歌まで歌いだし、カチカチとコンロの具合を確かめている。

千佳はきっと良い家庭を築けると思う。気配り上手で家庭的で、おそらく一途な千佳。そして可愛い。大人になれば相当美人になるだろう。旦那としては不満なんてこれっぽっちもないだろうな。

幼馴染じゃなかったらなぁ、彼氏候補に立候補しようとでも考えたかもしれない。

幼馴染だからってこだわっているわけじゃない。ただ、昔から一緒にいたから、どうやっても、千佳は親友で、幼馴染なんだ。

炒め物の独特な音と香ばしいニンニクの香りが漂ってくる。千佳は器用にフライパンを返してチャーハンを炒めつつ、空いているコンロでお湯を沸かし、スープの準備もしていた。

「真、お皿出してー」

「おうっ」

食器棚から平皿を二枚取り出し、テーブルに並べ席に着いた。そこに輝かしい黄金色のチャーハンが盛りつけられる。急に腹の虫が活動を活性化させ、胃と背中を絞めつけ始めた。食欲をそそる匂いが今にも俺に手を出させようとする。しかしここは行儀良く、千佳がテーブルに着くのを待つことにしよう。インスタントわかめスープを作った千佳は、すぐに俺の向かい側に座った。

「千佳特製余り物チャーハン、たんと召し上がれ」

「もっといいネーミングないのかよ」

「いいでしょ別に。ほら食べよ」

いただきます、同時に言って一口放り込んだ。

「どう？　味付け、薄かった？」

これは、初めて口にした千佳の料理だったが、何ともうまい。高級料理店のうまさとはまた違う、家庭的なうまさ。がっつきたくなるようなうまさである。グルメリポーターのような感想は言えない。思いつくのは一言。

「うまい！　まさに庶民的なうまさだ！」

「それ、褒めてるの？」

不服そうな千佳だったががっつく俺の様子を見て安心したようにチャーハンを口に運ばせた。「うん、おいしい」と満足そうに呟いてもう一口。着飾らない食べ方が俺にも安心感を与えてくれる。

そのまま千佳が話す今度のコンクールの話しに耳を傾けながら昼食を終えた。

「片付けは俺がやるから。千佳はゆっくりしてろよ」

「いいよ。私が押し掛けたようなものだし、片付けまでするから」

「いいって。座ってろよ」立ち上がり、食器を持つ。

「だめだめ、私がやるよ」と俺の持つ食器を奪いにかかる。

「いいから」

「よくない」

むむむ、と睨みあって片付けの役目を我が物にしようと手に力を込める二人。なぜ面倒な片付けを取り合わねばならんのか、と気付いたところで手の力を緩めた。

「わわっ」

バランスを崩した千佳は皿を手にしたまま後ろに倒れようとする。両手は塞がってて受け身も取れそうにない。

「あぶねえっ！」

咄嗟に手を伸ばす。

ドスン、と鈍い音が響いて床に倒れ込んだ。

千佳ひとりで。

俺はというと、食器をしっかりキャッチ。割れるのを防ぎ、使命感を全うした達成感が溢れてきた。

「あいたたた……。ちょっと、今のは普通私を庇うもんじゃないの

！？」
涙目で腰をさすりながら怒りをあらわに怒鳴る千佳。
「いやだって、食器割れたら危ないだろ」
「そうだけどさ……このっ！」
と俺の膝にアリキック。不意打ちでバランスを崩す。地味に効いた。当然、食器もグラグラと重心を求めて揺れ、ついには皿の上に重ねて置いてあったスープを入れていたカップが宙に飛んだ。「あっ」それは千佳の頭に直撃。僅かなスープの残りが千佳の髪にかかり、空のカップがころころと床を転がった。
「……」
「……」
千佳の前髪から額にかけて、たら～っとスープが垂れる。千佳はそれが服に達する前に手で額を覆い、フキンを当てた。
何とも言えない凍りついた空気が流れ、俺はとりあえず、静かにカップを拾い上げて食器を流しに置いた。
座ったままジト目で俺を見上げる千佳。
お前がアリキックなんてかますからそうなったんだ。俺に責任はないぞ？　とも言える雰囲気ではなかったので、
「ふ、服には？」
「かかってない」
「そっか。と、とりあえずよかったな」
「……」
うーん、どうしたもんか。こんな時はどうすればいい。濡れたタオルを持ってきて、でもそれじゃ匂いが残るだろうし。
「シャワーでも浴びるか？」
「……そうする」
千佳はむくりと起き上がり、ゆらり揺らめきながら風呂場へと向かった。家の間取り図は千佳の頭に入っているのでわざわざ案内は必要ない。着替えはいいとして、タオルだけ置いておけば問題ないだろう。

そう思い、干してあったバスタオルを持って脱衣所へ。
耳を澄ますと、もうシャワーを浴びているようだった。一応ノックしてドアを開け、確実にシャワーを浴びていることを確認して脱衣所に入った。スリガラスと湯気でもちろん中は見えない。見えてしまったら俺は殺される。
「千佳ー。タオル置いとくからなー！」
浴室に聞こえるように声を張る。
「ふぇっ！？　ま、真！？　そ、そこに置いといて！」
「りょーかい。部屋にいるからな」
とタオルを置く。そこで目にしたのは千佳が来ていた服。着る順番に置くのが癖なのか、ご丁寧に上から、白い三角布、白い胸当て、シャツ、ジーンズ、ジャケットと綺麗にたたまれて置いてあった。うわわわわっ。
ちらっ。いや！　見てない。俺は見てないぞー。うん、見てない。見てないんだ。
自分に言い聞かせ、脱衣所を出て部屋に向かった。
正直、胸の動悸が収まらない。小さい頃は一緒に風呂に入ったこともあったさ。でもそれは小学校の低学年まで。千佳がいつの頃からか女を自覚し始めて、そういうことはなくなった。それも下着なんてつける前の話しだ。
妹の下着なんてまだまだ子供のものだし、妹のだとわかっているから俺も特別な目で見るわけがない。なんなら妹と一緒に風呂に入ったって何も感じないさ。おっと失言。めっ。妹、来年高校生。
はぁ、千佳も女なんだよな。
千佳の下着がなぜか目に焼き付いて離れない。もんもんと下着姿の千佳が頭に浮かぶ。
だあああっ！　何考えてんだ俺！　千佳だぞ千佳！　ま、まぁあいつだってもう子供じゃないし、下着だって大人っぽいもんだったし。ってまた下着！　ヤバイヨヤバイヨ。俺がヤバイヨ。
なんとかしろ。千佳が部屋に来るまでにこの気持ちの高ぶりを抑

えるのだ。
そうだ、宿題。数学の宿題があった。数字でも眺めて落ち着かせてみるのも手だ。
机に着き、鞄から教科書を取り出し開く。この際、宿題にこだわらなくてもいい。とにかく頭の中を切り替えないと。
パラパラとめくり止まったページ。えーと、８４×５７×８５？
なんだ、単なる掛け算の問題、っていうかこれ千佳のスリーサイズじゃねえか！　何だこの問題ありえねえ！　覚えてる俺もどうかしてる！
と、教科書をベッドに放ったところで千佳が部屋にやってきた。
「真、何してるの？」
！！！！！！！！！
「お、お前こそ何してる！」
きょとんとして俺を見つめる千佳は、バスタオル一枚でその身を隠し、濡れた髪もろくに乾かさずに湯上りの香りを漂わせていた。
「ふ、服着ろよ！」
千佳はにやりといやらしく笑った。
「えー、だって暑いし。昔はよく一緒にお風呂入ってたでしょ。気になるの？　ただの、幼馴染なのに」
言うまでもなく、直視できない。さっきまであんなこと考えていた上に、薄皮一枚巻いているだけの千佳が目の前にいるんだ。嫌でもタオルの中を想像してしまう。
「も、もう高二なんだぞ！」
「ただの、幼馴染のバスタオル姿だよ？　私はただの幼馴染なんだから気にならないでしょ？」
俺の前に膝を斜めにちょこんと座る。艶やかで真っ白な肌。なでらかな肩のライン。下手をすれば、真っ白い太股の奥が見えそうになっている。
もう少し角度が変われば……じゃない！　とにかく服を、服を着せないと！

「言っておくけど、バスタオルの中は水着でしたってオチもないからね。下着もつけてない、正真正銘のハ・ダ・カ」
妖艶な笑みを浮かべて言う。
これが梓なら引っ叩いて追い出すことでもするのに、千佳は妙に色っぽく、抗う術な何一つ頭の中に浮かんで来ない。服を着せるどころか、情けなくも後ずさりして距離を取ってしまう。
「どうして逃げるの？　幼馴染の私って、そんなに女の魅力ない？」
全く逆だ。いつものように俺の心情を読み取ってくれ。
「ねぇ……」
四つん這いになり、猫が餌を欲しがるようにゆっくりと俺にせまり寄る。眼下では胸の谷間が欲望をかき立てる。頬の朱色が伝染する。艶めかしい唇が小さく漏らす。見てはいけないと思いながらも、俺の視線はただ一点に集中される。
「ふふっ。ここが、気になるの？」
「ち、ちちちち千佳！　春の陽気でさ、今日は特にあったかいかいだからななぁ。で、でもでででも、日射病には早過ぎる！　冷静になれ！　ああ頭を冷やせ！」
千佳の中でどんな化学反応が起こったのかわからない。あ、あれか、あのスープ！　あれに人を狂わせる何かの成分がって、俺も飲んだしわけのわからないこと考えてる場合じゃなくてあああ混乱してる！
「真……。真がよかったら……私……」
千佳が俺の膝に手をかけたところで、無機質な機械音が部屋に鳴り響いた。
机の上に置いてあった携帯が鳴っていた。
「で、電話だ。きっとあゆみからだな」
そこで千佳は引き下がり、つまらなそうに溜息を吐いた。
助かった。俺は千佳の目を見つめたまま携帯を手に取り、誰からかも確認しないまま手探りで通話ボタンを押した。
「も、もしもし？」

『もしもし先輩っ！　愛しの梓ちゃんからのラブコールですよー！』
音漏れするほどの大声量でご挨拶。ナイスタイミングだ梓。
梓の声が聞こえたのか、千佳がピクッと肩を反応させた。
「よ、よう。どうしたんだ？　パーティーは終わったのか？」
『たった今！　ほんとはいきなり帰って来て先輩を驚かせようと思ってたんですけどぉ、何故か先輩の貞操危機センサーがピピッと反応してですね、何してるのかなーて。まさかとは思いますが、誰か部屋に連れ込んでバスタオル姿で迫られたりしてませんよね？』
すげえなお前。ってかカメラでも仕掛けてるんじゃないだろうな？
「ん、んなわけないだろ。帰りは気をつけて帰って来いよな」
『むっ。先輩が妙に優しい。何か隠してますね？』
ひえぇぇっ！　何だお前はっ！
「な、何もないぞ？」
それに対して梓は「ううーん」と唸る。その時、妙におとなしかった千佳がおもむろに立ち上がり、
「真、（お皿が頭に当たって）ちょっと痛かったけど、（シャワー）すっごく気持ち良かった！　勉強して（料理）またしてあげるね！
裸じゃ寒いから着替えてくる！」
わざとらしく声を張り上げて部屋を出て行った。かっこ内は小声で言ったものだ。さて、これが梓に聞こえていたのかと言えば、
『……先輩？』
変な意味で伝わっていたりする。
『女の人の声がしましたね。聞いたことのある声のような気もしますが。今、どこにいるんですか？　それで、一体なぁにをしていたんですかぁ？』
うほっ、怖え。普段の梓からは想像できない威圧感のある声だ。
「き、今日はずっと部屋にいるぞ。さっきのはテレビの声だよ」
『真って、先輩のことじゃないんですかぁ？』
「同じ名前の役が出てるドラマだったから、ついつい見てしまって」
『へえぇ、そうですか』

ま、全く信じられていない。そりゃそうだよな。ドラマなんて見ないことくらいわかってるだろうし。
『部屋に、いるんですよね？』
電話の向こうで、「斎藤さん」と呼ぶ声がして、何かカチャカチャと機械を操作する音が聞こえたかと思えば、机の引き出しが勝手に飛び出してきて、俺の肘に当たった。「いって！」チーンなんて音はしなかったけどレジのようだ。
「な、なんだ？」
ウィーン……と機械特有の音を放ちながら、引き出しの中からカーナビサイズのモニターがにょきっと伸びてきた。いつの間にこんなもんを仕込んだんだ。
そしてこれまた勝手に電源が入り、モニターに映し出されたのは、携帯片手に緑色の華やかなドレスに身を包んだ梓。まぁ、不機嫌そうだけど。大人びた化粧と、髪は煌びやかな装飾品でまとめられていて、いかにもお嬢様って感じだった。その背後には見慣れた黒服の斎藤さん。どうやらまだパーティー会場にいるらしく、それらしい人通りが梓の背後に見られた。
「ってかなんだこりゃっ！」モニターに向かって叫ぶ。
『それはこっちの台詞です。どういうことか説明してもらいます。部屋にいることはこれで証明できましたけど』
モニター越しに怪訝そうな目で俺を睨み言う。よく見ればカメラが内臓してあるようで、こちらの様子も向こうに映し出されているようだった。本当にカメラを仕掛けてやがった。文句は出るがさほど驚きはない。慣れだ。
「ああ～、だから言ったろ？　ドラマ見てたんだよ。暇だったからさ。ちょうど最終回みたいだったけど」
『失礼します』
俺の話しは一切信用していないのか、梓がそう言うと、カメラ内蔵モニターは首を振り部屋を一通り見回した。そのあとカメラは再び俺にレンズを向ける。

まだまだ納得のいかない様子。千佳が戻って来る前に通信を切らなければ。
大体何で俺は必死に隠そうとしてるんだ。別に千佳がいることが知れたところで、何度も言うが梓は俺の恋人じゃないんだし。千佳と俺がどうなろうが……って千佳は幼馴染！　何もあるわけがない！　でもさっきの雰囲気だとそのまんまってことも……いやいや俺は何を考えてるんだ。うん、ヤバイ、混乱してきた。梓からテレビ電話的なものがあって、千佳が家にいて、俺はそれを隠そうとしてて、千佳がバスタオルであれで、ぶほっ！　胸の谷間が見えてた！
いやいや千佳は幼馴染で千佳の胸を見ようが裸を見ようが、いやでももうお互い高校生であるわけで俺には梓がいて、違う！　梓はただのストーカーだ！　でそのストーカーに幼馴染の存在を隠そうとしててあれれってれれ？
『どうしました？』
「た、谷間っ！」
『えっ？』
うほぉう、俺の馬鹿。
「い、いや、そのドレス。谷間が欲しいよな」
『しっ、しつれーな！　どうせ梓の胸はちっちゃいですよーだ！』
「でも、梓らしくていいと思うぞ」
『そ、そんな……もう、先輩ったら、梓のそんなところばっかり見て。えっちぃんだから。揉んで、大きくしてくれます？』
うん、いい感じじゃないか。いつもの流れだ。このままさりげなく会話を続けて、そして早々に通信を切る！
「そのうちな」
『えっ？　う、うわきゃーっ！　そ、それって告白ですか！？　ま、待ってて下さいね！　帰ったらさっそくお伺いしますから！　新婚初夜は熱い夜に……ハァハァ、じゅるうり』
だらしない顔をやめろ。日本人全てがそんなもんだと思われるだろ。やれやれ、どこに行っても梓は梓だな。それじゃ、そろそろ。

『って、先輩がそんなこと言うわけないじゃないですか。やっぱり何かおかしいです。罪の懺悔なら聞いてあげます』
こいつ、フェイク……だと？
片目をカメラに寄せて、俺のことを見透かすつもりか。悪い事はしていない、そのはずなのに、冷や汗が止まらない。
「真ー。服着て来たよー」
……遅かったか。
『先輩！　今女の人の声が！　明らかに先輩のこと呼んでましたよね！　服着て……ふっ、服着たってなんですくわぁっ！』
モニターに向かって大口開けて叫ぶ梓。うん、虫歯はないね、健康的な歯だ。音声は電話なのに、一生懸命モニターに叫ぶ姿が滑稽に見える。カメラは俺の方に向いてるから千佳の姿はまだ確認できていないらしい。
だけどもう誤魔化しは効かない。
しかし、面倒なことになるのは間違いない。できるだけ穏やかに事を済ませたい。俺の意識は右往左往。あれこれ考えるだけで、何も言葉としては出て来ない。
黙ってモニターを見つめてカメラに噛みつく梓を見ていると、千佳が横にやってきて俺から携帯を奪い取った。
「梓ちゃん、こんにちは」
千佳は満面の笑みだった。さて、どうするか。とりあえずこの場を離れた方がよくないか？　しかしそれは叶わず、千佳は俺の腕をきっちりホールド。そして携帯の音声をスピーカーにして、モニターの前に置いた。
『えっ、あれ？　千佳先輩？』
梓はようやく声の主に気がつき、目を丸くさせてモニターに釘付けになる。
『ちょちょちょ、離れて下さい！　梓の場所！　そこ梓の場所です！』
千佳がここにいる疑問よりもやはりそこに喰らいつく。俺として

も早く離れてもらいらい。その、当たってるんですよ、腕に。先程垣間見た柔らかな双丘が。無理矢理に動けば、よりその感触を得てしまいそうで、掴まれている右腕に力を込められない。やっぱり、梓より大きいな。

「幼馴染なんだから、別に深い意味なんてないよー。昔はよく一緒にお風呂にも入ってたし。今日も真がお腹空かせてたからご飯作りに来ただけだよ。今は、二人っきりだけど」

『そ、そそそそうですか。ご飯を。へえぇ。ふ、二人っきりなんですね。それで、えと、あの、服を、着て来たって……』

「ああ、真に髪にかけられちゃったから。シャワーで流してきたの」

お前、その言い方ってなんか……。

『ひいいぃっ！　何をっ！　何をかけちゃったんですか先輩っ！　くくく詳しく説明願いますっ！　いややっぱり聞きたくない！　でもっ、やっぱり聞かせて下さい！』

ムンクの叫びならず梓の叫び。何を考えているのか想像はつくが、とりあえずは誤解を解くことから始めよう。

俺は今日起きてからのことを梓に説明した。もちろん、先程のバスタオルハプニングのことは控え、どういった経緯でシャワーを浴びたのかと。

『そ、そうですか。安心したようながっかりしたような……』

お前は何を期待していたんだ。

『でも、先輩の部屋で二人っきりっていう事実は変わらないですよね』

「そ、そりゃそうだが、俺と千佳は昔からよくお互いの家に遊びに行ったりしてたんだ。別に変なことじゃないだろ」

いててっ！　なぜそこでつねる千佳！

『だって、千佳先輩は、真先輩のこと……』

そこまで言って黙る。俺は固まる千佳を一瞥してモニターに目を戻した。

「なんだよ」

梓が『千佳先輩は……』と続きを話す前に、千佳がその身を乗り出しモニターの前を占拠した。俺からは映像が見えないし、おそらくは向こうからも千佳しか見えていない。
「あ、ああ梓ちゃん？　いつ帰って来るのかなぁ？　か、帰って来たらまた遊びにでも行こっか！」
『ひっ！　は、はい。ぜぜぜひお願いします』
梓の怯えた声が聞こえた。
千佳がゆっくりモニターから離れると、モニターに映るのは心なしか震えている梓。『鬼……鬼がいました』とぶつぶつぼやく。怪訝に思い千佳を見ると、素敵な笑顔を輝かせていた。
何にしろ、頃合いだろう。
「じゃあ梓、気をつけて帰って来いよ」
『えっ、あっ、先輩！』
電話を切り、モニターに布を被せ視界を封じた。そして『やましい事は何もないから安心しておけ』とメールを送った。それで納得したのかどうかは知らないが、再び着信音が鳴り響くことはなかった。
「くっ、くくくっ、あっはははっ！　梓ちゃんからかうのって楽しいー！」
事が済むと千佳が高笑いを響かせた。腹を抱えて笑い転げる。
「いつからそんなに性悪女になったんだ。図書館の時といい、あとで俺が大変なんだぞ？」
「あっはははは。だってぇ」
千佳はけらけらと調子良く笑い、それが落ち着くとベッドに背中を預け、宙を仰いだ。
「不思議な関係だよねー。真と梓ちゃん。梓ちゃんのお父さんに認めてもらえば、全て丸く収まるんじゃない？」
「それができないことわかってて言ってるだろ」
「そーだね」
千佳はまたくすくすと笑う。

梓の父親が認める相手となれば、そりゃ超一流企業の社長の息子とか、世界規模の御曹司の息子とか、俺たちがお目にかかることも許されないような、住む世界の違うスーパーマンになる。あの人に認められるということは、つまり俺がそんな人物にならなければならないということ。そんなのは万に一つもありえない。顔、普通。学力、普通。身体能力、普通。生まれ、一般家庭。そんな俺が、どんな奇跡を起こしたところで同じ目線に並ぶことはない。宝くじの一等を当てたところで、そんな額でも向こうの世界じゃはした金だ。

ならば梓にさっさとそんな奴らとお見合いでもさせればいいのに、娘にはとことん甘い親だから困る。梓に何も言えないから、俺にどうにかしろと言っているようなものなのだ。

「あいつに誰かいい男を紹介してやってくれよ」

「私の知り合いに梓ちゃんを納得させるような人いないよ」

それもそうだ。なんせ俺らは一般人だからな。

「いろいろと大変だよね、ジョンも」

「じょっ……倉敷さんから聞いたのか？　あの時のこと」不意打ちだ。

「そっ。まさかみちると三人で街に行くなんて、話し聞いても場面が想像できなくて」

「二人のあとをついて行っただけで、俺は何もしてない」

「あはっ、想像通り」

「は？　何なんだよ、ったく」

まったく、俺のことをわかってるんだかわかってないんだか。幼馴染ってのは不思議なもんだ。

それから千佳は懐かしむように目を閉じて微笑んだ。

「それにしても、今の梓ちゃんって、あの時と比べたら全然変わっちゃったね」

あの時って、いつの頃だ？　わからないけど、出会ってから何一つ変わってないような気がするけどな。街で会った次の日にはもう俺の家に来たし。それからすぐだ。ベッドに潜り込んで来て神宮寺

家に連行されたのは。
「真、もしかして覚えてない？」
「よーく覚えてるさ。何で出しゃばって助けちまったんだろうなぁ」
でも、あの場面で困ってる女の子を見て見ぬふりなんてできなかったよな、きっと。
「助けた？　あ、それ中学生の時のことでしょ？　そうじゃなくて、いつだったかなぁ、たしか小学生になりたてくらいの頃。一度だけ梓ちゃんと三人で遊んだじゃない」
……は？
俺は言葉にならない疑問符を浮かべるばかりだった。
全然、まったく記憶にない。あの梓とそんな小さい頃に遊んだ？
小学生になりたてって、もう十年以上前の話しだ。
「いつもの公園で二人で遊んでたらさ、梓ちゃんが一人で泣きながら入ってきて、それを真がなだめて、それから……ってほんとに覚えてないの？」
「あ、ああ……まったく……」
よく行ってた公園は小学生くらいまでは毎日のように遊びに行ってたし、そこにいた他の奴らも一緒になって遊んでいたから、一人二人一度だけ遊んだことあるって奴もいたのかもしれない。
「あの時の梓ちゃんは印象薄かったからね。遊んだって行っても砂浜で砂の家を作っただけだったし。梓ちゃんあんまり話さなかったしね。でも、真は梓ちゃんが帰るまでずっと一緒だったんだよ？ほんとに、お兄ちゃんのように手を引いてさ。ちゃんと自己紹介もしたのに……」
そう言われても、思い出すようなことは何一つなかった。女の子の手を引いて遊んだって、覚えててもよさそうなことなのに。さして意識しないで相手していたのか、よほどその時の梓の印象が薄かったのか、その時の俺に聞いてみないことにはわからない。
「梓の奴、覚えてるのかな？」
不意に口から出る。俺が覚えていないだけで、俺と千佳と梓には

共有した時間があったってことだ。千佳が覚えていたのだから、梓だって覚えているのかもしれない。
でも今までそんなこと聞いたことなかった。梓が覚えていないのか、あえて口にしなかったのかはわからない。たった一度遊んだだけ、大した思い出じゃないのかもしれないけれど。
「さあ。それ以来、私が梓ちゃんとまともに話したのってボウリングの時だったから。昔と今の梓ちゃんは随分印象が違うよ。まるで別人みたい。前は、なんか暗い子だなって思ったから」
千佳は思い出すように肩をすぼめて言った。
今の梓は、明るくて、前向きで、よく喋る、暗いっていう印象とはかけ離れた女の子だ。
でも、街で梓を助けた時、最初に梓に持った印象は、決して明るいというものじゃなかった。むしろ、そう、千佳が言っていうように、暗くて、おとなしいなって。
最初だけだったけど。
「ま、どうでもいいか。そんな昔のこと」
覚えていようと覚えていまいと、今は関係ないだろう。梓だってわざと明るく振る舞っているようには見えないし、今の梓が俺の知っている梓だ。でも仮に、おとなしくておしとやかな梓に積極的にアプローチされたら、心惹かれるかも。ま、そんな梓は梓じゃないな。
その後すぐ、あゆみが帰って来て「わぁ、千佳お姉ちゃんだぁ！」と千佳に嬉しそうに飛びつき、三人でトランプやボードゲームで遊んで、夕方になると千佳は帰って行った。
千佳が帰って「千佳お姉ちゃんと浮気してたの？」と無邪気に聞いてくるあゆみに苦笑を浮かべつつ頭を撫でた。
夕食を終えた頃、「梓お姉ちゃん、今日は来ないのかなぁ」と残念そうに呟くあゆみの願いを叶えるように、我が家のインターホンが鳴らされた。
「お土産の前に、聞きたいことが山ほどありますっ！」

俺と千佳が並んで話している様子が流れているモニターを突き出し、頬を膨らませた梓が立っていた。

今夜は、無事に眠れるだろうか。

真夏の夢は悪夢と共に

太陽がすべてのものを溶かしてしまおうとでもしているような熱を日本全土に降り注いでいる日曜日、俺は街中に買い物に来ていた。アーケードの中に入れば少しは涼しくなる。それでも汗で肌に張り付くシャツが不快感を与えていた。湿気を伴う日本独特の夏真っ盛り。

目的は参考書。中学三年の夏に受験用の参考書を買いに来るなんて遅過ぎるのにも程があるが、志望校は家の近くの県立西高校、無難に勉強していればまず落ちることはない普通校だ。

勉強しろと母さんがうるさいので形だけでもと参考書を求め、半分暇つぶしで街をぶらついていた。千佳と裕也も誘ったんだけど二人とも用事があるそうだ。

まずはアーケードに入りすぐに見えるコンビニに寄った。自動ドアをくぐり、最初に吹き付けるエアコンの冷風で心地よい鳥肌が立ち、そのまま週刊誌の立ち読みを敢行する。今週はもう読んでしまった雑誌だけど、汗がひいてしまうまでの間、パラパラとページをめくった。

汗がひいて、ふわっと熱気の漂う外気の中に再び身を投じる。ここからが迷うところである。

アーケードに着くまでは太陽から逃れようと何も考えずにひたすらに足を進めていた。汗がひいて、火照った体を冷ましたのちに何をしようか考える。

参考書だけ買って帰るのはせっかくの日曜日、何か負けた気がする。何故か数年後の俺も同じことを考えるような気がするのは――どうでもいい話しか。

このまま暑い中彷徨い歩くのは自殺行為もいいところ。せめてショッピングモールに入りぶらぶらするのが妥当な線だろう。簡単なゲームコーナーもあるし本屋もある。暇を潰せればなんだっていい。

無気力な考えの俺が、まさかあんな形で暇をつぶすことになろうとは思ってもみなかった。
コンビニを出て目的のショッピングモールに向かい歩き出す。体を冷ましたおかげで足取りは軽い。均等に並べられたタイルを一つ飛ばしで歩く。さて、何歩いけば着くかななどと数えながら歩いていると、雑踏の中、妙に目立つ集団が見えた。
CDショップの前、年齢的にそう変わらないであろう少年三人の姿。それだけなら別に気にすることもないんだけど、三人は女の子一人を取り囲むように立っていた。
男三人は三人ともかっこつけに失敗したようなヒップホップを着崩した格好をしていた。派手な服装に、金色に近い色褪せたような茶髪。ちゃらちゃらと趣味の悪そうなアクセサリ。間違ってもお近付きにはなりたくない輩だ。
中にいる女の子は、清楚な白いワンピースを着て、腰まで届きそうな長くて黒い髪。控え目な装飾だけどやけに存在感が際立つショルダーバッグをかけていた。
明らかに仲の良い友達ではなさそうな四人だった。
が、俺の先入観だけでそう決めつけてはいかん。もしかしたら、ちょっとアカ抜けしたい女の子が最近仲良くし始めた友達かもしれないし。何にせよ、面倒なことには関わらない方が世の中うまくやっていける。
そう。思ってたはずなんだけどな。
俺はその時、何を考えていたのか、引き寄せられるようにその四人に近付いて行った。
ただ近くを通るだけだ。ショッピングモールはこの先にある。通り道なんだ。ごく自然な行為だ。その際に話し声が聞こえたところで、それはただの街の騒音にすぎないのだ。
「なぁなぁ、さっきから黙っちゃってさ。あんたあそこの娘なんだろ？」
「だーかーら、答えろっつーの。そのバッグ、いくら入ってんのよ」

「こんな街中一人でうろついちゃって。わがままが過ぎておうちを追い出されちゃったってか？　ひゃははっ！」
下品な笑い方だ。馬鹿丸出し。やっぱり友達ってわけじゃなさそうだ。
「早く通してくれませんか？　あなたたちに構っている時間はありませんので」
三人に囲まれてるってのに、随分と強気な子だな。
だけど、それは虚勢で、良く見ると女の子の細い足は震えていた。
街行く人は見て見ぬふり。それが当たり前か。相手が子供だろうと大人だろうと、面倒事には首を突っ込まない。それが賢く過ごす方法であり、大概の人はそうやって生きている。俺もそうだ、そうやって過ごしてきた。当たらず触らず、近からず遠からず、無難な位置に陣取ってきた。
「わーるい悪い、待った？」
だけど困って震えている女の子を見捨てるような、そんな情けないことはしたくない。ここで黙って通り過ぎれば、きっと思い出して後悔する。勉強だってできはしないさ。
だから、俺は男の肩をかき分けて囲みの中に入った。
「あ？」
対面した男に思いっきり睨まれた。正直、おっかない。目つきは悪いし、体格だっていい。俺はケンカなんてしたことはない。三人を相手にできるほど、そんな腕力も俊敏さも持ち合わせていない。特別なスキルを習得しているわけでもない。できることは、逃げること。この女の子を連れて、さっさとこの場を立ち去るのだ。
「えっ？」
当然、初対面である女の子からは困惑した眼差しを向けられる。
一瞬、呆けて立ち尽くした。
可愛い。白い肌でこの上なく整った目鼻立ち。俺を見る猫のような丸くて大きい瞳で息が詰まりそうになった。
だけど、悠長に美少女を眺めていることは許されない。俺は女の

子の手を取る。華奢な手首は真夏だというのに少し冷たかった。
「ごめん、トイレ込んでて待たせた。すんません、俺の連れなんで」
俺は男には一瞥もくれない。見てしまえば、気圧されてしまうのは目に見えている。
女の子は立っているのもやっとだったのか、少し手を引けば簡単に動かせた。
そのまま振り返ることなく立ち去る、
「待てやこら」
ことはやはりそう易々とさせてくれないらしい。
「な、なんでしょう？」
笑顔で振り向く。友好の証だ。穏便に、ことを済ませようじゃないか。
三人のうち馬鹿笑いした、金髪で一番人相の悪い男が俺の胸倉を掴む。
「下手な嘘吐くんじゃねえよ。こいつがお前のような奴の連れなわけねえっしょ。俺らが最初に目えつけたんだ。どっか行けよ、てめえ」
おおおぉ、怖ぇ。絶対人殺したことあるだろあんた。
でも、さっきからこの子のことを知っているような言い草だ。知り合いってわけじゃなさそうだけど。
この、胸倉を掴まれてどうしようもない状況。手を振り払ったら、間違いなく殴られそうだ。それは最悪。この状況を乗り切るには、言葉しかない。唯一俺が三人に勝ってそうなこと。言い逃れでもなんでもしてやる。人を嘘吐き呼ばわりするのなら、その通り嘘を貫き通す。
「ったく、面倒くせえなあ。黙ってりゃ穏便に済ませてやったのにさあ」
いいか、びびるな！　虚勢でもなんでも貫き通せ俺！
俺は携帯を取り出し、ストラップを見せつけた。ボタンを押せばＬＥＤライトが点灯する、そこらのガチャポンで取った景品だ。

「これで合図すれば、俺の家のＳＰがすぐに来て、あんたたち、それとあんたらの家もめちゃくちゃにするぞ。悪い事は言わないからすぐに退いてくれ。俺だって歳も変わらないようなあんたらを路頭に迷わせるのには心痛む。……どうする？」

言って後悔した。

はっ……はははははっ！

なんちゅう子供じみた嘘吐いてんだ俺ぇ！　んな話し誰が信じるってんだ！　馬鹿丸出しは俺！　穴があったら入りたい！　ってかもうお家帰りたい！

「ま、マジかよ。まさか、お前もそっち側の人間かよ」

……え？　信じてる？

俺から手を話し、凶悪面が仲間を呼んでコソコソと話す。ほんとにこんな嘘が通じたのか知らないが、その顔にはさっきまでの勢いはなく、逆に恐れを抱いているようにも見えた。「おれの家、親父が頑張って……」「おふくろと二人で……」「お、俺んちも……」なんて、何を話してんだ？　いいのかな、このまま逃げるぞ？

そして、

「ちっ。坊っちゃん嬢ちゃんがこんなとこぶらついてんじゃねぇよ！」

そんな捨て台詞を残して三人は立ち去って行った。

何なんだ。俺がそんなお坊ちゃんに見えるって？　何か知らんが助かった。こんなストラップ、どこでもあるから調べられたらバレてたよ。ていうか取られたら終わってたな。

俺と女の子が逃げる予定が、逆に相手を追い払う形になった。結果としてはどちらでもいい。俺はほっと胸を撫で下ろした。

「あの……」

呼ばれて振り返る。女の子は不思議そうな顔で俺を見ていた。いくつくらいかな。俺より年下に見えるけど。ん、まつ毛長いなぁ。

「手、離してくれませんか？」

「あっ！　ご、ごめん！」

あまり抑揚のないか細い声で言われ、思わず飛びのく。
女の子はどこか影のある表情で真っすぐに俺を見つめ、淡々と言う。
「助けてくれてありがとうございました。お礼はいかほどご所望でしょうか。あいにく今は持ち合わせてはおりませんけど」
妙に礼儀正しく話す女の子だ。嬢ちゃんって呼ばれてたけど、本当にいいとこの子かな。
「礼なんて、そんなのいいよ。困ってるみたいだったからさ」
「しかしそれでは……」
「ほんと、いいっていいって。それよりも気をつけてね。俺、買い物の途中だったからさ、これで」
これが裕也なら、お礼はデートでなんて言いそうだな。
「そうですか……。せめてお名前を。いつかまたお会いする時があれば、その時こそお礼いたしますので。わたくしは、神宮寺梓と申します」
神宮寺って……どこかで聞いたことある名前だな。
「俺は来栖真。この辺よくぶらぶらしてるからまた会うかもね。あっ、でもお礼なんていいから」
「来栖……真？」
神宮寺さんは少し考える様子を見せた。珍しい名前かな？
「そう、来栖真。何か変かな？」
「い、いえ、そういうわけではないのですが……」
少し動揺しているようにも見える。先程の落ちつきはなく、か細い手は忙しなく髪を撫でていた。
そしていきなりだった。
神宮寺さんは突然人が変わったように表情を輝かせ、俺の両手を取った。
「あ、あのっ！　あなたはもしかして公園で――」
公園？　講演？　言いかけて、神宮寺さんは再び表情に影を落とし口を閉じた。その視線は俺ではなく、俺の背後に向けられていた。

「――時間ですね。本当に、ありがとうございました」
白い手が名残惜しそうに俺の手を離れ、彼女の視線は見上げるように徐々に上へと移動していく。
視線を追って見上げると、俺の頭の上には、黒いサングラスをかけ、黒いスーツを着た、いかついおっさんの顔があった。
「うおぁっ！」
高速で振り返り後ずさりする。放たれる威圧感が半端じゃない。身長も俺より頭二個分くらい高く、さっきの三人をいっぺんに相手するよりも、この人ひとりを前にする方が恐ろしい。サングラスだからどこを見ているのかわからないけど、どうにも睨まれているような気がする。
「少年、邪魔だ」
想像できる通りの図太く低い声。それだけで感覚が全て支配されてしまいそうになる。あ、新手か。こんな奴を相手に虚勢が通用するとは思えない。でも、助けた女の子を残して逃げ出すってのは、それこそ情けない。
身構えると、背中から澄んだ声が聞こえた。
「斎藤さん、その方は梓を助けてくれました。恩人です。態度に気をつけて下さい」
え、し、知り合い？　こんなヤクザみたいな人と華奢で清楚な女の子が？
俺の視線は何度も二人の間を往復した。不釣り合いにも程がある組み合わせだ。しかも女の子の方が優位に感じる。
「むっ、これは失礼いたしました。わたくし、斎藤からも心より感謝いたします。そして、わたくしの不手際からお嬢様を見失いご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます」
俺に向かって深々と頭を下げる斎藤さん。俺は口をあんぐり、ひたすら唖然とするだけだった。
「斎藤さん、行きましょう」
斎藤さんは会釈して、俺の横を通り過ぎた。追って振り返ると、

神宮寺さんは、笑っていた。
「また、お会いしましょう」
それはとても魅力的な笑顔だった。
そのまま呆然と二人の背中を見送り、姿が見えなくなって秒針が一周した頃、ようやく俺の足は動きだした。
中学三年の夏。現実味のない、奇妙な出来事だった。
その翌日、神宮寺梓を助けてしまったことを、ものすごく後悔することになる。
ピンポーン♪
学校から帰って来て、母さんに頼まれて出たインターホン。
「こんにちは！　昨日はありがとうございました！　あなたは命の恩人です！　突然ですが、梓と結婚してくださーい！」
「……誰？」
太陽にも負けない明るい笑顔を輝かせるこいつは、昨日と同一人物か疑ってしまうほど、喜々として俺の前に現れた。

「あの時の夢……」
まだ目覚ましが高笑いを上げるには一時間ほどある。嫌な夢でも見てしまったかのように、手の平には汗が滲んでいた。
女の子を助けるなんて俺に似合わないことをしてしまったせいで、今じゃやたら騒がしい毎日を送るハメになってしまった。
だけど、それが心地良いと思うようになってしまったのは、俺の最大の心変わりだろう。
「うう～ん……」
隣で眠る梓の寝顔を見て、その額にキスをした。
昔の俺じゃ考えられなかったけれど、今の俺の幸せはこいつと共にある。
梓の親父にかろうじて認められてはや一年。
神宮寺宅の生活にもすっかり慣れ、毎日騒がしくも幸せな日々を

送っている。
神宮寺家をサポートできるように、学校も辞め、経済学やら政治学やら、その他の知識を頭に詰め込む毎日だ。それが梓との仲を認められる条件だった。しっかりと、神宮寺家の代表を担えるようになること。それが俺の人生の目標であり、二人の目標なのだ。
千佳と会うことは皆無と言っていいほどなくなった。裕也もそうだ。倉敷さんは、たまに梓が家に招いたりする。倉敷さんなら安心だと、梓は思っているらしい。もうジョンとも呼ばれなくなった。倉敷さんから学校の様子や千佳の様子を聞いたりして、学校に通っていた頃の懐かしい記憶を思い起こして、感慨深く思うこともしばしばある。
梓と一緒になって失ったものも大きい。千佳や裕也や、友達との触れ合い。何気ない、のんびりとした生活。でもその失ったもの以上に、今の幸せは大きいのだ。
「あれ……？　もう起きたの？　早いんだね」
眠気眼をこすりながら、共に生きていくことを誓った梓が目を覚ます。一つ小さな欠伸をして、細めた目で俺を見つめる。
「夢を見た。再会した時のこと。運命だったよな、あそこで会ってなかったら、今の俺たちはなかった」
「ふふふ。……ねぇ先輩、キスして？」
「先輩はもうやめろって」
悪戯っぽく笑う梓の唇に、そっとキスをした。唇が離れ、梓の顔にかかる髪を払い、もう一度口づける。梓は、出会った頃の黒い髪に戻していた。
「先輩、愛してる。ねぇ、このまま……しよ？」
「……ふぅ。ダメだ。お前のお腹には、もう……」
「もうっ。本当に優しいんだから。あと半年かぁ。待ち遠しいな、私たちの赤ちゃん」
梓のお腹には新しい命が宿っている。
二人の愛が、形となってこの世に誕生するのだ。

怖いくらいに幸せを感じる。
「これからも頑張ってね、パパ」
俺だけの幸せじゃなく、梓と、生まれてくる子供にも、幸せを降り注ぐのだ。

「うがーーーーっ！」
激しい悪寒で目が覚め、いつの間にか部屋に取りつけられていた、謎のシナリオを流すスピーカーを叩き壊した。
あ、悪夢を見た。
眠っているうちに洗脳しようとするとは。
あらゆる手を使う、本当に恐ろしい奴だ、神宮寺梓。

太陽の笑顔で　？

今日も梓の奴がしつこい。
何故かどうしてか俺の夢の内容を知っていた梓は「夢を現実にしましょう！」と学校中、俺を追いかけ回していた。いや、知っていたのは当然か。あいつがあのシナリオを用意したんだから。だからってその通りに夢を見てしまった俺が情けない。
「また始まったぞ」「いつもいつも元気よねー」「羨ましい……」
「結婚しちゃえばいいのに」「廊下は走ってはいけません」
すでに俺が危惧していた事態に陥っていた。俺と梓の追走劇はもはや校内名物。知らぬ生徒はいないほどに噂を立てられることさえ飽きられてしまった。去年は地味な生徒として無難に高校生活を送ってきた俺も、梓と一緒にすっかり有名人。勘弁してくれよ。
「捉えたぁっ！」
昼休みに廊下を逃走中、後ろで梓の叫び声が聞こえて振り返ると、何やら武器？を構えていた。先が大きく開いたモデルガンのようだ。
パンッとクラッカーでも鳴らしたような音が響いてそこからネットが放出される。アニメなんかで見た事ある捕獲銃。それが俺に向けて発射された。
「おわっ！」
俺は見事にネットに絡まり廊下を転がる。捕獲された。身動き取れず。やはり俺の扱いは逃げ出したペット程度なのか。
「うへへへ……。すぐ済みますからねー。おとなしく下半身を投げ出して下さい。ただ快楽に身を任せればいいだけですよ。ぐへへ……」
やべぇ、目が据わってる……。
「ま、待て。校内じゃさすがにまずいだろ。ふ、二人っきりになれるところで、なっ、なっ？」
「二人っきりに……。くふふっ、ついにこの時が来たのですね」

よし、梓もそっちに乗り気だ。俺を運ぶ時に隙を見つけて逃げ切るしかない。
「斎藤さん、真先輩を」
なっ！？
「かしこまりました」
どこから現れた斎藤さん！　どっかの漫画みたいな執事スキルなんて持ってんじゃねぇ！
これは非常にマズイ。斎藤さんがいたらとても逃げ出す隙なんて……。
その通りで、斎藤さんの鋭い眼光で金縛りにあった俺は体育倉庫へ拉致された。お姫様抱っこをされる俺は、どう見てもとてもシュールだった。
体育倉庫の鍵を無理矢理こじ開け、マットの上に投げ出された。梓が続けて入り、斎藤さんは出て行き外から鍵をガチャ。
もう古い木造の体育倉庫は、壁の隙間から日の光が差し込み真っ暗ではなかった。砂と埃の匂いで少し息苦しい。目が慣れてくると、梓がニヤニヤ薄気味悪い笑みを浮かべている姿が見えた。
「お、おい梓。マジで、やめとけよ？」
「今日はちゃんと、朝からお風呂に入ってきましたから。素敵なひと時にしましょう」
聞いちゃいねえ！
梓は小さく笑い、ブレザーを脱いで傍らに置いた。次にツインテールのゴム紐を解き、ワイシャツの胸元を開き、ついにはスカートまで脱いだ。少し大きめのワイシャツのおかげで太股の奥はギリギリ見えない。シャツの下に透けて見える下着が俺の欲望を膨らませる。
「そそるでしょう？」
梓はクスクスと意地悪そうに笑う。
俺は思わず生唾を飲み込んだ。梓の奴が知ってか知らないでか、俺は女性のワイシャツだけでその身を隠しているのが一番グッとく

るのだ。たとえ梓でもそれは変わらない。弱点を突かれた俺は何も言えずにただただ梓を見つめていた。
梓は一歩一歩ゆっくりと俺に近付いてくる。
呆けていた意識が戻った時、梓は胸のボタンをもう一つ開け、俺の目の前まで迫っていた。そして膝をつき、朱色に染めた顔を近付ける。艶めかしい吐息がかかる距離で、石鹸とシャンプーの香りが鼻を撫でる。
「ふふっ。先輩、抵抗しないんですか？」
抵抗、しないと。でも動けないのは変わらない。抵抗しようにも、手足を動かせないまま無様に転がり回るくらいが精一杯だ。梓の妙な妖艶さに、頭を働かせる余裕もない。そして梓は俺の耳にふっと息を吹きかけ、呟く。
「それじゃ、いいんですよね？　梓の初めてを――先輩に」
このままでは、本当に夢が現実になる。いや、現実になるのは梓のことだけで、俺はこの世から存在を抹消されてしまうことになる。悪い夢すら見られなくなってしまう。
そうこう考えるうちに梓の顔は目前に。その唇は、ターゲットに向かって迫っていた。
「だ、ダメだ！」
咄嗟に叫んだのはそれだけで、俺は必死に唇を引き絞り首を捻った。頭の中は真っ白でうまい言葉が浮かんで来ない。
「あんっ。動かないで下さい。どうせ逃げられないんだから。一緒に子供を作りましょう」
必死に梓の口撃を回避し続ける。命を奪い去ろうとする死の接吻がマシンガンのように繰り出される。よけられるのを我慢しきれなくなった梓は、俺の顔が動かないように両手で力強く押さえつけた。
「うへへ、これまでです」
「ま、まま待て！　子供ができても俺が生きてなかったら意味ないだろっ！？」
「変なこと言いますね。幸せな家庭を築きましょう」

「んなことできるわけないだろっ！　俺はお前の親父に殺されるかもしれんのにっ！」
「えっ？　どういうことですか？」
「だから俺がお前と関係を持てばお前の父親に……っ！」
し、しまった！　これは隠し通さねばならんこと。梓に父親から脅されていることを知られれば事態が悪化する恐れがあるのに。都合良く利用されかねないのに。父親のことをちらつかせて俺の身動きが完全に封じられるかもしれん。それは生きているけど、完全な人生の終わりだ。
「梓のパパに……なんですか？」
梓はぴたりと動きを止め、真剣な眼差しで聞いてくる。
「い、いやぁ、何のことだったかなぁ。ははは……」
うまい誤魔化しが浮かんで来ない。とにかく知らぬ存ぜぬで通すか適当なことを言うしかない。
「とぼけないで、教えて下さい。梓のパパが先輩に何かしたんですか？」
「な、何もない何もない。ただ前に会ったことがあるだけで、節度ある付き合いをしろって言われただけさ。だから、な、こういうことはやめようぜ？」
……沈黙。
お互いに黙り込んで、しばし音のない時間が訪れる。梓は身動き一つせずにうつむいていた。俺はいたたまれない空気に、細々と口にした。
「梓？」
「……本当ですか？」
解いた長い茶色の髪が顔にかかり表情は掴めない。
「な、何が？」
「梓のパパに言われたことって」
「ほ、本当だよ」
「嘘ですね」

そこで顔を上げ、真っすぐに俺を見つめる。
「断言っすか」
「先輩の嘘なんてすぐに見抜けます。本当のことを教えて下さい」
本当のことなんて言えるわけないじゃないか。自分をより追い詰めることなんて口にできない。かと言って、さっき以上のうまい誤魔化しもできない。俺は無言で返事をするしかなかった。
「いいです。先輩が教えてくれないのなら。直接パパに聞くまでです」
梓は立ち上がり、制服を着直して俺に背中を向けた。
「ま、待てっ！　俺はいいのか？　こんなチャンスなんて滅多にないぞ？」
自分を餌にするなんてな。俺が終わりかけてる。さー、こっちを向け。
「もし、先輩に対してパパが何かをしたと言うのなら、梓はパパを許しません」
梓は振り返ることなく言って、体育倉庫を出て行った。
えっと、あいつ、怒ってた？　今までに聞いたことのない梓の低い声。本気で怒ってたのか？
もしかしたら、俺は大きな勘違いをしていたのかもしれない。梓が俺の立場を利用するなんて、全く逆で、そんなことしたくないのかもしれない。自分の父親が俺に圧力をかけることを嫌がっているのかもしれない。だから、許せないなんて言ったのか？
そうだとしたら、止めないといけない気がする。俺のせいで、あいつが親子喧嘩をすることになる。俺のせいで。
はっ！　そんなの大いに結構じゃないか。喧嘩でもなんでもして、俺に構うことをやめて欲しいね。そうだよ、お前ら親子に散々振り回されてきたんだ。金持ちだからって、人の人生までどうにかなると思ってんじゃねえよ。さすがの梓だって、完全に父親に逆らえるはずがない。娘に甘い父親だって、梓の我が儘を完全に放置することなんてしないさ。これを期に相応の相手を見つけておとなしくす

ればいいんだ。それが当たり前なんだよ。そもそも生きてる世界が違い過ぎるんだ。こっち側にしゃしゃり出てくるんじゃねぇ。家に閉じ込められて監禁されてしまえばいい。

……なんて。

何考えてやがる。そんなの、あまりに無責任じゃないか。あいつにはもう、友達がいる。それを紹介したのは誰だ。あいつはもう友達と触れ合う楽しみってのを覚えちまった。

このままじゃダメだ。本当に家に閉じ込められてしまうことになったら、可哀想すぎる。千佳にも倉敷さんにも裕也にも合わせる顔がない。やっぱり、どうにかしないと。

だけどその前に、

「ほどいてくれーーーーーーーっ！」

体に絡みつくネットは、次の授業で鍵を開けに来た生徒に解いてもらった。俺の顔を見て「大変ですね」と納得されたことが少し残念だった。

俺は今、神宮寺家の前に立っている。正確に言うと、物陰から様子を覗っていた。先生には梓関連で早退すると言ったら快く承諾してくれた。便利だ。

神宮寺家が西洋を思わせるような立派な洋館で、正門から玄関までは車で行っても差し支えのないほど距離がある。屋敷の大きさもそれ相応で、下手をすれば高校のグラウンドくらいは建坪だけで埋まってしまいそうだ。

場所は知っているものの、中に入ったことがあるのは中学の時に梓の父親から脅しを受けた時のみ。それもいつの間にかあの人の前にいたから直接正面から中に入ったことはない。正門にはガードマンが一人、侵入者を防ぐべく警棒片手に直立不動していた。俺の顔が知られているのかわからないが、すんなり通してくれそうな雰囲気はない。

梓の携帯には繋がらなかった。繋がっていれば、こんなところに自ら足を運ぶなんてしない。なるべく近付きたくない場所だからな。

とは言え、このまま引き返すことはできない。学校には梓と斎藤さんの姿はなかった。梓は聞いてみると言って出て言ったのだから、直接聞くために帰って来てる可能性が高い。あれこれ考えてもこの状況が変わるでもなく、俺は一度息を飲みこんで、神宮寺家の正門へ近付いて行った。

ガードマンの鋭い視線が浴びせられる。少し強面の、四十歳くらいの男の人だ。どうやら梓の知り合いという認識はされていないようだった。興味本位に中を覗き込むことすら許してもらえなさそうな様子だ。どんなセキュリティーがかけられていても華麗に忍び込むルパンのような真似はできない。説明して通してもらうしか俺には道はないのだ。

「ここは神宮寺家です。用事がないのなら早々に立ち去りなさい」

まるでＲＰＧの門番のような言い草で門前払いを喰らう。

「あの、神宮寺梓さんの友人で、ちょっと用事があって会いたいんですけど中に入れてもらえませんか？」

下手な理由はつけられない。忘れ物とか、連絡とか、中継されかねないから、あくまでも直接会いたいと伝えるんだ。

「申し訳ないけど、今日は旦那様にもお嬢様にもアポのない者は通さないように言われていてね。用事があるのならきちんとアポを取りつけてそれからにしなさい」

「梓さんの携帯に繋がらないんです。今日じゃないと、っていうか今すぐ会いたいんですけどどうにかなりませんか？」

「ダメだ。これ以上は警告になる。早く帰りなさい」

くそ、ダメか。隙を見て……どうにかなるもんじゃないか。警戒されれば近付くことだって叶わなくなりそうだ。俺は踵を返し、その場をあとにした。

でも、やっぱり梓は家に帰って来てるんだな。それがわかったところでどうにもできないのが現実だけど。

さて、どうしようか。どうするかなんて、ひたすら携帯に連絡するしかない。今はそれだけしかできない。帰りながら、何度も梓の携帯を鳴らしていた。コール音は虚しく響くだけで、あの元気な声が耳に届くことはなかった。メールも送ったけど、返事は来ない。

家に帰り、部屋の中でベッドに寝転がる。いつもより早い時間、部屋の中はまだ明るい。平日の夕方に家にいるなんてどれくらいぶりだろうか。天井を見上げながら溜息を吐いた。

あいつ、どうなったんだ。

相変わらず俺の携帯は鳴っていない。

起き上がり、試しに机の引き出しのモニターを操作してみたけど、電源が入ることはなかった。

「向こうからだけの一方的な機械かよ。ハイテクなのに、役立たず」

愚痴を吐いても返って来る言葉もない。

あの家には夜中に忍び込むなんてことも無理だろうな。本当に待つことしかできないのか。

再びベッドに寝転んだところで、バタバタと階段を駆け上がる音が聞こえた。

「梓！？」

思わず身を起こし、部屋のドアに目を向ける。

何かを期待していた。

「お兄ちゃん！」

勢い良くドアを開けて入ってきたのはあゆみだった。俺がこの時間に家にいることが珍しいのか梓がいることを期待してか、目を輝かせ満面の笑みを浮かべていた。

「あゆみ……」

俺はそのまま力なくベッドに背を預けた。

「あれぇ、お兄ちゃんひとり？」と不思議そうな顔で聞いてくる。

「ああ、そうだよ」

「なんだぁ、梓お姉ちゃんは？」

「……さぁ、途中で学校抜け出したからなぁ」

「ふ～ん。またどこかに行ってるなら、お土産買って来てくれるかなぁ？」
「どうだろうな」
この前、梓が日本にいなかった時とは違う。あのときは帰って来ることがわかっていた。一時の休日を楽しんで、また忙しない毎日が始まるものと嘆息していた。今度は違う。あいつが戻って来るのかわからない。顔を見せるかわからない。言いようのない不安が俺の中を駆け巡っていた。
「あゆみ。お前、梓のこと好きだよなぁ」
「うんっ。お姉ちゃん面白いし、いっぱいいろんなこと教えてくれるからぁ」
「……あんまり変なことは教えてもらうんじゃないぞ？」
その日、梓から連絡がくることはなかった。

翌日は静かな朝を迎えた。
朝食を取り外に出ると、眩しい太陽の光が俺を照らす。じんわりと汗をかく湿気を纏う暑さで、制服の衣替えが待ち遠しい。
これで左腕を梓に占領されていたらこの上なく鬱陶しかったはずなんだけど、やはりあいつは姿を見せなかった。こんな暑さの中でこそ、リムジンでのお出迎えがありがたく思えるもんだってのに、なぁ？
寂寞とした中、学校へ足を進め始めた。
梓のペースに合わせるでもなく、自分のペースで歩みを進める。足音は一人分。規則正しくリズムを刻み、迷うことなくまっすぐ進む。ちらほらと生徒の姿が見え始めると、それに紛れるように歩く。これは、去年まで当たり前だった登校風景だ。ただひたすらに、何を考えることもなく歩いた。たまに額の汗を拭い、鞄を空いている手に交互に持ち換えながら。
いつもより五分くらい早く学校に着いた。いつもの昇降口もどこ

か違って見える。上履きに履き替えて、廊下を進む。階段を一つ上ると、見知った人物に遭遇した。
「あ、おはよう」
「おはようジョン。なんだか久しぶりだね。あれ、今日は一人かい？」
いつもの柔和な笑顔で挨拶してくれる倉敷さん。何気ないことでも、友人に会ったことで少し安心できた。こんなにも、一人っていうのは心細いものだったのかな。
「ん、まぁね」
余計なことは話すまいと思うけど、俺が一人でいること自体珍しい。そんな俺の状況に、倉敷さんが口出ししないはずがなかった。
「へー、喧嘩？」
「喧嘩、じゃないけどね。ちょっと……」
「何だ、元気ないね。喧嘩じゃないとしたら……ひょっとして、おめでた？」
「違う！」
「はっはっはっ。冗談だよ。そんなに盛ってるようには見えないしね。で、どうしたんだい？　お姉さんでよかったら相談に乗るよ」
そんなに悩んでるように見えるのか。気をつけないと。
相談……でもな、これは俺と梓と、あの父親の問題だから。
「ありがとう。でも大丈夫だよ」
「そうかい」
倉敷さんは残念そうに肩を落とす。
「面白そうだと思ったのに」
「さいですか」
倉敷さんと別れ教室に入ると、少しだけ注目の的になった。
そんなに俺が一人でいることが珍しいのかね、クラスメイト諸君。珍しいよな。ひそひそと小声で話すのはやめて欲しい。ま、余計なことをいろいろ聞かれるよりかマシか。男女関係の恋話が楽しいお年頃だしね、みんな。

自分の席に着くと、背中が妙に肌寒かった。頬杖をつき、窓の外を眺める。話しかけてくるクラスメイトは誰もおらず、そのまま朝のＨＲが始まった。

静かな、本当に静かな一日だった。授業中にスタンドミラーを見ても、誰もいない席。いつもより目を向ける回数が多かったような気がする。昼休みも一人で過ごし、滅多に行かない図書室に足を運ばせてみた。賑わっているものの知り合いは誰も見当たらない。適当に本を取り、パラパラとページをめくり時間が過ぎる。生徒の数が減ってきたところで、それに合わせるように本を戻し教室に戻った。

何事もなく放課後まで時間は過ぎ、早々に荷物を持って教室を出た。俺と梓の噂話しが耳に入るのが嫌だったから。

これが、俺の望んでいたことだったのか。普遍的で、平和な日常。特に変わり映えのない学生生活を送ること。他人に紛れ、大衆の一員として、無難な時間を過ごすこと。目立つことなく、学業に専念し、たまに友達と遊び、テスト勉強にもがき、体育祭で汗をかき、クラスメイトと協力して文化祭の催しを考える。それが普通で、充実した学生生活だと思っていた。

生徒のほとんどが何かしらの部活に所属していて、放課後にそのまま学校を出る生徒は少ない。遠くでは千佳と倉敷さんがいる吹奏楽部の練習の音が聞こえる。グラウンドの方からは野球部かサッカー部かの掛け声が聞こえる。校内放送では放送部が古典作品を読み上げていた。

何にもしてないんだな、俺。

一人になって空っぽな自分に気付く。一年前はそんなこと考えなかった。それでも学校の外には梓がいたから。

「よっ。一人？」

いた。俺と同じで何もしてない奴が。

裕也が思わず腹が立ちそうなうすら笑いを浮かべて肩を叩いてきた。こんなときはこいつでも役に立つもんだ。

「おう、友よ」
「聞いた。神宮寺さんと喧嘩したんだって？」
「……倉敷さんか。意外だな、倉敷さんと交流があるなんて」
「馬鹿にしないでくれたまえ。自慢じゃないがこれでも十二回デートを断られている」
ほんとに自慢じゃないな。
「梓とは別に喧嘩してるってわけじゃないからな」
「その割には背中が寂しそうだったけどね」
「うっせ。たまに一人だからそう見えるだけだろ」
「はっは、強がるのはよしたまえ。たまには男同志で帰るかー」
この前は男同士がどうのとか言ってたくせに。でも、心強いのは正直なところだ。男同士で帰るのだって、どれくらいぶりかもう忘れた。
帰りはどこにも寄り道せずに、真っすぐ帰った。下校途中は裕也が知りたくもない女子の情報を俺に教えていた。見せてもらったマル秘ノートには女子の住所や血液型、性格やスリーサイズが事細かに書かれてあった。どうやってこの情報を手に入れているのか聞きたくもないが、女子の性格まで熟知しているのにうまくやれないこいつは相当馬鹿なんだろう。
家は近所だけど、俺の家の方が先に見える。家の前まで一緒に歩き、「じゃあな」と軽く片手で挨拶した。その別れ際、裕也がこんなことを言った。
「倉敷さんから言われたんだよ。真が元気なかったから、『私は部活だから、君が一緒に帰ってやってくれないかな』って。羨ましいよ、お前はさ」
それだけ言って裕也は「じゃーな」と背を向けて帰って行った。俺はそのまま呆然と裕也の背中を見送っていた。
なんだよ、それ。ははっ、気を遣わせちまって、情けない。
ちくしょうめ、良い奴じゃないか、裕也。倉敷さんにも、明日それとなく礼をしようかな。

部屋のベッドで横になっていると、あゆみが帰ってきてまた梓のことを聞いてきた。相変わらず、電話もなければメールもきていない。「風邪で休んでる」と適当に誤魔化してあゆみのゲームの相手をした。すっかり腕もなまってしまってあゆみに勝てなかった。練習する暇もなかったからなぁ。

その日も、梓から連絡がくることはなかった。

翌朝、家を出ると千佳が待っていた。

「あ、おはよう。真」

「よう、お出迎えか？」

なんとなく予想できたことで、それほど驚かなかった。

「な、なに？　その当たり前みたいな感じ」

照れ臭そうにそっぽを向く千佳の横に並ぶ。

「行くか」

「う、うん」

今日の足音は二人分。少し距離があり、歩幅を合わせる必要もなかった。

しばらくは、二人とも無言で歩いていた。

多分、千佳は梓のことを聞きたいんだろうな。落ち着きがなくちょくちょく制服を気にしたり、髪を撫でたり、気を遣っているのか聞きにくいだけなのか。暑さと湿気が嫌な空気を生む。話しを切り出したのは、俺の方からだった。

「なぁ、倉敷さんから聞いたのか？」

「えっ？　あ、うん、そう。梓ちゃんと喧嘩したって」

「はぁ……喧嘩じゃないんだけどな」

「そうなの？」

千佳は前から俺と梓の父親との兼ね合いは知ってるから、話してもいいかな。

「うん。まぁ、いろいろあって口を滑らせてさ、梓の親父さんのこ

と」
「それって、真が注意されてたってこと？」
「注意っつーかもう脅し。はっきりとは言ってないんだけど、梓の奴、どうも俺が親から圧力かけられていることが気に入らなかったらしい。それで、父親に事情を聞くって学校飛び出してそれっきり。連絡はないし、こっちからも連絡がつかない」
「じゃあ、携帯も取られて家から出してもらえなくなってるとか？」
「多分、そうだろうと思う」
「そっか……」
そのあと、お互いにまた長い沈黙が続いた。
長い上り坂も中腹に差し掛かり、校舎の屋上付近が見えてきたときだった。
「いいんじゃ、ないかな？」
千佳は足を止め、ぼつが悪そうにおもむろに口にした。
「何が？」
通り過ぎた足を止め、振り返り尋ねる。
「このままでさ。真だって、困ってたでしょ？」
……そうさ、俺もそう思ったよ。
俺が望んで、梓の奴は別に望まなかったもの。無理矢理結びつけた形だったが、友達になった。千佳と倉敷さんと裕也。
「梓と遊ぶのって、迷惑だったか？」
「えっ？　……ううん。迷惑だなんて、思ってないよ」
「あいつさ、お前らと遊ぶのが楽しいって言ってたんだ。たしかに突拍子もないことだってするけど、街でショッピングしたり、ゲーセン行ったり、そんなのが楽しいんだとさ。楽しいって、知ってしまったんだ。俺だけじゃ教えてやれなかった。言い訳に使うようで悪いけど、このままじゃ梓に悪い気がしてさ。何とかしてやりたいって、思ったりする」
千佳はうつむいて黙り込んだ。その横を、登校する生徒が何人か通り過ぎて行く。

やっぱり、本心では迷惑と思ってるんだろうか。
そのまま、秒針が一周するくらいうつむいていた千佳はようやく顔を上げた。
「それで、真はどうするの？」
真剣な眼差しで真っすぐに俺を見て聞いてくる。
「どうするって、連絡がくるのを待つしかないんだ。梓の家に行ったけど、門前払いされたし」
「じゃあ、放課後にもう一度行こう。みんなで。みちると、裕也も誘って、四人で。梓ちゃんを遊びに誘いに行こう」
「お前……」
まったく、こいつは、本当に良い奴だ。
「……サンキュ」
「別に真がお礼言わなくても。梓ちゃんだって、と、友達だから」
頬を染めながら言う。
「でもほんとは……このままの方が……」
「ん、何か言ったか？」
「ううん！　だ、ダメダメ……嫌な女になっちゃう。さ、学校行こっ。みちるには私が話しておくから」
「あ、ああ」
千佳に背中を押されて学校について、まず裕也に話しをした。おおまかに、梓が父親といざこざがあって家から出してもらえないようだから一緒に会いに行って欲しいと。裕也は怪訝な顔をしつつも了承してくれて、休み時間に千佳から倉敷さんも乗ってくれたことを聞いた。
――そして放課後。
昇降口で待ち合わせをして、それから梓の家に向かう。
千佳と倉敷さんはわざわざ部活を休んでくれた。コンクール前なのに、悪いことをしてしまったな。今度何か奢ってやらないと。裕也はなんだかんだで豪邸に興味津々のようだった。中に入れるかわからないのに。一番覚悟を決めないといけないのは俺だな。中に入

れるとすれば、そこには梓の父親がいるんだから。
先頭に俺、並ぶように倉敷さん。後ろに千佳と裕也が並んでついてきていた。
「やっぱり、ジョンはご主人様思いだねぇ」
「ん、まぁこんな時くらいは」
「否定しないところが成長したね」と口端を吊り上げて言う倉敷さん。
不承不承、ではないが頷く。一緒に着いて来てくれるあたり、みんなも梓思いだと思うよ。
でも俺と梓とのことで迷惑かけることになるなんて。申し訳なく思うのは仕方がない。
後ろを振り向くと、千佳と裕也が細々と話しながら歩いていた。表情穏やかで、悪い顔はしていなかった。少し安心して前を向く。
「懸念は消えたかい？」と倉敷さんが俺の顔を覗き見ながら言う。
「あはは……。趣味は人間観察って答えそうだね」
「半分正解。友達思いなだけさ」
「そりゃいいことだ」
俺は苦笑して、もう一度後ろを一瞥した。
歩くこと約三十分。ちょっとした遠足気分だった。目的の洋館が見えてきて、僅かながら緊張を覚える。みんなも徐々に口数が減り、無言の思い空気が流れ出していた。
正門にはこの前と同じガードマンがいた。俺の姿を確認すると、深い溜息を吐いた。
「こんにちは。また来ました」
「また君か。残念だけど、中には通せないよ。今日はアポありのお客様はいないからね」
いきなりの門前払い。今日はせっかくみんなが一緒に来てくれたんだ。そうそう簡単に引き下がれるものか。
「そこを何とか、お願いします。いくら携帯に連絡しても繋がらないんです。家にいるんですよね？」

「連絡がつかないということは、お嬢様に会う意思がないということだ。帰りなさい」
「そんな、梓に会う意思がないなんて、そんなわけありません！」
ガードマンは頑なに首を横に振るだけ。どうあっても通してくれないってのかよ。
「私たちからも、お願いします」
俺の横に立ち、そう言ったのは千佳。続いて倉敷さん、裕也と続き、一斉に頭を下げた。
「みんな……」
俺も強くガードマンを見て、頭を下げる。願い倒しするしかない。ここまで来たんだ。みんなもここまでしてくれている。俺は馬鹿だな。合わせる顔がないなんて、みんなに助けてもらってばかりじゃないか。
「お願いします！」
「ん……んん……。と、とりあえず頭を上げなさい」
俺たちは頭を上げ、真っすぐにガードマンを見つめる。
「友達に会いに来ただけなんです」と千佳。
「うちのジョンが寂しがるので」と倉敷さん。
「学校の名物なんですよ。こいつと神宮寺さんって」と裕也。
みんなが背中を押してくれる。
「みんな、梓さんの友達なんです」
みんなを一瞥して、もう一度大きく頭を下げて俺は言った。
ガードマンは大きく溜息を吐いて、笑った。
「やれやれ、みんなでおじさんを睨まないで欲しいな。わかったよ」
え？　や、やった！
思わず飛び跳ねたい衝動に駆られるのを抑えて、四人で顔を見合わせた。
「みんな、ありがとう」
「真のためじゃないって」
「飼い主は必要だからね」

「あゆみちゃんの友達でも紹介して欲しいな」
みんな笑っていた。裕也の頭を小突いて、俺も笑う。それぞれが何を考えているのかはわからない。何かを成し遂げた達成感か、充実感か、とにかく、これで梓に会える。あいつにみんなの顔を見せてやれる。
「ちょ、ちょっと待ちなさい君たち」
俺たちの過剰な喜びを余所に、ガードマンが慌てて言う。
「わかったとは言ったがね、こちらも仕事なんだよ。中に確認を取ってからしか通せない」
一気に、俺の中の熱が引いた。
「そんな、あなたが認めてくれるのならいいじゃないですか」
「そういうわけにもいかない。雇われている身だからね、こちらとしては雇い主のご機嫌を損ねるようなことはしたくないんだ。本来ならアポなしでは確認することすらしないんだよ。こればかりは仕方がない。今から連絡するから、おとなしく待っていなさい」
「でも……っ！」
俺がさらに抗議しようとすると、倉敷さんに肩を掴まれた。首を横に振って「仕方ないよ」と俺を止める。先程の喜びとは対照的に、千佳と裕也も影を落としていた。
ガードマンがトランシーバーで連絡を取り始める。
「あー、警備の山本です。今、お嬢様の友人という四人のお客様がいらっしゃってますが、どうしてもお嬢様に会わせて欲しいとおっしゃっています。いかがいたしましょう。名前は、えーと」
「来栖真です」
こちらの顔色を覗いながら話す。俺は睨むようにガードマンとトランシーバーを見つめた。
「えー、来栖真という者です。……はい……わかりました」
そこでガードマンはこちらに手の平を向けて『待て』と合図した。
「……はい……いえ……了解しました。それでは……」
ごくり、生唾を飲み込む。告白の返事でも待っているかのように、

緊張で胸が張り裂けるかと思う一瞬。
ガードマンの山本さんは一呼吸置いて、静かに言った。
「残念だけど、お嬢様が会わないとおっしゃっているそうだ。申し訳ないがここを通すわけにはいかなくなった。早く帰りなさい、君たち」
血の気が引くのがわかった。そして、急に頭に血が上る。
「そ、それは本当に梓が言ったんですか！？　何かの間違いです！　梓が会わないなんて言うはずないですよ！　直接会って話しますからここを通して下さい！」
「しつこいぞ！　先日も言ったはずだ、これは警告なんだよ。子供相手に手荒な真似はさせないで欲しい。これ以上は不審者としてしか対応できなくなる。少し考えればわかるはずだ。ここは神宮寺様のお屋敷だ、理由はそれだけで十分なはずだよ」
「ぐっ……！」
くそっ！　くそっ！　くそっ！　梓が俺たちに会わないだって？　そんな馬鹿な話しあるわけないだろ！　きっとあの父親だ。梓は俺たちが来たことを知らないはず。知ってたら、きっと……。
きっと……来るよな？
「真」
「千佳、あいつは俺らが来てるって知ったらきっと――」
「帰ろう」
「あっ……」
わかっていた。
千佳も、倉敷さんも、裕也も、俺も、諦めていた。
帰り道は誰も言葉を口に出さず、重苦しい空気の中、足取りも重かった。
梓が会いたくないなんて、そんなことを言うはずがないって、思ってる。思ってはいるけど、梓が言ったんだって、そう思う俺もいる。
本来なら、梓は俺らなんかとは知り合いになるはずもない世界の

住人なんだ。梓が普通の高校に通って、一般人の友達がいるってこと自体不思議なことなんだ。あいつが前に言ってた友達なんかとはまるで違う。そこいらにいる普通の高校生なんだ、俺たちは。梓が俺たちと関係を切るって言ったとしても、何もおかしいことはないんだよな。いくら街の庶民的な遊びが楽しかろうと、それは一時の気の迷いで済ませられることなのかもしれない。俺とのことだって、そうじゃないのか。

そうだよ、何度も思ってきたことなんだ。梓は住む世界が違うんだ。梓は自分が住まうべき世界に帰ったのだ。それがごく自然で当たり前のことなんだ。梓だってきっと気付いたんだ、違うってな。

「ジョン」

「……なに？」

歩きながら倉敷さんが話しかけてくる。今ならば、無駄足だったねとか、フラレたねとか、捨て犬になった気分はとか、そんなこと言ってもらった方が気休めになる。

「何を考えてたんだい？」

「……別に」

「君がご主人様を信用しないで、誰が信用するんだい？」

「信用？」

「そうだよ。さっき言ってたじゃないか。あいつがそんなこと言うはずがないってさ。私はあずあずのことはまだよく知らないけど、ジョンがそう言ったんだから、そうなんだと思うよ」

……信用か。あいつがそんなこと言うはずがないなんて、よく咄嗟にそんな言葉が出たもんだ。

ああ――そうだ。

あいつが俺のことをどれだけ好きかよーく知ってる。散々追いかけ回されてたんだ。俺がどれだけあしらおうと、あいつは無理矢理にでも隣にいた。ここはひとつ、自惚れてやろうじゃないか。

あいつが俺に会いたくないはずがない！

今だって『せんぱ～い』とか言って特製俺抱き枕にでもしがみつ

いているに違いない。倉敷さんと撮ったプリクラを眺めているに違いない。どうやって連絡を取ろうか考えているに違いない。隠し録った俺の声をレコーダーで聞いているに違いない！　あいつは変態で、ストーカーだからな！

勘違いでも何でもいいさ、思いっきり自惚れてやる。

そう思うと、自然に笑みが零れた気がした。

「倉敷さんって、本当に人間観察が五割？」

「八割に訂正しようか？」

クスクスと、面白そうに笑う。

「それが懸命だね」

まったく、どれだけ人を見透かす気だよ。

「なーに話してるの、二人とも」

「うーん、趣味について？」

千佳も、今日はありがとうな。お前が言ってくれなかったら、ここにはいなかった。

「倉敷さんは僕が目をつけたんだからな！」

裕也も、わざわざありがとな。

「１０１回目のプロポーズ、同一人物で実現してみるかい？」

「え、えと、今何回断られたんだっけ？」

「覚えていないような変態はお断りだね」

「よっしゃ！　一回追加！」

「あっははははっ、何それー」

ははっ、最高だよ。お前ら。

――そして、梓の家にみんなで押し掛けてから、一週間が経った。

いまだ梓は姿を見せず、連絡もない。

教室からは梓が置いたスタンドミラーも取り除き、黒板までの見

通しが良くなった。
いらぬ噂も立っている。フラレたとか、誘拐されたとか、妊娠したとか。耳に入る噂もいちいち否定して回るのが面倒なのでどうぞご勝手にって感じだ。
俺だって詳しいことはわからないんだ。梓から連絡がない理由なんて。閉じ込められているっていうのはただの憶測で、今は家にいるのかどうかもわからない。何と言われても仕方がないのが現状だった。
「あの、来栖くん……」
そんな中、梓の隣の席の坂本さんが話しかけてきた。意を決したかのように、恐れを抱いているようにも見える。そんなに話しかけにくいものかな、クラスメイトってのは。
「あー、なに？」
なるべく声色を明るく返してみた。
梓がいなかったら俺って普通だよね？
「あ、あの、神宮寺さんって、どうしてるの？」
……こいつは驚いた。
千佳でも倉敷さんでも裕也でもなく、ただのクラスメイトである坂本さんが梓のことを尋ねてきたのだ。ただの、は失礼か。梓の隣の席だし、迷惑かけてたしな。そして、勘違いかもしれないけれど、坂本さんは心配そうな面持ちだった。
「来栖くん？」
「あ、ああごめん。梓ね、多分家にいるんじゃないかな？　俺も詳しいことは聞いてないんだ」
「あっ、そうなんだ。ごめんね、来栖くんなら知ってるんじゃないかなって」
それは正しい認識ですな。俺以外に梓のことをわかる奴がいたら少しだけ嫉妬してしまう。それよりも、
「でも、どうして？」
「それは、学校に来ないから心配で。病気か何かで寝込んでたりす

るのかなって。クラスメイトだし、他のみんなも心配してるよ？
それに、神宮寺さんがいなかったら何か寂しいし。あっ、こ、これはね、来栖くんが困ってる様子が面白いんじゃなくて、教室が明るくなるっていうかさ……」
……だとよ、梓。よかったじゃないか。ぜひ、梓に聞かせてやりたい言葉だ、やべーよ、涙もんだぜ。
いつからだろう。梓がスタンドミラーを置いて、心底迷惑そうだった坂本さんが梓を心配している。他のクラスメイトもだって。ほとんど俺としか話さず、いつもいつも変なこと言ってて、それでもすっかりクラスの一員じゃないか、あのお嬢様も。もう二ヶ月以上経つもんな、このクラスにあいつが来てから。
あいつ、いつまで引きこもってるんだよ。
俺だけじゃなかったぞ？
心配かけさせやがって。
「坂本さん、お願いがあるんだけどさ」
「うん、何？」
「それをさ、今度梓の奴に言ってやってくれないかな。心配してたって」
「え？　うん、言えばいいの？」
「ああ、言ってくれるだけでいいよ」
早く、戻って来いよな。
さすがによ、一週間以上も音沙汰なかったら俺もおかしくなってくるんだよ。
静か、過ぎるっつーの。退屈、裕也の相手も飽きた。寂しい、そんなもん通り過ぎた。
本当におかしいよ。おかしすぎるだろ。
俺は――梓に会いたかった。

太陽の笑顔で　？

おかしすぎる。

梓に会いたいなんて、そんな世迷言が頭の中を巡っていたその日、事態が変化を見せた。

それは全く予想できなかったことで、突然の出来事だった。

来訪者、授業中に何の前触れもなく現れるなど、誰が予想できようか。梓があれなら、やっぱりあんたもそんな感じってわけか。金持ちの世界はＴＰＯとは無縁の世界なのか？

「失礼します」

静寂の中、突然教室のドアを開けて入ってきたのは、見覚えのある黒いスーツ、聞き覚えのある低くて重い声、黒いサングラス、もはや懐かしくも感じられる梓の専属警備人、斎藤さんだった。

「げっ」

俺は思わず声を上げる。その声も教室内のどよめき声にかき消された。そりゃそうだろ、あんな黒服サングラスのいかついヤクザみたいな人が授業中にいきなり現れたらいかんでしょ。言葉は丁寧なんだけどね、ここはカタギの世界っすから。

斎藤さんは口を固く結んで教室内を見渡す。ターミネーターだありゃ。

目が合った。多分。サングラスだからよくわからないけど、俺の方へまっすぐ歩いてくる。目的は俺か。って俺しかいないか。

斎藤さんが俺の目の前に立つと、クラスメイトは一斉に静まりかえる。こっち見ないで、もっと騒いでて下さい。

「こ、こんちは。はは……お久しぶりですね」

愛想笑いでご挨拶。む、無言で前に立たないでくれませんか。ちびりそうだよ。何かしましたかね、僕。毎日梓の携帯鳴らしてるのが迷惑だったとか？　それくらいでこんなこと来ませんよね、よね？

「来栖真さん」

「は、はいっ！」
声が裏返った。クラスメイトは唖然としてこちらを見たり、手を合わせて拝んだり。え、俺殺される方向？
「今からご同行願えませんか？」
「えっ、い、今？」
そ、そうだよな。こんなところで手を出したりしないよな。い、いや、俺何も悪いことしてないから。してませんから！
「い、いやぁ、あの、授業中ですし」
「むっ。これは失礼しました。では、ここで待たせていただきます」
へ？　ま、待つって……。
斎藤さんは先生に向かって一礼したあと、俺の後ろの梓の席に座った。クラスメイト一同、まだ唖然としていたが「続きをどうぞ」という斎藤さんの一言で前を向いた。先生は一度咳払いしたあと、何ともやりにくそうに授業を再開した。注意くらいしてくれてもいいんじゃないんですかねえ。
俺はそのまま無言のプレッシャーに耐えながら授業を受けた。
そして授業が終わり、ガタン、と後ろで席を立つ音が聞こえた。休み時間だというのに教室内は静かなまま。これはみんなのためにも教室を出て行った方がよさそうだ。
「い、行きましょうか」
「では、外に車を停めてありますので」
わお、早退決定。坂本さんに目配せすると頷きが返ってきた。先生への説明は任せて大丈夫みたいだ。
教室を出ると言うまでもなく注目の的。みんなの視線が気持ち悪い。ヤクザに連れられるいたいけな少年そのものだ。これなら梓と一緒に注目を浴びた方が遥にマシ。
授業の合間で、さすがに昇降口付近には誰もおらず、そこで俺はやっと目的を聞いた。
「あの、どこへ行くんですか？」
「お嬢様のもとへお連れします」

一瞬耳を疑った。どれだけガードマンに言い寄っても通してもらえなかったのに、斎藤さんはあっさりと口にした。願ったり叶ったりだが、突然のことに緊張が走る。どうしていきなりこんなことを、梓は今どうしてるのか、どこにいるのか、聞きたいことはいろいろあったが、何を聞いていいのかわからずに無言で足を進めた。

でもそれは、斎藤さんの方から話してくれる形になった。

「歩きながらで構いません。昔話を聞いていただけますか？」

「え？　は、はぁ」

靴に履き替えながら答える。

外に出て、斎藤さんに足並みを揃えた。

「私の家系は先代から神宮寺様に仕えております。私は、お嬢様がお生まれになった時からそのお世話をさせていただいておりました」

表情は変わらず、淡々と話していく。

「あなたの知るお嬢様は、明るく、活発で、手に負えないほどのおてんば、といったところでしょうか」

「え、ええ」

「ですが、昔のお嬢様は今のように笑ったりすることは滅多にありませんでした。寡黙で、いつもいつも部屋で本を読んでおられたり、勉強をなさったりと、おてんばという言葉とはまるで縁のないお子様でした。実は、旦那様の奥さまはお嬢様をお産みになられてからすぐに亡くなっておりまして、それがあってか、旦那様は過保護なところがあるのです。外は危ないからと、お嬢様には外出を許しませんでした。私も、小さい子供と接するということは初めてで、正直、お嬢様とどう接してよいかわからなかったのが本音です」

母親のことは、少しだけ聞いたことがある。あの梓が寡黙だったって？　そういえば、千佳も同じようなことを言っていた。公園で一度遊んだ時、あまり喋らないで、笑わない子だったって。それが、昔の梓。

「お嬢様が小さい頃、一度だけでした。楽しそうにお話しされたことがあるのは。それは、公園で遊んだという少年のことです。我々

の目を盗み、外に逃げ出した、と言うのが妥当でしょうか。その時に出会った少年、あなたのことです」
「でも俺、その時のことは全く覚えてなくて」
「それはお嬢様もおっしゃっておりました。お気になさらずに。小さい頃、それもたった一度だけですから仕方ありません」
なんか、見た目と違ってすごくいい人だ、斎藤さん。
でも、梓が言ってたって、やっぱりあいつは覚えていたんだな。俺と梓の『遊んだ』っていう意味は違うものなんだろう。梓にとっては、多分初めての遊びだったんだ。
車に着き「どうぞ」と後部座席に招かれる。いつものリムジンとは違い、黒い高級セダンだった。そのまま車は走り出し、斎藤さんはまた話し始める。
「その頃から、お嬢様は外を眺める時間が多くなっていきました。ですが、やはり旦那様は一人で外に出ることはお許しになりませんでした。そして二年前の夏、また屋敷を抜け出したお嬢様は、偶然あなたに再会した」
「それは、覚えてます。その時の梓は、たしかに今とは感じが違いました」
「話しは変わりますが、正直に申しあげまして、私はあなたのことはお嬢様にふさわしいとは思っておりません」
ぐっ、い、いきなり不意打ちだな。わかってるよそんなこと。あんたも梓からの一方的だってことわかってて言ってんのか？
「ですが、あなたと再会してから、お嬢様はよく笑うようになりました。それはもう、本当に人が変わったように。あれから大変でしたよ。外に出ると言って聞かなくなりまして。私が護衛するという条件で外に出ることを許可されました。今じゃ毎日あなたの話しを聞かされてまいってますよ」
「それはすんませんね」
「失礼しました。しかし私は、そんなお嬢様が嫌いではありません。むしろ微笑ましく思います。今のお嬢様の方が、よっぽど年頃の女

の子らしいと思います。あなたは私にできなかったことをしてくれました。ですから、あなたにお願いします。私はこのまま昔のお嬢様に戻って欲しくはないのです」

なんだ、それ。梓が昔に戻ってるみたいな言い方を。

「梓は、今何をしてるんですか？」

「あの日以来ずっと部屋に閉じこもっています。決して部屋を出してもらえないわけではありません」

「そんな、どうして……」

それじゃ、梓が俺たちに会わないって言ったのが、まるで梓自身が言ったみたいじゃないか。

「旦那様からあなたとのことを聞いたのです。それ以来部屋にこもりっきりです。ご友人と一緒にいらっしゃった時、『会わない』と言ったのは紛れもなくお嬢様自身」

「なっ……！」

なんで、どうして……！　あれほどみんなと遊ぶのが楽しいって言ってたじゃないか。真先輩真先輩って、うざいくらいに言い寄って来てたお前がどうしちまったんだ。

これじゃ本当に自惚れもいいとこだ。馬鹿みてえじゃん、俺。それなら、梓の意思だって言うんなら、俺が会う意味なんてないじゃないか。

「あなたと旦那様の兼ね合いを聞いたあと、お嬢様はもう迷惑をかけたくないとおっしゃっておりました。近付けば近付くほど、あなたが迷惑すると。一時は旦那様との口論になりましたが、旦那様も譲れぬところはあるようなので」

そりゃそうだろう。相手がこんな平凡な高校生じゃな。へいへい、何度も言うなって。

だけど、俺にやるべきことが見えてきた。

迷惑、ねぇ。

それから斎藤さんは黙ってしまった。

そして五分ほどの沈黙が続き、目的の神宮寺家が見えてきた。

正門に立つガードマンも何事もなく車を通し、一週間前の押し問答が馬鹿らしく思える。
長い石畳の通路を走ると、正面玄関が見えてくる。屋敷の大きさに違わぬ立派な門。そこで車を停めると思いきや、屋敷の裏手の方に周り、花が色とりどりに咲く庭の横で車は停まった。
「旦那様に見つかると少々面倒なので」
やっぱり、これは斎藤さんの独断によるもの。梓に笑って欲しいっていう斎藤さんの思い。やめてくれよな、プレッシャーがかかる。
「裏口から、お嬢様のお部屋へ案内します」
目の前には扉があった。裏口と言っても貧相なものではなく、それだけでも俺の家の玄関より立派だ。
静かに扉を開けて中に入ると、まず目に飛び込んできたのはいくらするか想像もつかない、綺麗な花が描かれた壺。広くて長い大理石の廊下を見渡すと、それらしい調度品が規則正しく並べられてあった。思わずきょろきょろと周りを覗う。人の気配はせず、静かな館内だった。
「飾られている骨董品にはご注意ください。あなたが家族総出で一生働いても弁償できない額ですので。さ、急ぎましょう」
注意しろと言って急かすなんて、脅すか急かすかどちらかにして欲しい。
途中途中、斎藤さんが物陰から廊下の様子を覗い、合図をして俺を誘導する。スパイ大作戦かっての。梓に会うだけなのに、気苦労が半端ない。
学校の階段よりも広くて豪華な階段を一つ上がり、廊下を進み、曲がり、進み、曲がり、また一つ階段を上がり、妙に可愛く飾り付けしてあった扉の前に着いた。ここが梓の部屋か。もう一度一人でここに来いって言われても迷いそうだ。
「心の準備はよろしいですか？」
そ、そんな言い方されると余計に緊張するでしょうが。心の準備、心の準備、いや、大したことはない。ただぐずっている梓の尻を叩

いてやるだけだ。よし、よし、すぅー……はぁー……。
「はい」
俺の返事を聞くと、斎藤さんは扉を二回ノックした。少し間が空いて「はい……」と中からか細い声が聞こえた。間違いなく、梓の声だ。
「斎藤です」
また少し間が空き、「どうぞ」と声がかかる。
斎藤さんもどこか緊張している様子で、ゆっくりと、扉を開けた。斎藤さんはそこまでで、手で『どうぞ』と俺を招き入れる。
声を掛けながら入ろうか迷いつつ、無言で侵入。
部屋の中は赤い絨毯が敷き詰められてあり、右奥にはキングサイズのカーテンベッドが存在感を出し、その横にはアンティークのドレッサー。対して部屋の左手には飾り気のない机が寂しく置かれていて、部屋の中央にはグランドピアノが陣取っている。
教室よりも広い部屋の中、奥の出窓の前に座り、外を眺めている女の子がひとり。
久しぶりに、もう懐かしい、梓の姿。
髪は下ろしていて、薄ピンクの光沢のあるシルクのパジャマに身を包み、こちらを振り向くことなく外をぼーっと眺めていた。
斎藤さんは身を引き、ゆっくりと扉を閉める。
「斎藤さん、何のご用ですか？」
冷めている、そして平坦な細い声だった。
まだ俺がいることには気が付いていない。梓はいっこうに振り向く様子を見せず、たまに髪をかき上げ、こちらの言葉を待っていた。
「そこからだと、何が見えるんだ？」
俺が声をかけると、梓はぴくりと肩を反応させた。
「真……先輩？」
梓は少しだけ顔を傾け、こちらからは横顔だけが見える。でもそのまま、また窓の外を眺め始めた。
ちくしょうめ、斎藤さんが言ってたのは本当だった。お前が散々

追いかけ回していた男がここにいるんだぞ？　いつものお前なら飛び跳ねて襲いかかってくるだろうが。今ならば甘んじて受け止めてやるくらいはしてやるのに。
「全然連絡もしないで、何してたんだよ。みんな心配してるんだぞ？」
「……そうですか」
「この前だって、千佳と倉敷さんと裕也でお前に会いに来たんだけどな」
「……知ってます」
「みんなお前に会いたがってる。なぁ、学校出て来いよ」
「……」
……はぁ、こりゃ重症だ。どうしたもんか。こんな梓を目の前にするのは初めてだ。
「お前だって、こんなとこに閉じこもってないでみんなと遊びたいだろ？」
「……」
あはは……。
「また街に行こうぜ？　おおそうだ！　今度ゲーセンに新作のリズムゲームが入るんだってよ。プリクラも新機種が出るそうだ」
「……」
独り言になってる。ったく仕方ない。あれを話すしかないのかな。
「親父さんと、話したんだって？　聞いたんだろ？」
「……はい」
やっと喋りやがった。一番気にしてるのはやっぱそのことか。
「た、たしかにさ、お前に手を出したり泣かせたらきつーいお仕置きするって言われてたけどさ、今まで何もなかったんだし、気にすることないだろ？」
「先輩は、パパに言われてたから、今まで梓に付き合ってくれてたんですよね。梓のことなんて、別に好きでもなんでもなかった。パパのことが怖いから、仕方なく、梓の我が儘に付き合ってくれてい

た」
うっ……それはごもっとも。
そうだよ、そうだった。だけどな、お前がいなくなって、寂しいって思ったのも本当だ。会いたいって思ったのも本当だ。口が裂けてもそんなこと言えないけどな。
「違いますか？」
そこでようやく梓はこちらを向いた。
俺が知っている梓とは違う。目には覇気がなく、悲しげな目をしていた。だけど真っすぐに、俺を見つめる。そんな目で見るなよ。俺が会いたかったのは、そんなお前じゃない。
「そうだったとして、それがどうしたんだ？」
「どうしたって……」
「お前なぁ、俺が今までたった一度でも俺がお前のこと好きなんて言ったか？」
らしくねぇ、全然らしくねぇよ。
「そ、それは……言われたことないですね。寂しいな」
梓はうつむいて、小さく漏らした。
「そうですよね。先輩は昔っから困ってる人を放っておけない人なんですよね。あの時も、街で助けてくれた時も、みっちー先輩が買い物で困ってた時も、先輩は優しいから。だから……梓は……。でも、梓は今困ってるわけではありません。だから、構わなくてもいいです」
俺から目を逸らして、寂しそうに呟く。
「別に、お前が困ってるとか、そういうんじゃねえよ。お前さ、俺が好きとか言わなくても、それでも俺に付きまとって、連れ回して、どうにか俺の気を惹こうとしてたんじゃないのかよ。俺と一緒にいたかったんじゃないのかよ」
梓はバツが悪そうにうつむく。
自惚れ復活だ。お前は、やっぱり俺のことが好きだ。絶対そうだ。
「それが親父さんから俺が圧力かけられてるって知ったからどうだ

って言うんだ。関係ないだろ、お前には」
「でも、パパはやると言ったらやる人です。梓が先輩に近付けば、それだけ先輩を困らせることになるんです。迷惑をかけてしまうことになるんです。そんなの、梓は耐えられません」
あーもう、うじうじうじうじしやがって。全然らしくねぇ、らしくねぇよ梓！
すっげえ勘違いだよお前。だからって何が解決するわけでもない。でも言わせてもらう。
「いいかよく聞け！　お前が俺に迷惑をかけてないなんて今までこれっぽっちもないんだよ！　ああ迷惑だ！　お前が俺に付きまとうのはな！　だけどな、そんなこと今に始まったことじゃねえんだよ！　お前が俺のこと気遣ったことなんてあったか？　俺の都合を考えたことなんてあったか？　いまさら迷惑をかけるなんて言われてもこっちはもう慣れっこなんだよ！　ワガママお嬢様はそれらしくワガママを貫き通しやがれーーーーーっ！」
ふっ、ふふふっ、ははは っ、ど、どうだこのやろう。
梓に目をつけられたおかげで、俺はなんて苦労してるんだ。自分の撒いた種でもあるが迷惑だ。
今回みたいなのが、一番迷惑なんだよ。
だから、さっさといつものお前に戻りやがれ。いつもの迷惑で、安心させてみやがれ。
梓はきょとんとして、腹の底から言い放った俺を見つめていた。
「……ふぇ？」
「いまさら都合良過ぎだろうが。今まで迷惑かけた分、きっちり責任取りやがれ」
「えっ……それって……」
梓は一度驚いて、またうつむいて、黙り込んでしまう。
俺は、梓に近付いて、優しく頭を撫でた。
「みんなにも会って謝るんだ。心配かけてごめんなさいってな。そ、それにな、す、少しだけ寂しかったんだぞ。お、お前がいない、一

週間」
　これが精一杯だ。これ以上はどう譲渡しても言えない。現実、ここには梓の父親だっているんだしな。その関係は変わらないのだ。
「うっ……ううっ……」
「おいおい泣くなよ。ったく。明日からまた学校行こうぜ？」
　やれやれだ。これで、出て来てくれるかな。

「うあーーーーーーーっ！　先輩の告白キターーーーーーーー！」

　ええっ！？
「責任取ります！　責任取りますともっ！　さぁさぁ、愛を育みましょう！」
　な、泣いてたんじゃないのか？
「うへへへ……」
　梓はいやらしく笑い、何やらリモコンのようなものを取り、スイッチを押した。
　背後でガシャンと音がして振り返ると、部屋の扉がシャッターで覆い尽くされていた。
「なっ……！」
「うへへ……。もう逃げられませんよ。この部屋はあそこさえ封じてしまえば逃げ道はなし、そして防音効果もばっちりです。どれだけ叫ぼうと、喘ごうと、誰も気付くことはありません」
　悪寒を感じ、その場から飛びのいた。梓はゆらありと立ち上がり、獲物を捕る鷹のような目でこちらを見据える。両手も開いて鷹の爪の真似でもしているのか。涎、垂れてる。
　いつの間に復活しやがったこいつ。とりあえず逃げないと、逃げ……どこに！？
「大願成就です。この前成し得なかったことを、今っ！」
　うわあああああああああああっ！
　梓に追いかけられ、ベッドに押し倒される。どこに持っていたの

か、手錠により拘束された。万事休す。
覆いかぶされ抱き締められ、梓の匂いが、後ろからも前からも。
薄生地のパジャマが、体の感触を隠さずに伝える。
ううう……か、覚悟を決めるのか？
梓の唇が迫り来る。
俺は目を閉じて、唇を固く引き絞った。
ちゅっ、と柔らかい感触が、頬に触れた。
目を開けると、梓はとても魅力的に、笑っていた。
「先輩、大好きです。今はこれで我慢してあげます。いつか、絶対に振り向かせますから」
その笑顔に心奪われていたことは、一生の秘密になった。
ちくしょう。
可愛いな、こいつ。

エピローグ

翌日、梓はいつものように俺を迎えに来た。
髪は見慣れたツインテール。「えへへ」と笑って俺の腕にしがみつく。窮屈な登校風景が甦った。
「もう暑いから離れろって」
「えへへ、ご迷惑おかけします」
あー、余計なこと言うんじゃなかったかな。
昨日、既成事実を作ることはなかったものの、手錠で拘束されたままいろんなところを舐めまわされたり、無理矢理生着替えを見せられたりと散々だった。俺は必死で抵抗していて何を言っていたのかも覚えていない。とにかく必死だったんだ。夕食の時間が近づいて来て、父親に気付かれる前に帰らないと、ということで、帰りも斎藤さんに送ってもらった。「梓は大丈夫そうです」そう言うと「ありがとうございました」とお礼を言われたことが少しくすぐったかった。
梓が隣を歩くっていうのも久しぶりだ。今日はこのままでいい。それに、少しだけ嬉しく思うのも嘘じゃない。
「あれ～？　先輩もにやにやしちゃって。もしかして嬉しいんですかぁ？」
「ち、違うわいっ！」
「別に照れなくてもいいのに～」
「照れてないし！　照れることなんてないしっ！」
うう～、むかつくこいつ！　にやにやすんなっ！
さ、学校行こう、学校！
「なんか騒がしいと思ったら」
背中から声がかかった。今回の件ではお世話になった幼馴染、その人の声。相好を崩してこちらを見ていた千佳は「やっ」と片手を上げて朝の挨拶を敢行した。

「千佳先輩！」
梓は千佳の姿を見ると、何年も会ってなかった親友に会うように、喜々として駆け寄って行った。そして、ドーンと二人の体がぶつかる。梓の奴、一週間でブレーキのかけ方すら忘れてしまったらしい。
「うわっ。もう、梓ちゃんったら、朝から元気だなぁ」
千佳は落としてしまった鞄を拾いながらやれやれと口にした。
「千佳先輩！　千佳先輩！　千佳せんぱーいっ！」
「あっ、ちょっと！　もうっ、あははっ！」
じゃれつく二人。なんだろうね、梓の奴、こんなに千佳のこと好きだったのか？　仲睦まじい姉妹同然だ。
「千佳先輩聞いて下さい！　梓、真先輩に告白されちゃったんですよぅ！」
そして何を言う。お前の中でどういう脳内変換が行われたか知らないが、そういった事実は一切ない。どう譲っても寂しいって言ったことくらいしかないっての。
「へ、へええぇ。そ、そそそうなんだ。よ、よかったね梓ちゃん」
千佳もどうしてそう本気に梓の言葉を真に受けるかな。
まったく、少し間が空いただけじゃ何にも変わらないんだな。
うん、喜ばしいことだ。
「はいっ！　ありがとうございます！」
「う……うふふふ、うふふ……」
「いや千佳、違うからな」なんか邪悪な笑みだぞお前。
突然、千佳が俺にキッ、と鋭い睨みをくれた。
「じゃあね真。先行くから。末長くお幸せに！　ふんっ！」
「お、おい千佳！　どうし……！」
行ってしまった。なんなんだ。
「ふふんっ」と梓はふんぞり返って千佳の背中を眺める。
「ふふんて、お前は何を千佳相手に勝ち誇ってるんだよ」
「遅くなりましたが、いつかのお返しです」
お返しって、相変わらずわけわかんねぇな。

「先輩が天然っていうところが梓の救いですね」
「は？　俺のどこが？」
「教えません。梓だけの問題じゃないですからねー」てへっと舌を出して小悪魔ばりに笑う。「行きましょう、先輩っ！」あげくには一人で駆け出して行った。
ったく、我が儘お嬢様は健在だな。
あー憎たらしい憎たらしい。

学校に着くと、今までとは周りの視線が違っていた。変な目で見られていたのが、何となく、温かく迎えられているような気がした。いや、むしろ祝福？
ははは、待て待て。何だこの歓迎ムードは。ハネムーンから帰ってきたカップルじゃねえんだぞ。「仲直りしたみたいだな」「よかった、戻って来て」「喧嘩もするものなのね」「おっ、西校名物復活」「結婚式挙げて来たのかなー」誰もかれも好き放題言いやがって。喧嘩じゃねえっつーの。ほんとに、見世物だこりゃ。
だけど、それも今に始まったことじゃない。懐かしい空気じゃないか。悪くない。
生徒の群れに祝福？されつつ昇降口を抜けて階段を上がると、倉敷さんに会った。まるで出迎えるように、階段を上がった先の壁にもたれかかっていつもの柔和な笑みを向けていた。
「やあ、あずあず。ペットをほったらかしにするのは感心できないな」
言葉とは裏腹に、優しそうに笑う。
「みっちーせんぱーーーいっ！」
梓は倉敷さんの姿を見るなり猛ダッシュ。おいおい、また人身衝突やらかすつもりか。
と思いきや、やはり倉敷さんは一枚上手だった。飛び掛かろうとした梓の頭を片手で押さえ、梓は必死にその場で空回り。

「朝は苦手でさ。激しい挨拶は遠慮願いたいね」
「あ、あれ？　みっちー先輩にたどり着かない？」
朝から即興コントとは、ほんとに意思疎通ばっちりだね。
「ジョンも、おはよう。よかったね、ご主人様が戻って来て」
むーんむんむん、梓は腕まで振り始めた。その風で倉敷さんの長い黒髪が揺れる。
「ああ、まぁね。この前は迷惑かけたよ」
むんむんむんむん。
「いいよ。私もあずあずと会えてうれしいからね」
むんむんむんむんむんむんむんむん。
「そう言ってもらえると、助かる気がするな」
「むー……梓の頭の上で話してる」
やっと落ち着いたかお嬢様。
「これでひと安心だね。また時間がある時にショッピングでも行こうか、あずあず。変態もさっき見かけたから、行ってあげるといい」
裕也には、俺から礼を言わないとな。あいつもなんだかんだで俺に気を遣ってくれたから。
「何回断ったの？」
「二十一回。まだまだだね」
数えてる倉敷さんも律儀だねえ。案外脈あり、かな？
裕也には廊下で会った。
機嫌良く、ふんふん鼻歌を歌いながら女子のスカート丈チェックに励んでいた。
「おっ。久しぶり、神宮寺さん」
「お久しぶりです。変態さん」
変態と呼ぶ相手と親しくしてるのも変な話しだよな。それとも同類だと思ってるのかな。
「裕也、迷惑かけたな」
「いいってこと。神宮寺さんから女の子の一人や二人紹介してもらえれば万々歳だ」

「変態に紹介する友人はいませんよ」
ばっさり切って捨てられた。
裕也は大きく肩を落とし、教室に戻って行った。寂しい背中だな。
頑張れよ、裕也。これからは俺が応援してやる。
なにはともあれ、また騒がしい日常が戻ってきた。
今回の件で、俺は自分のことが少しわからなくなった。
俺は一体どうしたいのか。
迷惑極まりない、梓の猛アプローチ。結局、梓の父親との関係は変わっていない。相変わらず、俺は梓の我が儘に付き合ってご機嫌取りに精を出すしかないのだ。
梓との関係を完全に断ち切ることもできたはずだ。
だけど、俺はそうしなかった。
梓のいなかった一週間、寂しかった。つまらなかった。逆に言えば、俺は梓と一緒にいることを楽しいと感じていることになる。それはあながち間違っちゃいないし、否定できない自分がいる。
それなら梓のことが好きなのか、と問われれば、それにはクエスチョンマークで返すしかない。
中途半端。
近過ぎず、遠過ぎず、着かず、離れず、そんな距離が俺と梓の距離だ。
一番の我が儘は俺なのかもしれない。今はそんな位置に立っているのが心地良いと思えるのだ。梓がいて、千佳と裕也がいて、倉敷さんがいる。何も失わず、そして何も得ようとしない。
まだしばらくはこのままでいいんじゃないか。
焦らなくても、いいよな。
教室に入ると、クラスメイトが一斉にざわついた。
もちろん、俺と梓の姿を見て。
お嬢様のご帰還だ。みんな覚悟しとけよ？
「あ、あの、神宮寺さん」
隣の席の坂本さん。俺に目配せをして、軽く微笑んだ。

覚えてくれているのか。
言ってやってくれ。
「みんなね、すごく心配してたんだよ」
梓はきょとんとして、すぐに満面の笑みを浮かべた。
「みなさんっ！　心配しなくても、梓と先輩の愛は永遠ですからーっ！」
「どあほっ！　俺とお前の仲を心配してたんじゃねぇっ！」
こんな奴だけど、一緒にいるのは、悪くない。

（終わり）

エピローグ（後書き）

しゃーむです。

この度は読んで頂きありがとうございました。速効完結で物足りなかった人がいたら、すみません。

実はこの作品は別にパソコンのワードに書き留めていたもので、手直ししながら写したも同然の作品なんですね。一応、私が書くものはこのサイズがほとんどです。この続きは、シリーズものとして続編という形になります。

ですが、はっきり言ってこの先の展開はほとんど考えておりません。更新は早かったつもりなんですが、それは出来上がっていたものを写していたから。新たに加えたエピソードはありますが。

もし続編を書くならば、更新速度はぐっと落ちます。それでも、続きが気になる、読みたいと言ってくれる方がいらっしゃるなら、書いていくつもりです。

そういう方がいらっしゃったら、レビューとか、感想のところに一言書いていただければ励みになります。よしやろうという気になります。本当は感想が欲しいだけです。でも少しは次の内容も考えています。

いろいろ言っていますが、えっちらおっちら書いていきます。

ということで、次回作もよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4662u/

お嬢様のフーガ～後輩で同級生でストーカーで～

2011年7月15日03時10分発行